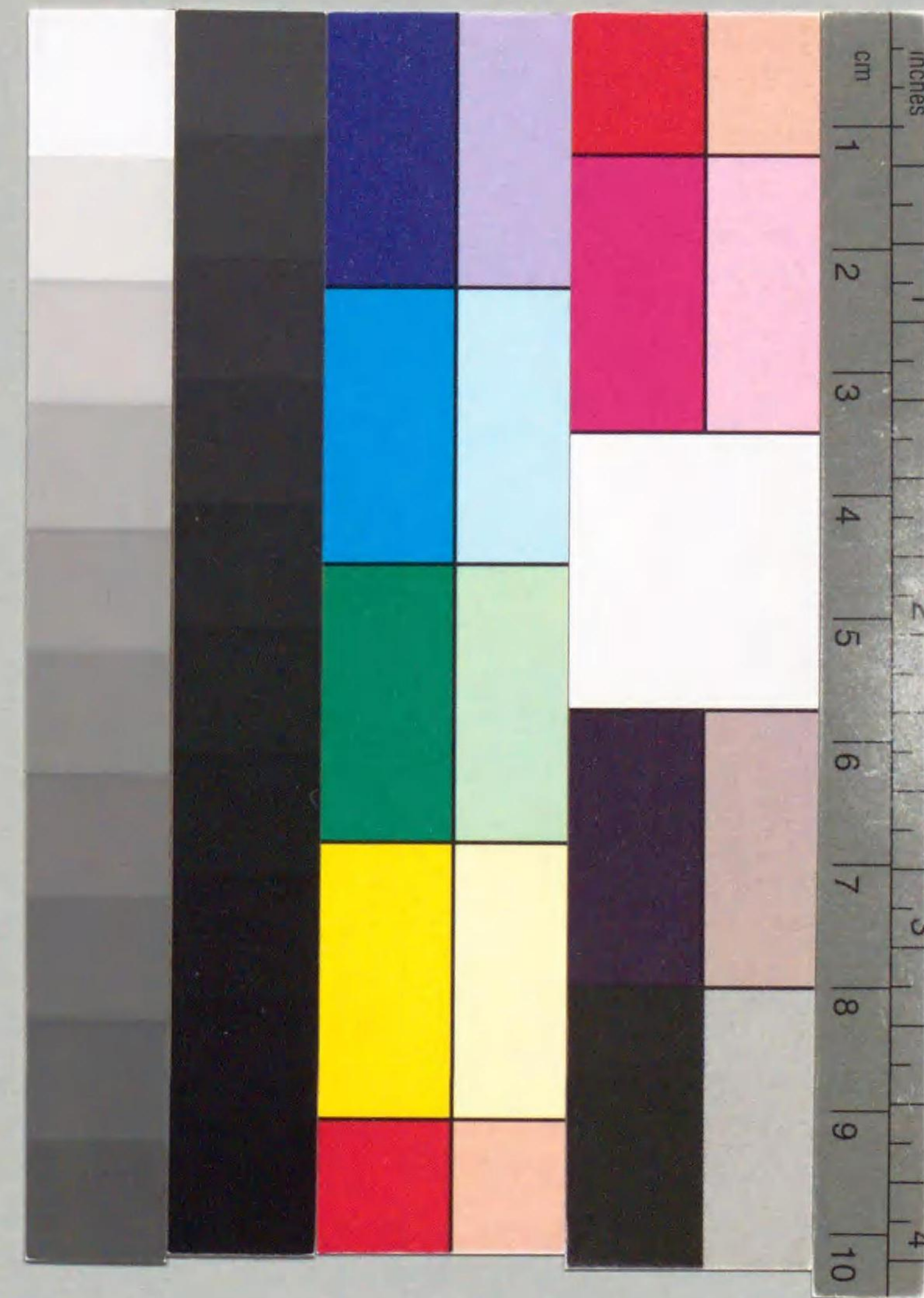


918.6
Ta977k



00298633



一般資料

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

卷 一 十 第

珊瑚の心・戀の野曠・驛廢

會 行 刊 集 全 袋 花

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

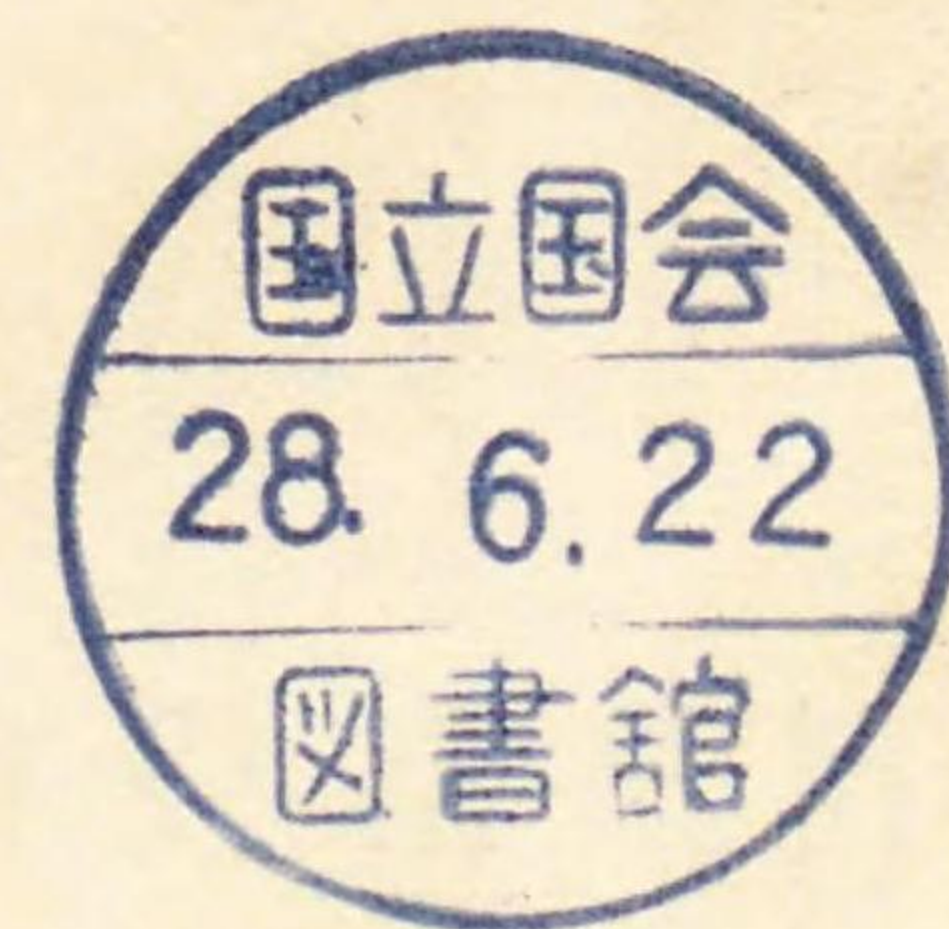
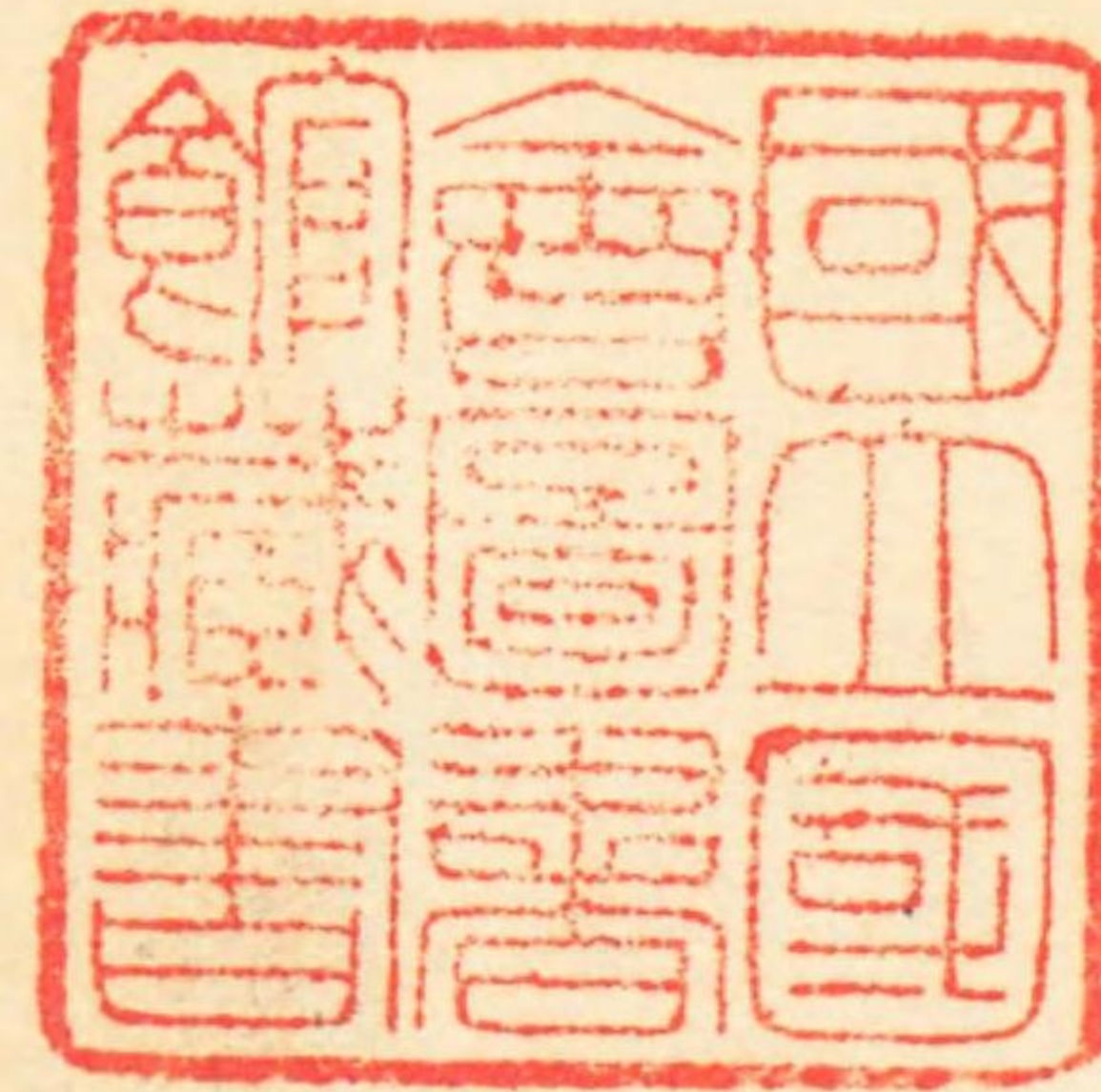
卷 一 十 第

珊瑚の心・戀の野曠・驛廢

會 行 刊 集 全 袋 花



著者 (てに港戸神月十年三和昭)



298633

花袋全集 第十一卷 目次

序 文 (正宗白鳥)

廢 驛 一

曠野の戀 三五

心の珊瑚 四七五

解 說 (加能作次郎) 七九一

目 次

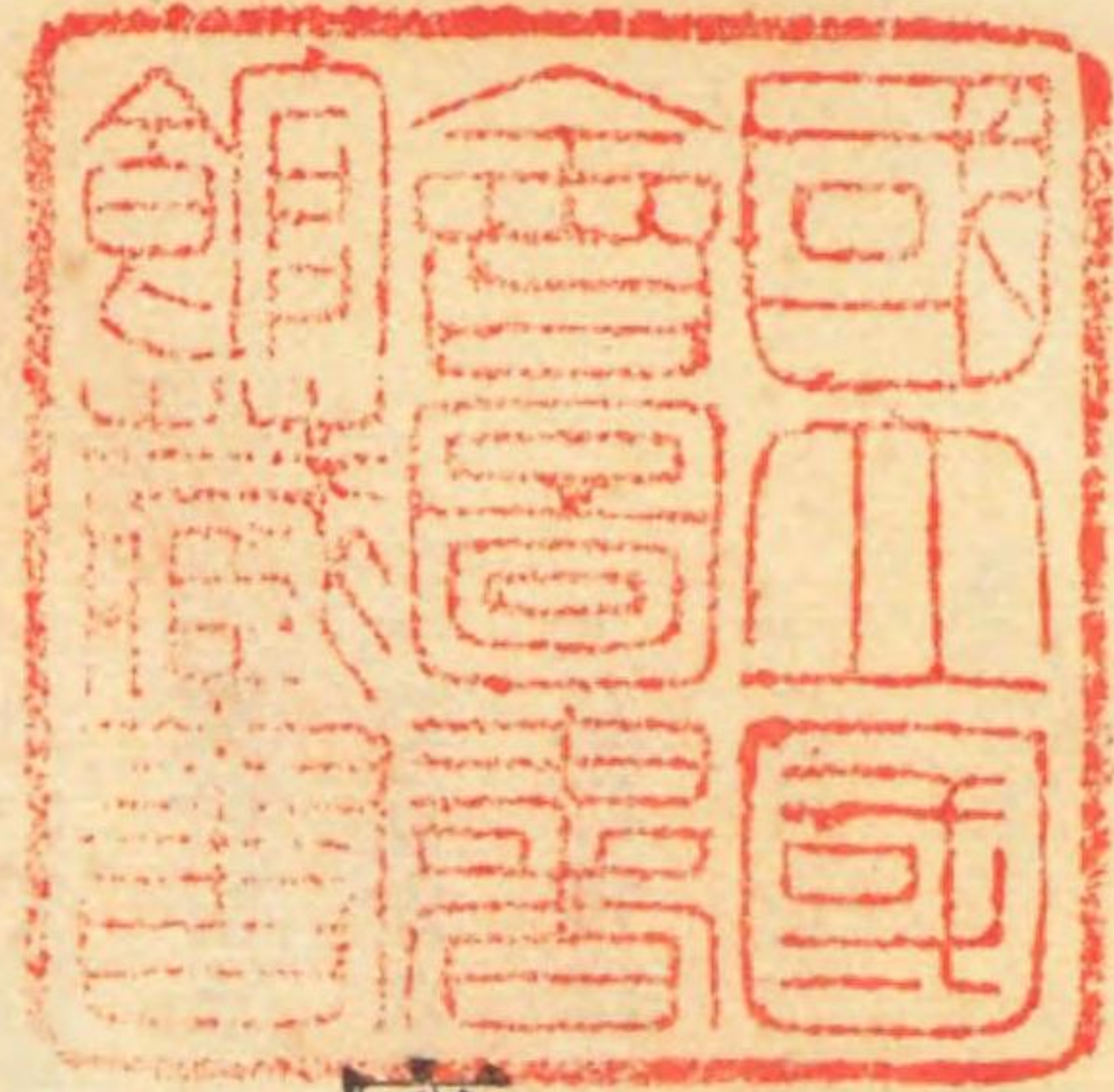
序 文

正 宗 白 鳥

田山花袋氏は、自然主義文學の中心人物であつた。この自然主義といふものは、西洋傳來の風潮を、一知半解に模した借りもののやうに思はれて居るが、花袋氏は年少の頃から日本の純粹の古典を充分に翫味してゐたので、氏の作品には上皮を取つて見ると、中は日本傳統の文學味がたつぷりしてゐるのである。一時の外來の刺戟によつて咲いた、色彩香氣の稀薄なあだ花ではないのだ。氏の作品の永久性を有つてゐる所以である。殊に復古精神の盛んならんとする今日、自然主義文學主唱者たる

氏の作品を新たに検討して、そこに「物のあはれ」を見たり、萬葉ぶりの素朴さを見たり、日本の風土の讚美ばかりでなく、日本人の禮讚の案外に濃厚であるのを見るのは、興味あることである。

廢驛



廢 驛

その一

一

『無理をしても、昨日歸れば好かつたな……』收税吏の加藤は、窓の方をじつと見詰めるやうにして言つた。雪は降り頻つた。昨夜寝る時にはまだチラチラ落ちてゐた位であつたが、今朝起きて見た時には、最早五六尺以上にもなつてゐた。一體、その山の中は、雪の深く積るところで、一夜の中にすつかり降り籠められて、一週間も十日も出て來ることが出来なかつたといふ話はよく聞いてゐるが、しかもこれほどとはかれも思つてゐなかつた。

それでもかれは今朝一度出かけて見るつもりで、脚絆をつけたり、合羽を着たりして、旅舎の店の入

廢

驛

口のところまで出るには出て見たのであつた。

『さア、まだ、通れねえこともなからうとは思ふけども……』

旅舎の主人は、厚ぼつたいどてらを着たまゝ、そこに立つてこんなことを言つてゐた。奥の厨にも、大きな木の根の燻つて燃えてゐる圍爐裏を隔て、手拭をかぶつたかみさんが、女中と一緒にせつせと働いてゐるのが、ぼかしのやうになつて隠見してゐた。

『何處が一番危険なんだね?』

『さあ……。別にけんのんツていふこともねえが……。えらい雪だでな、此處等のは……。里のは丸で違ふでな……。吹きでもされたら、とてもえらい目に逢ふでな……。』かう言つて主人の長兵衛は、入口の戸を客のために明けて覗いて見て、『何うもわりいな……。今日は吹くかも知れねえ!』

『急いで行けば、吹かない中に、鹽野町まで行けさうなもんだがな』

『鹽野町まで行ければ、心配はねえが、何うも無理だな……。峠あたりがひどいでな……。』

『さうかな?』

『私に言はせりや、今日は一日待つて見る方が本當だ……。何うも危ない……。保証は出來ねえ……。』

『さうかな?』

そこに、一時間ほど前に出て行つた二人づれの旅客が、雪達磨のやうになつて、轉け込むやうにして

戻つて來た。『とても駄目だ……。まごまごすりや雪に埋つて了ふ……。えらい目に逢つた!』

『そんなにひどいかね?』かう加藤は訊いた。

『ひどいにも何にも……。かう目も何も見えなくなつて了ふからね。やつと歸つて來たんですよ、これでも!』

『峠まで行つてかね?』

かう主人も訊いた。

『何うして何うして? 峠どころか、十町ほど行くと、村があるな、あそこを出て、谷にかゝると、丸で吹晒らしさ……。眼つぶしでもかけられたやうだ——』

『ぢや、思ひきるか?』爲方なしに加藤はかう言つて、合羽をぬいで、そのまゝ二人の旅客の飛び込んで行つた圍爐裏の方へと入つて行つた。やがてつゞいてそこにやつて來た主人は、烟たく燻ぶつてゐる木の根を燃すために匏屑を一つかみ入れた。火はぼつと大きく燃えた。

雪の話——この吹晒しでは一里はおろか一町でも歩けないといふことだの、體がすっかり氷つて了ふであらうといふことだの、雪國に生れた身でもあんなひどいのに逢つたことはないといふことだの、それからそれへと盡きずに話された主人の話では、かういふ風に他の村と全く數日交通を絶つといふことは、決して珍らしくないことで、一年の中に五度も六度もあるといふことであつた。『かういふ山の中だ

でな……。どうもしやうがない……。葡萄峠と言へば、昔から雪の深いので名代のところだから……。まア、ゆつくりお當んなさい……。』かう言つて主人は更に櫓を五六本加へた。

二

二人の旅客が二階の室の方へと引取つて行くと、あとから上さんが女中に吩咐けて、大きな臺十納に焼落ちを一杯入れて持つて行かした。

『加藤さん許へも、持つて行かせませうか？』

かう上さんは莞爾しながら言つた。

『さうだな……。僕のところにも入れて置いて貰はうかな』

『かういふ日には、炬燵でも暖にしておかなければやり切れないからね』山の中にしてはいくらか垢ぬけのした、三七八の色の白い、何方かと言へば愛憎のある上さんは、かう收税吏の方を見ながら言つて、『それでも、もう爲事はすんだんかね？』

『まだ、残つてゐるんだけども、どうもしやうがない……。』

『何處だね？ 本宿かね？』

『本宿にも、葡萄にも、何方にもある……。そら、何ッて言つたかねえ、利右衛門、あそこなんか、

ひどいね。面倒なことにならないやうに、三度までも足を運んでやつたけども、何うしてもよこさねえよ……。それに、僕を見ると、何處でも鬼でも來たやうに思ふんだからね……。』

『全く奴等に取つては鬼だからねえ！』

今まで黙つて、煙管で煙草をふかしてゐた主人は笑ひながら言つた。

『いや鬼どころか？ 何うかして面倒なしにすむやうに、親切に行つてやるんだのに……。さうは誰も思はない。一度きりで、行かずに僕が放つて置けば、何うしたつて、五里も六里も歩いて、一日つぶして町の本署まで届けなけりやならないんだから……。それを思ふから、來た次手だからと思つて煩さく行くんだけども……。』

『すつかり村は疲弊しきつて了つたからな！』

主人は溜息をつくやうにして、慨くやうに言つた。

『昔から、かうでもなかつたんでせうがな？』

『昔はよかつた……。』主人はいくらかその時分を思ひ出すといふやうにして、『何しろ、此處は越後と羽前の國境で、東から來るものは、何うしたつて此處は通らなければならなかつたんだから……。人通りだつて随分あつたんだな。現に、私の曾祖父時分には、宿屋で儲けて金持ちになつたものが澤山ある位だつたんだから……。それに、この家は、これでも、北中の太田屋ツてな、昔からきこえた宿で、殿

様なども泊つた家ですからな……。何でも、昔は、かういふ風に雪が積つても、それでも馬が出たさうですからな……。私が覚えてゐるだけでも、昔と今とは大した變りやうだと思ひますね。』

『汽車はたうとう向うに取られたんですか？』

かう訊くと、主人は黯然として、

『骨は折りましたがネ……。たうとう向うに取られて了つたですよ。』

『何うかならんもんでしたかネ。』

『汽車はもう眞平だ！』上さんは突然に傍から口を挿れた。

『まア、女は引込んでだまつてゐろ！』主人は聲高く、ちよつと血相を變へるやうにしたが、すぐ元の調子になつて、『汽車では、つくづく世の中は思ひのまゝにならないものだと感じましたよ。私は、その爲めには、命も投げ出して奔走したんですけども……。何しろ、一緒に一生懸命になつて呉れるものがありませんでしたからな……。費用の點から言ふと、海岸の方よりも、この峠にかゝつて來る方が、トンネルが長いだけに少しは餘計にかゝりさうでしたけれども、この山のものももう少し熱心になりさへすれば、何うにでもならないことはなかつたんです。残念ですな、實際……。もう、この山の中の村は浮ぶ瀬がなくなつて了ひました……。』

『汽車の運動は眞平ですよ。もう……。』

上さんはまたかう言つて、そして背をそつちに向けた。

三

主人の胸には、種々な懊惱が疊まれてあるらしく、暫し低頭加減に黙り込んでゐるが、燻ぶる煙を避けながら、

『もうこの山の中も駄目です！ 自滅するばかりです！』

ひとり手に溜息が出て來るやうにして言つた。

『残念でしたな！』

收税吏の加藤も、いくらかその事情を知つてゐるので、それに調子を合せるやうにして言つた。

『汽車が通じないときまつてはもうこんな山の中にあるたつて、しやうがないですよ。腐つて死んで了ふばかりですよ。實に残念だ！』かう言つて長兵衛はまた黙り込んで了つた。かれは何んなにその爲めに奔走したか知れなかつた。かれは何うしてもその線路を此方に取りなければならぬと思つた。かれは自分が村長であるのを幸ひ、同じ山の中の二三の村落と共同して、郡會から縣會、それから鐵道省の方までも運動に運動をかさねた。そのため、かれが使つた金も決して少い額ではなかつた。

主人は夢にまで汽車がその山の中を通るのを見たことを思起した。葡萄の宿から明神の祠のあるところ

ろまで、大きな隧道が穿たれて、そこに凄じい音響を漲らせつゝ、白い烟を立て、来る汽車を何遍幻影に描いたか知れなかつた。『今に見ろ、屹度、汽車を通らせて見せるで……。その時は長兵衛さまにいくら頭を下けたつて駄目だぞ!』などと云つた。かれは汽車の出来た時の停車場の位置なども自分の頭で選定した。『さうだ……。あそこが近くつて好い……。あの利右衛門さんの裏の畠のところが好い。』かう思ふと、そのあたりの開けたさま——休憩店が出来たり、倉庫が出来たり、運送店が出来たりするさまから、つゞいてそこから大きな道路がすつと村の里程標のある、追分になつてゐるところまで通して出来て来るさまが夢ばかりでなしに、本當に實現されて来ることをかれは期待した。『さうなれば、村は何んなにでも開けて行く……。第一、これから山奥にかけて無限にある國有林の拂下けもドシドシやつて、皆こゝに持ち出して来る事が出来る……。それこそ、昔の宿驛時代の繁榮どころではない。……。もつと、もつと此山の中は有望になつて来るから』かれは到るところでかう演説したりした。

『でも、一時は此方も大分有望ぢやなかつたんですか。』

收税吏はかねていくらか聞き嚙つてゐた話を其處に持ち出した。

『有望どころぢやねえ……。全く此方のもんだつたんです……。だから一層残念なんです……。もう少し村の重立つた奴がわかつてゐれば好いんだけど、目先のことばかり考へて、金を惜しんで——少し村上に行つて酒でも飲んでゐたりすると、さういふ運動を好いだしに、村長め、勝手なことをしてゐるで……。』

と、すぐさういふ風なんですから……。だから折角拵へ上げたことも、皆な駄目になつて了りました!』

『さうばかりも言へませんよ!』かう上さんがまた傍から口を挿れた。

『黙つてをれ! 女なんか男の心持はわかるもんか……。それは、お前達には、亭主が落附いて、家に入つて田圃でもして貰ひさへすれば、それで好いにきまつてゐるが、男には、もつと大きな仕事があるで……。』

『それは、こんな山の中にゐるよりか村上で茶屋酒でも飲んでゐる方が好いにきまつてゐるからね』かう上さんは皮肉に言つて、そして今度は立つて向うに行つて了つた。

『家庭にさへ、あゝいふ反對者がゐるんですからな……。何うもしやうがない……。』いかにも嘆かひしさうに主人は言つた。此時、屋根から雪の落ちる音が、ド、ド、ドとけたましくあたりに響いてきこえた。

四

戸外では吹雪になつたらしく、眞直にまた斜に雪片は落ちて来ずに、下から上へと吹き上げるのが、硝子になつてゐる小さな窓から見えた。

振返つて見た加藤は言つた。

『たうとう吹きになつちやつたな……。これぢやとても駄目だった——』

しかし深い感慨に満たされた長兵衛は、ちよつと其方に眼をやつたばかりで、それに返事をしやうとはしなかつた。雪は降り頻つた。風がサツと戸やら、屋根やら、したみやらに當る氣勢がした。

あたりは一時しんとつた。

と、突然、

『おつかア……』

と呼ぶ聲がした。否、したやうだつた。とそれと同時に、上さんは駆け出して、下に行つて、いきなりその裏口の扉を明けた。雪はバラバラと家の内まで降り込んで来た。

『まア行けねえで歸つて来たんけえ——』

上さんはかう叫んだ。

十一になる女の兒と九歳になる男の兒が、半ば雪に埋められるやうにしてそこに立つてゐるのが此方から見えた。かれ等は今から一時間ほど前、小一里ある同じ部落の小學校へと雪を侵して出懸けたのであつた。『今日は休んだ方が好かねえか』と父親も言ひ、『休めよ、今日は吹きになるとわるいで……』母親も留めたのであつたが、言ふことをきかずに、藁沓を穿き、合羽を着て、そして強ゝて出かけて行つたのであつた。

『見ろや、親の言ふことをきかねえと、さういふ眼に逢ふから、もう少しで埋つちやつたんべ？……』
上さんは口ではかう怒鳴つたけれども、急いで、そこに立つてゐる弟の方を内に抱き入れて、一杯に體についてゐる雪を拂つてやつた。つゞいて姉の方の合羽をも拂つてやつた。

『何處まで行つたや？』

『原まで行つたけども……。明さも貞三さも、もう歸る言うで。それで歸つて来ただア。』

『あゝよく歸つて来た、よく歸つて来た！』圍爐裏のところからかう父親も聲をかけた。

『學校の子供は大變だな。』

加藤はかう同情するやうに言ふと、

『遠いでね……。生徒等も可哀相でさ……。貞三も、明も歸つたか？ さうか、その方が好い……。勉強も大切だが、雪に埋つちや大變だ。』

『本當だとも……。いくら勉強しても、死んぢや何にもなんねえ。』加藤はこんなことを言つて笑つた。上さんは姉弟の合羽を取つたり、藁沓を脱がせてやつたり、袖口や襟元まで吹き込んだ雪を取つてやつたりしてゐるが、そのまゝ奥の火燵のある室の方へと伴れて行つた。

『原まで行けば、學校はもうぢきぢやねえか？』

『でも、貞三さ、あとで歸れなくなると大變だつて言うで、それで引返して来たのだアよ。』

『行つた人もあるけえ?』

『それはあらア……。牧も行つたし、龜も行つた——』

『まあ、歸つて来た方が勝ちだつたんべ……。まあ、火燵にでもあたれや』かういふ上さんの聲が圍爐裏の方まで聞こえて来た。

五

また扉が開いて雪がサツと降り込んで来た。

『えらい吹きになつたの。』

かう言ひながら、そのまゝ合羽の雪を拂つて、づかづかと入つて来たのは、この村の派出所——その里程標の立つてゐる追分から二三軒向うにある派出所に詰めてゐる巡查で、年は三十五六の、色の淺黒い、何方かと言へばやさしいところのある、莞爾と人づきの好い男であつたが、最早三年近くも此の村にとめてゐて、別に苦情もなければ評判も好く、當人自身もかうした不便な山の中にあることを別に不平に思つてゐる様子とてもなかつた。妻子もあるにはあるのであるが、それはこゝから三里ほどの海岸の町にその前にとめてゐて、そこに小さいながらも家もあり、近所の人達にも馴れてゐるので、そのまゝそこに住はせて置いて、明番には此方から自轉車で歸つて行くことにしてゐた。

『今日は生憎ですね? これでは役場にも行けませんな!』

『今日は休みだ……。』

長兵衛はかう言つて加藤のゐる隣りの席を指して、

『まあ、當んなさい……。』

『やア』(難有う……。)は口の中で言つて、そのまゝ吊つた劍を折敷くやうにして、加藤の傍のところへと入つて来た。

『今日は勝木まで行かなくつちやならない用事があるんだが、何うもこの雪ぢや行かれさうもないんで困つてゐる……。昨日行けや好かつた……。』

巡查は誰に向つて言ふでもなくかうひとり言のやうに言つて、そのまゝ濡れた手袋を手から取つて、低頭加減になつて、それを半ば火になつてゐる櫓の側に置いた。

『何うも冬はしやうがねえな!』

『昨夜の鹽梅では、こんなにならうと思はなかつた。いくらか寒氣が緩んだやうなところがあるで、今日は好い天氣になりやしないかと思つてゐたのに……。? 夜中から冷えたと見える?』

『それで、勝木まで何うして行くんけえ?』

長兵衛は訊いた。

『まア、やめるだ……。それもな、あつい奴でも飲めるといふなら行つても好いが、とてもありつけさうもねえからな……。さう言へば本家の仙吉さ、今、出かけて行つたぜ！ この降るのに？』

『何處へ？』

『知れてるアな、あつみ温海さへ？』

『まさか——』

『いや、さう言つてゐた。それはな——』かう言ひかけて巡査は笑つて、『かういふ時は、一層人情の見せ時だアな……。向うだつて、かういふ時に、四里五里も吹雪の中をやつて來たと思へば、男が可愛くなるだらうし、此方だつて面白いからな……』

長兵衛はにこ／＼と笑つただけだつた。そのまゝ黙つてゐた。しかし、その頭には、川に臨んだ温泉場が映つた。海岸からずつと山の中に入り込んで行つたやうな温泉場、そこには、この雪の降頻る中にも、三味線が賑かにきこえてゐるに相違なかつた。白粉をべた／＼つけた女達が近所の農家の旦那や若衆達を相手にして、面白く賑やかに騒いでゐるに相違なかつた。さう思ふと、馴染の女をそこに持つてゐる仙吉が、この吹雪にも頓着せず、七里も隔つてゐるその温泉場まで出かけて行く心はつきりとかれにもわかるやうな氣がした。何處となく羨ましいやうな氣もした。

六

『そんなに遠いところまでよく出かけて行きますね？』傍から加藤がかう口を挿んだ。

巡査は收税吏の方をちよつと見たが、すぐ笑つて、

『だつて、たは鬚の力には敵ひませんや……。雪が降らうが、鎗が降らうが——？』

『でも、そんな遠くまで？』

『なアに、村上と温海の色町では、この山の中の旦那衆がこれで好いお得意でさ。……遠いことなんか誰だつて考へてるやしませんよ。冬はさうは行かないけども、平生なら、午後の三時頃から、いや、夕方からでも、自轉車を飛ばしさへすれば、二時間とかゝりやしませんからな……』

『ふむ！ 自轉車で行くかね』

加藤は面白さうに笑つた。すぐ言葉を繼いで、『でも、よく、こんな山の中の人遊びますね？ かなり疲弊してゐるやうだけれども——』

『いや——』巡査はポケットから朝日の袋を出して、その時間にはなつてゐないけれどといふやうに惜しさうに一本つまみ出して、それに火を點けながら、『疲弊してたつて何だつて、そんなこと構ひやしませんよ……。いや、ことに由ると、さういふ不如意な、思ふまゝにならない時にかへつてさういふこ

とを餘計にするのかも知れませんが……。いくらかヤケ氣味でね？」

『ふむ……』

收税吏は考へるやうにした。

『さう言へば、あなたは税務署の方ですか？』 巡査は再び加藤の方を見て、『さうく、此間、山の學校のところで、ちよつとお目にかゝりましたね……。まだ、用が残つてゐるんですか？』

『いや、降り込められちやつたんです……。昨日歸れば好かつた奴を、つい、おそくなつちやつたもんだから……』

『さうですか？ それは残念でしたな……。この吹きぢや二三日は駄目ですぜ！』 しばしばと巻煙草を燻らしながら、『それでも濶海だから行けるんですぜ——村上ではとても行かれない。死ぬほど思つた女があつたつて行かれない……』

主人の長兵衛が聞いても聞かぬやうな顔をして向うを向いた。加藤は訊いた。

『さうすると濶海の方に行く海岸までは出られるわけですか？』

『さうです——勝木までは、何うやら彼うやら、少し無理をすれば出られないことはありません……。そしてそこまで出れば海岸には雪はそんなに深くありませんから——』

『勝木までは出られるかな？』

主人はかう笑ひながら口を入れた。

『行きますか？ 仙吉のあとを追つて？ 何なら、お伴しても好いですが！』 巡査は大きく笑つて、

『好いですな、かういふ雪降の日か何かに、好きな女でも引寄せて、酒でも飲んで居れば……。金なんかに替へられない氣がするでせうな……。且那衆が家を潰すのも無理はないかも知れない！』 巻煙草の烟が紫にすうと長くあたりに漂つた。

『そのために、家を潰すものもあるんですな？』

加藤は問ひを重ねた。

『何軒あるかわかりやしませんよ。私がこの山の中の村に来てからだって、あまつ子のために家屋敷を亡くして、村にゐられなくなつたものは何十人ときかない。そら葡萄の本陣、それから作藏、北中の炭屋、留吉に正五郎……。その他まだ澤山ある……』

『女のカツていふものも豪いもんですな？』

『何しろ、世の中で何が面白いって、女と賭博が一番面白いからな。』 巡査は笑つた。

『さう言へば、正五郎は何うした？ 鶴岡にまだゐるかな？』

長兵衛は訊いた。

正五郎に限らず、さうした女のために生れた故郷にも住んでゐられなくなつた人達の話が、暫しその圍爐裏の周圍にあつた。榎火の燃えたり消えたり燻つたりする間を、巡査と主人との話は縫ふやうにして續いて行つた。

加藤は黙つて聞いてゐた。別に注意もしなかつた。しかもその話から、その話の調子から、種々のことが知れて來た。巡査が入江と言つて、朝に晩にこの家に常に出入りしてゐるといふことも、主人とこれの間には、一方が曾て村長をしたことがあるにも拘らず、また年齢も違つてゐるにも拘らず、非常に親しい間柄であるといふことも——その主人が思ひもかけず矢張村上に馴染の女を持つてゐるといふことも、そのため家庭がいくら揉めてゐるらしいといふことも——或はこの古い旅舎もそのため一家離散の群の仲間入を早晚するのではないかといふことも、それとなしにその頭に響いて來た。かれはこんな山の中にも、矢張人生の波が強く押寄せて來てゐることを考へずにはゐられなかつた。

そこに上さんが出て來た。

『入江さん、行かねえんけ?』

『やめだ……』

『ぢや、おらが頼んだことも駄目だね?』 上さんは、昨夜、勝木に行くなら、そこにゐる妹の家に届けて呉れと言つて小さな包を巡査に頼んだのであつた。

『まア、しやうがねえ! 二三日、待つて貰うだ……』

『まだ行けるだがえ?』

『行けるには行けるがな、雪に吹かれて寒い思ひをするよりも、こゝにゐて、一本つけて貰う方が好いでな……』

『始まつた!』

かう言つて上さんが向うに行かうとするのを後から呼びかけて、

『一本つけてくさつせいよ……』

上さんはきこえない振をしてそのまゝ奥に入つて行つた。

『しやうがねえな!』

巡査はかう言つたが、しかし再び出て來た時には、上さんは此方から催促されるのも待たずに、赤い盆に鯰の煮附か何かを載せて、それをそのまゝそこに据ゑて、右の手に持つて來た徳利を圍爐裏の隅に置いてある眞黒な鐵瓶の中へと沈めた。

『難有い、難有い!』

かう巡査は笑ひながら言つた。

『さうけえ？ 仙吉が行つたけ？』またそこにそんな話が出て來た。『あきれたもんだな……。お貞さ、怒つてゐなかつたけえ！』上さんはこんなことをも言つた。『本當にしやうがねえな……。男ッていふものは？ 金さへありや、すぐ女だ……。』

『でも、さうばかりも限らないね。現に、僕見たいなものもあるから——』

『さうね、入江さんは堅いね。酒さへ飲まして置けばおとなしくしてゐるね。』かう言つて、上さんは鐵瓶から徳利を出して、一杯お酌をしてやつたが、そのまゝ、すぐ向うへ行つて了つた。

『何うです？ 一杯？』

巡査は盃を主人に向けた。

『いや、まア、俺アよす——。少しまだせにやららん用があるで——』

『まア、そんなことを言はずに——』

『いや、本當に……。朝つばらから酔つちやゐられねえんだ——』

『まア——』

巡査は強いて盃を主人にわたして、そしてそれに波々と酒を注いだ。

八

三四日経つても吹雪はやむやうな氣勢も見せなかつた。何も彼も全く雪に埋れ果てた。黦くとも雪は一丈以上の深さに達した。

收税吏の加藤は、街道に面した、下から階段を上つて來たところにある二階の六疊の一室に閉ぢ籠つた儘、何うすることも出來ずに爲方なしに俳句を考へたりなどして暮した。雨戸のところに光線を取るために小さな窓がつくられてあつたが、そこからかれはをりをりを外を覗いて見たりした。

いつ見ても、細かい、細かい、金屬性の砂のやうに雪が盛に空から落ちてゐた。とてもやみさうな様子はなかつた。かれはその一間向うにゐる二人の旅客とも次第に懇意になつて、後には、顔を合せさへすれば、互に挨拶を取交すやうになつた。『何うです？ これではとても止みさうにもありません……。えらい目に逢ひました。』などと言つて互ひに空を眺めた。

室を出て、疊を敷いてある廊下を通つて、階段を下に下りると、そこには、一方に厨、一方に風呂場、その風呂場と並んで、朝、顔を洗ふための高流しがあり、その上の小さな窓から、裏庭の常盤樹に雪の深く積つてゐるのが、微かに覗かれた。來た時には、その庭の向うに、隣の廣場が——一隅に薪などの積んである廣場がそれとはつきり見渡されてゐたが、今は全く雪に埋もれて、その向うの土藏さへ

も見え分かないやうになつて了つた。

風呂場とても、さう大して廣くもなかつた。夏ならば、あちこちの戸を明放して置くことが出来るので、さう大して暗くもないのであらうけれども、ちよつと戸を明けても凄じく吹雪が吹き込んで來るので、入つた時には、ちよつと風呂のあるところがそれとわからない位あたりが暗かつた。夜はまた夜で、薄暗い箱ランプが隅の方についてゐるにはゐるけれども、湯氣で蒸されてあたりは茫と白くなつてゐた。加藤が入つて行くと、壁一重隔てた向うで、『いかゞです？ お湯の加減は？』かう上さんが聲をかけた。

加藤は湯に身を沈めながら、いろいろのことを頭に浮べた。昔から長い間やつて來た旅舎、殿様が通つたり、侍が泊つたりした旅舎、その時分にも矢張、此の風呂はあつたのであらうか。その時分には、こんな風呂では、とても間に合はなかつたのではないか。否、その時には、別にちやんとした風呂場もあつたに相違ない……。この風呂場は、昔からあるにはあつたにしても、これは下々のものが入る風呂場であつたに相違ない……。たとへば、仲間とか足輕とか、また供について來た低い階級の侍達とか——。こんなことを考へると、芝居の舞臺面に似たものが頭に浮んで來た。何だかその時代の旅のさまがはつきりと目に見えるやうな氣がした。

家は何うなつたらう？ その時分から比べたら、小さくなつたのかしら？ いや、いや、そんなこと

はあるまい……。家屋はそのまゝだらう。そのまゝに五十年も、六十年も、ことに由ると百年も經つたのだらう。それにしても今の主人の祖父時代は？ 冬でも賑やかであつたかしら？ 女なども澤山に澤山に來てゐたかしら？——こんなことを空想しながら、かれはじつと深く身を湯に沈めて、白い湯氣の中に光銚なしに茫としてついてゐる小さなランプの灯を見詰めた。

かれは風呂から上ると、高流しのところ來て、水で口を嗽いで、それと同時に、まだ雪が降つてゐるか否かを知るために、そつと窓から手を出して見た。と、雪は家の内まで入つて來て、チラチラと美しく灯に光つた。

九

かうしていつまでも滞在してはゐられないと言つて、二人の旅客は、その翌日海岸の雪の少い方へと出て行つた。あとは一層さびしくなつた。廣い二階にぼつねんとひとりゐることの無聊さに堪へかねて、加藤はよく圍爐裏の側へと下りて行つた。時には、主人は奥に引込んで全く顔を見せずにあることもあれば、時には上さんがつまらなさうな顔をしてゐるく子供達を叱り飛ばしてゐることもあつた。入江巡査がそこで酒を飲んでゐるのをかれはよく見かけた。

ある日は獵師が二人ほどそこにて、頻りに山の獲物の話をしてゐた。かれ等の話すところによれ

ば、この雪はかれ等にとつて此上もない天恵で、そのため、猪も、熊も、平生より里に近く出て来るに相違ないといふことであつた。かれ等はあれさへ止めば、いつでも山から山へと深雪の上をわたつて二十里も三十里も山奥に入つて行くといふことであつた。『今年はひとつ、旨い酒を飲みたいもんだが—』などと言つて、その肥つた方の一人は笑つた。

『それで、そんなに山の中まで食物を持つて行くんですか？』

かう加藤が訊くと、

『山の中の小屋で、持つて行つた米さ炊いて食ふのさ！』とぶつきら棒に獵師は言つた。何んなに雪は積つても、そのところどころに、戦争中の兵站部のやうに、または昔の交通の宿場のやうに、穴だの、小屋だの、崖下の隠場だのがちやんと出来てちつとも不自由はしなかつた。

『何アにそんなにつらいもんどちやねえだよ。火さへ燃せばちつとも寒いなんていふことはありやしねえ……。それよりもな、獵がないのが一番怖いや……。一週間も山の中さ歩いて、猪一疋にも邂逅さないやうなこともあるでな……。』

『熊のゐるところなんか、よく知つてゐるさうなもんだがな？』

『知つてゐるにはあるがな。向うだつて命は惜しいやな……。あれで、容易に見つからねえやうな穴が出来てるよ』

『ぢや、熊を見つければ百年目！』といふわけだね？』

『まア、さういふわけだな……。』傍から主人は引取つて、『何の稼業も樂はねえさな……。おらだちの小さい時分には、熊だつて、猪だつて澤山ゐるたもんだけども——冬になりや、すぐ近くまで出て来たもんだけれども、此頃ちや、皆な山奥に入つちやつた……。それに鐵砲の打手も多くなつたにはなつたな……。』

『いや、獸も少くなつたぜ！ なア？』獵師の一人はかう言つて一人を顧みた。

『さうだな……。一時餘り考へなしに打つたでな……。』

『何も彼も段々なくなつて了うだ！』主人は感慨深い表情をして言つた。

『本當だよな』獵師達も合せた。

『かういふ山の中にあるものは慘めだよ。樹だつて、昔のやうに澤山にはねえし、獸だつて、鳥だつて、茸のやうなものだつて、元のやうに近くでは取れなくなつちやつた……。もう、こんなところにつまでこびりついてゐない方が好いのさ……。その證據には、少し氣のきいた奴はドシ／＼東京なり何處へなり出て行つて了ふぢやねえか。それでも汽車さへ此方へ取れば、まだいくら面白くもあつたといふものだが——』主人は又話を其方の方へと持つて行つた。

加藤の見たところでは、この旅舎の家庭の生活もさびしさうであつた。旅客としては殆どなかつた。さ

うかと言つて、村の人達が酒飲みにも來るかといふに、それも極めて稀であつた。昔からやつてゐる稼業であるがために、利益がなくても、そのまゝつゞけてゐるといふだけであるやうに見えた。何處の室もわるく古びて、たて附の自由にならない戸障子も到るところにあつた。そしてさうした古く衰へた大きな家の空氣の中に、唯、主人の熱い、思ふまゝにならない心だけが半ばやけになつて、紅く爛れて燃えてゐるやうなのを加藤は見た。

10

鐵瓶に湯を持つて來た十一になる娘が、眼を赤く泣き腫らしてゐた。

『何うしたの？ 弟と喧嘩した？』

半ば戲かうやうに、かう加藤が言ふと、娘はその返事はせずに、かへつて思ひ出して堪まらなくなつたといふやうに、袖を顔に當て、襖の隅の方へ行つて、後向になつて立つてゐた。

加藤は不思議さうにじつとそれを見詰めながら、

『本當に何うしたの？』

『……………』

娘はすゝりあけた。

『おつかアに小言を言はれたか？』

頭を振つて見せた。

『ぢや、何うしたんだえ？』

それにも黙つて答へずに、後向きの肩のところに波を打たせてすゝり泣きをつゞけてゐたが、暫くすると、そつと障子を明けて出て行つて了つた。

『おかしな娘だな？』加藤はかう思つて娘がそこに置いて行つた鐵瓶の湯を取り上げて、それを火鉢の上にかけて、そのまゝ調べかけた爲事の方へと頭を向けたが、その悲しさうな、唯の喧嘩ではない、また單に母親に叱られたのでもない娘の歎が、長い間加藤の頭にこびり着いて離れなかつた。さう言へば、さつき、下で何か大きな聲で主人と上さんと言ひ合つてゐたやうだつた。何にか喧嘩でもしたのではないかと思つた。

それは何處の家でも、さう思つて見れば、さう平和に睦まじくばかりしてゐるものではないが、こゝでも矢張主人夫婦は餘り仲が好い方だとは言はれなかつた。それに、性質も丸で違つてゐた。主人の燃えるやうな氣持と上さんの沈滞し切つた氣分とでは、それは丁度水と油のやうで、とても一緒に交ることとは出來さうには思へなかつた。それに、内部に入つて行けば行くほど、種々なことがあるらしかつた。身代のわるくなつたのも、主人が餘りに村のことに力を入れ過ぎた結果だといふ風に一圖に上さん

は思つてゐるらしかつた。上さんの腹では、なんでも好い村長などになつたために、つまらなく金をつかつて、村上や温海で遊ぶことを覺えたりしたと思つてゐるらしかつた。しかしそれは一旅客の觀察で、或はもつと深いことがそのお互ひの心の奥にかくされてゐるのかも知れなかつた。

夕飯の時に、膳を運んで來た四十位の女中に訊くと、

『さうけえ……。そんなに泣いてゐるたけえ……。あの兒、涙脆いでな……。』

かう變に笑つて言つただけだつた。深くその理由を話さうとはしなかつた。

加藤は一步を進めた。

『何か喧嘩でもしたのかえ？ 上さんと旦那と……？』

『え、』

女中は笑つてゐるたが、『それはな、親はな、親同士で面白くないこともあらうけど……。何も子供にまで當らんで好いすアな……。』

『親と親とのいさかひの飛沫かえ？』

女中は點頭いて、『お上さん、すぐ子供に當るでな？』

『よくやるのかね？』

『え……。もう、始終……。それに質がよくねえでな……。』

女中はかう言ひかけて笑つた。

『やきもち喧嘩らしいね？』

よく知つてゐるといふ顔の表情を女中はして、『あゝいふ喧嘩ばかりは、他人がいくら入つて行つたつて、何うにもならねえで……。まア、それでも、今日のやうに怒つて口をきく時の方は好いんだよ。黙つて三日も四日もくすぶつてゐることがあるんだから……。さういふ時は、他も困るし、子供も慘めだアな』

一一

『それぢや、ちやんと原因があるわけなんだね？』

加藤は訊いた。

『さういふわけでもあんめいけど——』流石にあらには言ひ得ないといふやうに女中は言葉を濁した。

『矢張、村上あたりに、馴染の女か何かがあるんだね？』

『そんなことも言ひますね……。』わざと話を他に外すやうにして、

『一體、お上さんもしつこいだよ。何もそんなにやきもちをやかなくつたつて好いんだよ。村長さん

でもしてゐりや、自然茶屋ばいりをするやうになるのは當り前だでな。知らん顔をしてゐる方がかしこいだな……。それに、旦那さんあれで村のためには骨を折つたでな。評判が好かつただよ。あんな村長さんはないつてな？」ちよつと言葉を途切らせて、「今度、代つて村長になつたのは、此處の分家で、甥ッ子になつてゐるだが、から駄目だアに……？」

『さうかえ？ 今の村長は、旦那の甥になるんかえ？』

『それだに、お客さん、仲がわりいだよ。汽車が此方を通らねえやうになつたで、何うしても此方の旦那が評判がわるくなつたのを、それを好いことにしてな、すつかり反對して、そして無理に辭職させただよ』

『ふむ！』(それで主人不平なんだな)あとの一句は口に出さずに加藤は頭を振つた。

『お前さんが考へて見ても、あきれたもんだべ。伯父と甥ッ子の仲でさ……。それも村のために一通りでなく盡した村長さんを、滅茶滅茶にぶつ潰して了ふことがあるかヤ？ 人情も何もありやしねえだよ』

『本當だな』

『それにな……。』さつきの躊躇にも似ず段々調子に乗つて、「上さんが、甥ッ子の方の言ふことを本當にしてるだよ。生中、汽車の方の運動をしたり、村のためを思つたりするから、金もかゝるし、遊びも

覚えるし、碌なことはねえ。だから言ふんだよ……。それアな、村長さんになれば何うしたつて貧乏になるのは、誰がやつたつて同じこんだ。だから村でも、一番金持とか、財産家とか言ふ人達は選ばれたつて村長なんかになりやしねえ。村長になるには、だから餘程自分の家のことよりも、村のためになりたいといふ立派な志がある人でなければ駄目なでさ、それを村の人達はわかんねえで、たゞ村長さんになつて威張つて勝手なことをしてゐるくれるにしか思はねえだから……』

『ふむ、それで、懊惱せしやくしやしてゐるわけなんだね？』

『だから、上さんがわりいだよ。もつと親切に旦那さんの心を考へてやらなければならねえだよ。つまらないやきもちなんかばかりやかねえで、もつと本當に思つてやらなければいけねえだよ』

『それで、旦那は今でも村上に行くんかね？』

『旦那さ、いくらかあせつてるでな、材木の方で少し儲けにやらならんなんて思つてゐるらしい。で、それで、ちよいちよい村上さアへ行くだよ』

『でも、財産だつて、さう減らしたといふわけでもないんだらう？』

『つかつたな！』

慨嘆するやうにして女中は言つた。

『でも、少し位つかつたつて、北中の太田ツて言へば、昔からきこえた家ぢやないか、ちつとやそつ

とつかつたつて、びくともしやしないだらう？」

『そでねえな……』女中は赤い盆に茶碗を載せて出しながら、『大分減らしたでな……。今ぢやもとの三つみつ一ひつもあるめいでな……』

『そんなにつかつたかな！』加藤も深く考へるやうにした。

二二

『それに、あの總領の娘は、何故か、あのお上さんと氣が合はねえでな……』

『何うしてだね？』

『何ういふもんだかな……。旦那さんが餘りに可愛がりすぎた故もあるべいかな？』

『何方だつて、本當に生した子なんだらう？』

『それはさうともな……。二人とも本當の子だアな。だから、可愛いか憎いかいふ隔てがあるわけはねいんだけども、性が合はねえとも言ふのかなア。何うもあの娘はお上さんになつかねえな』

『父さんとは好いんだね？』

『父さんなら、へえ、何でも言ふことをきくだよ。丸でその態度が違ふだで……。だから、その娘は親が喧嘩する時だつて、いつでも父親の方へ附くだでな。それで上さんが憎むのかも知れない……』

『矢張、親子でもさうかな！』加藤は争鬭の世であることを、根本から争鬭の世であることを痛感せずにはゐられないやうな顔の表情をした。

『何うもこの性の合はねえといふものは、しやうがねえもんだよな！』

『本當だな！』

これに限らず、性の合はないがために家庭の悲劇を構成してゐる事實は、そこにも此處にもあつた。現に、加藤の父母などでも、そのために死ぬまで争ひつゞけた。否それが何んなに厭な、不愉快な思ひを子供の心に刻みつけたか知れなかつた。そのために、子供はいやにいやに根性の曲つてゐるのは皆そのためでありに注意するやうになつた。かれなどでも今になつていやに根性の曲つてゐるのは皆そのためであつた。そしてそれと同じな悲劇が、かうした雪の降り積つた山の中の一族の上にもあることを思ふと、かれは暗い心にならずにはゐられなかつた。

『さういふのが一番困るねえ？』

茶を啜りながら加藤は言つた。

『本當ですよな！ 性の合はねえのは何うすることも出来ねえでな』

『元は矢張、旦那と上さんの性の合はないところから出てゐるんだな』加藤は深く考へるやうにして、『だから、さういふのは、お互に譲り合はなけりやしやうがない、お互ひに譲り合はずにゐては、い

つまで経つたつて喧嘩をしてるなけりやならないから……。私なんかも覚えがあるが、親のいさかひを見る位子供に取つていやなものはないでな』

『さうともね……』

『それは、親達も子供のことばかり考へてはゐられない。お互の心の上にも、種々なことがあるし、世間に對する成功不成功のためにも細かい空氣が起つて來るのだから、絶対に夫婦喧嘩をしないわけには行かないかも知れないけれども、そこをお互に考へ合つて、合ない性をも合はせるやうにしないでしやうがない……。それをあべこべに、性が合はないんだから爲方がないと言つて、てんでに勝手なことをしては、それこそ身の破滅、家の破滅になつて了ふからな!』

『本當だとも……。さう考へれば、紛紜いざこざが起らないんだけど、何うもそれが中々出來ねえでな。つい腹が立つてゐる時なんか、言はねえでも好いことまで言つて了うでな』かう言ひながら濟んだ膳を持つて女中は立つて行つた。

加藤はいろいろな考へに打たれて、暫しはじつと思ひに沈んだ。何處に行つても、それは人間の悲劇——家庭の悲劇であつた。人間が二人一緒になつた以上、何うしてもさうした争ひの空氣と愛の空氣とが一緒に混り合つて起つて來ないわけには行かないのであつた。かれは窓を明けて見た。雪は猶ほ降り頻つた。いつ止むとも見えなかつた。

二三

雪は次第に止み加減になつて、六日目の朝には、空も明るくなり、をりをりは太陽の所在をそれと薄雲の中に認めることが出来るやうになつた。風もぱつたり止んだ。これでは、明日か明後日までには、峠を越して鹽野町まで出て行くことが出来るであらうと思はれた。

『好い鹽梅だな……。これでは村上まで行けさうだな』

主人の長兵衛も莞爾してゐた。

『貴方も行くのかね?』

いかにも晴れて來たのが主人にも喜ばしさうなので、かう言つて加藤が訊くと、

『さアな……。おらも行かになんねえ用事もあるだが——?』

『ぢや、一緒に行つて貰へるかな?』

長兵衛は蹴躓ぐつぐして、『まア、はつきりと言へねえだが……』

向うに坐つてゐる上さんの眼の急に光つて來たのを加藤も感じた。

『お前さん、行くのけえ? この雪の降るのに?』

かう言つた上さんの態度は、いくらか挑戦的であつた。

『行かなけりあなんねえ用事もあるんだな——』

『そんなに曖昧に言はねえでも好いやな……。行くなら行つて來なな？』

何か言ひたいことのあるのをぐつと押へて主人は黙つた。

『今日行くのけえ？』 上さんは繰返した。

『まあ、好いやな、そんなこと？ 行く時は行くで……』

様子が變なのを見て加藤はそのまゝ、遠慮して二階に戻つて了つた。午後からまた少し雪が降り出した。加藤はその日はずつと二階にばかりこもつてゐた。夕方になり下りて行つた時には、圍爐裡の側に主人の姿は見えずに入江巡査が上さんを相手にいつものやうに酒を飲んでゐるのに出會した。何故か加藤には、その巡査が氣に入らなかつた。いやに大きなことを言つたり、わるくぎよろぎよると他の顔を見たりした。酒を飲むと急に氣が大きくなつて、自分が村での豪い勢力家でもあるやうな物の言ひ方をした。その時も上さんを相手に、村のことだの、分家の噂だの、溫海の女の噂だのをしてゐた。

『それでも入江さんでも、たまには歸らねえでは、お上さんが可哀相だな……』

さつきと違つて、上さんはわるく上機嫌であつた。

入江巡査は赤い顔ににやにや笑つて、何か頻に言つてゐたが、『何うも、な、これも氣に合ふ、合はん
でな、何うも、しやうがねえもんだな……。餓鬼はそれでも二人拵へたけども、何うもお方かたとは氣に合

はねえでな』

『旨いことを言つてゐる——そのあべこべだがな……』

『何アに本當にさうだよ。だから伴れて來ずに、あつちに残して置くぢやないか。好きな嬢ならとうに
伴れて來るんだがな……。何うも一人の方が好い……』

『上さんが酒飲むのをやかましく言ふのかな？』

『圖星、圖星』

入江巡査は笑つたが、そのまゝ、酔つた體をゆすぶるやうにして、

『この山の中までくつついて來て、好きな酒までとめられちやなア、それこそ生きてゐる效がないや
な！』

『本當に、俸給は皆な酒になつて了ふんだからな、入江さんは？』

『さうでもねえがな、これでも半分は嬢にやるがな……。それに、他の所得も丸きりないこともねえ
でな……』

『さうだとも、働きもんだとも——。それで酒さへ飲まなけりや、それこそあま子はべた惚れだんべ
いが——』

『なアに、酒を飲んだつて、べた惚さ……。あはは』かう入江巡査は大きく笑つた。

藁沓を穿き、合羽を着て、そして加藤の出かけたのは、その翌々日の午前のことであつた。漸くして雪は晴れた。陽は照るといふほどではなかつたけれども、それでもをり／＼雲間から光線が洩れて積雪の上へと落ちた。』とても長持はしない……。また明日は吹きになるかも知れない……。』こんなことを言ひながら、主人の長兵衛は加藤と一緒に歩いた。

長兵衛は行く行くいろ／＼なことを話した。新道が出来て、昔のやうな難澁はしなくつても好くなつたと喜んだのに、それも束の間で、その新道さへも、汽車のために全く草に埋れて了ふのは目の前に見えてゐるとかれは慨いた。かれはそれからそれへと話をした。旅客が吹雪に埋められた話もすれば、追剥が到るところに出て、隊を組まずには旅客が通れなかつた時代のことをも話した。座頭轉などいふところは、それは深い深い谷で、覗いて見ただけでも身の戦えるのを禁めることは出来ないやうなところであつた。』何んでも京都に位を取りに行く座頭をこゝから突き落して、そしてその金を奪つたといふ話のあるところですが、もうずつと昔からさういふ風に言はれてゐるんです……。』主人はかう言つて自分でもその深い谷を覗いて見るやうにした。

雪はかなりに深かつたけれども、それでもひどく滑るといふほどでもなかつた。また深く脚を没して

全く歩けないといふほどでもなかつた。雪は解けてもいけず、またあまり固く氷ほつてもいけなかつた。

『これなら、がんじきなしても歩けますな……。』

『好い鹽梅でさ……。丁度歩き加減だ……。これより柔かになつて脚が入るやうでも困るからな……。』

……。だから、今日になさいッて言つたんです……。昨日ではまだ滑つて歩けませんや。』

『さういふことは、矢張山のものでなくつてはわからないね』かう言つたが、加藤は今朝發つて來る時、娘がさびしさうにして見送つてゐるのを思ひ出して、

『今時分は金ちやん、さむしがつてゐるでせうね!』

『何うもあいつはあとを追つて、しやうがありませんや——。學校が休みなら、村上に伴れて行くんだけども』

『この前にも村上に伴れて行つたんですか?』

『え……。』

『何うも母さんになじまない娘は困りますな……。』

『ヤ……。私にもな、いろんなことがあるでな』主人も思はず引込まれたやうにして、

『お前さんなんか、まだ若いでそんなことはわかるめいだが、人間には思ひのまゝにならねえことがあつてな……。そのため、理窟はわかつてゐても、つい、そつちに曲つて行つて了うことがあるだで。』

あとへ引返さうと思つても、何うしてもあとへ引返されねえでな……」

『まア、しかし、あまり強く感じない方が好いですよ』

『よく、それでもお前さんはわかる……。わかに似合ねえ……。しかしな、世の中は、思ふまゝになると思つては、思はぬ失敗をするでな……。世の中には何うしたつて、わるい奴があるだで。すきを覗つて、つき落さう、つき落さうとする奴があるだで……。それをよく考へねえと、しくじるな……。それでもお前さんなんか、まだ若いし、こんな山の中にもなくつても好い體だで、立身しようと思へば、いくらでも出来るでな……。それが羨しいな……。お役人も好いがな、もつともつと奮發して東京へでも何處へでも出て、えらくならつせいや。おらのやうに山の中に、それもいつ亡びて了うかわからねえ山の中にも好いだでな……。俺などでさへ、こんな山の中にゐねえで、何處かへ突走つて了ひたいと思ふことは何遍あるかわかんねえでな』かういかにも染々した調子で主人は言つた。

一五

『何うも矢張り、私達でも思ふやうにはなりませんよ。いつまでこんなことをしてゐたつてしやうがない。何うかして東京に出て勉強でもしたいと、片時だつて思はないことはないのですけれどもな。收税吏なんか役人の屑ですからな』

『さうじやともな……。一生懸命になりさへすれば、こんな田舎にゐて、わるく燻ぶつてゐるよりも、生き效だけでもあるでなア。俺も一度は東京に行つて見たが、いゝところだでな……。少し奮發すれば、何んなにでも立身出来るでな』

『本當にさう思ひますね……。』加藤も染々とした調子で、『まア、今度歸つたら、よく考へて見ませう。伯父が東京にゐて立派に暮してゐますから、頼めば、何うにかして呉れないこともなからうと思ひますから——』

『その方が好い、その方が好い……。』心から賛成したやうにして主人は言つた。

暫く竝んで歩いてゐるが、やがて言葉を繼いで、『俺などでもな、二十代にはいろ／＼なことを考へたもんだな。東京に行つて修業するだつて、ひとり黙つて突走つたこともあつたア。一年程芝にゐたつげが、爺が心配して迎へに来てな。無理ヤリに伴れて行つた。一人息子だつたでな。何うしてもあとを取らねぢやなんねえつていふでな？』

『そんなことがあつたんですか、貴方にも……。？ いくつの時でした？』

『二十一の時だつた……。山にゐたつてしやうがねえ！』と思つてな。それで置手紙をしてつゝ、走つただよ。もしかしてな、追手につかまつてはと思つてな。村上から山越しに、米澤の方へ出て行つて、福島まで二日歩いて、それから汽車で東京に出た……。あの時分は、汽車だつて、まだいくらも出来て

のなかつたでな、新潟まですら出来てゐなかつたで……。あの時歸らずにな、爺の言ふことをきかなかつたなら、今時分、こんな山の中でぐずぐずするやうなハメにならねえでも濟んだと思ふと、今でも残念でしやうがねえやうなこともあるな』

『その時、何にならうと思ひましたね？ 役人ですか？ それとも軍人ですか？』
加藤はかう訊いて見た。

『醫者になるつもりだつたぢやな……。人の苦しんでゐる病氣を治してやる。こんな好いことはねえと思つてな。それ、何とか言つて、大きな病院があつたな、芝に？ 愛宕さまの下のところか？ あそこに學僕にならうと思つてな、毎日のやうに、何とか言ふ博士を訪ねて行つたことがあるだよ』

『さうかな、そんな時代もあつたんですかな？ 貴方にも……。それから山に歸つて来て何うしました？』

『爺が生きてゐる中はな、それでも家のことを一生懸命にしてゐましたよ。それに、歸るとすぐ足留めに婢を持たせられたでな！』

『今のお上さんかね？』

『いやさうぢやねえ。さう言つちや何だが、その初めの噂さへ丈夫で生きてゐてくれると、こんなにもならなかつたと思ふんだが？ その噂は死産をしてあとがわるくつてな。その翌年死にました……。』

今のは、お前さ、それから三番目だアね？』

『三番目？ 女房運がわるいんですな？ それでは？』

『全く女房運がわりいな……。中の噂は、一年ゐて、わけがあつて、出してしまつたよ……。子供等は、皆今の噂ののだがな。今の奴は、遠い親戚になつてゐてね。あれなら治まるべいつてね。勝木に一度行つて出て來てゐたのを、爺が貰つてくれたんです……。だから噂なんか何うでも好いつていふ見だな。その時分には少し政治運動が面白くなつて來てゐただで。やれ政友會が何うの、憲政會がどうの言つてゐましたよ。馬鹿ですな。本當の自分のことはそつちのけにしてそんなことに大騒ぎをしてゐたんでな！』

その時分のこと——自分が郡會議員になつた時分のことか、主人の胸には歴々と映つて見えて來た。

一六

『田舎の人達は皆なさうですな』

『そしてまた、この田舎の政治運動がいけねえだよ。一生懸命になるでな。そのため財産を亡くしたり何かするものが澤山あるし、人間としてもわるくなるだよ。いやに小生意氣になつてな。むづかしいことを言つてな……。俺なんかも矢張さういふ時代があつただよ』

『でも、郡會にでも出れば、ちよつとは面白いこともあつたでせう?』

『まア、酒でも飲むことを覚える位なもんだな……。碌なことはねえな……。しかし、田舎にゐては、少し志でも持つてゐるものは、何うしても、さういふ風になるだよ。田圃いぢりばかりもしてゐられないでな』

『それはさうですとも……。田舎といふところは退屈なところですから……。』

主人は黙つて歩いてゐるが、いろいろなことが思ひ出されて來るらしく、『それにしても、こゝを通るとな、これ位残念なことはねえと思ふだな……。向うの山にトンネルを掘るつもりにちやんと計畫して置いたのに。それが夢になつちやつたからな!』

『もう、何うしても駄目ですかね?』

『駄目だ……。もう、向うで工事にかゝつてゐるで……。それにしても、馬鹿な話さな、此方を通る方が、トンネルだつて、長いには長いけども、一つですむのに、向うを通れば、五つも穴をあけねいけりやなんねえだ……。馬鹿な話さ——』

『矢張、いろいろなことが中にはあるんでせうな?』

『矢張、金だよな。寒川のSやTが金を出したで、そこで、向うでは十分に運動が出来るやうになつた……。こつちだつて、もう少し踏張れば好かつたに、本當に残念でしやうがねえ!』

『まア、しかし、濟んだことはいつまで言つたつてしやうがねえでな』

見ると、路は深い深い谷へとかゝりつゝあつた。それは丁度大きな釜の縁を辛うじて縫つて通つて行くやうなところで、成ほど此處で吹雪にでも逢つては、とても立つて歩くことなど出來さうには思はれなかつた。それに、雪も固く氷つてゐて、わるく滑り勝だつた。あるところは、互に手を取つて歩かなければならなかつた。

『此處が一番難所ですか?』

かう加藤が言ふと、

『さうだな……。吹雪の時は、一番此處があぶねえな……。何しろ、吹晒しで、風がひどいな……。昔も、此處はよく旅人が這つて通つたつていふ所だ……。でも、こゝよりもつと危いところがある……。』

『それは何處ですか?』

『それはな。吹雪の時ぢやねえ。三四月の、これから春にならうとする時の雪崩だがな。それは、もう少し先きの片側谷になつてゐるところだ。そこは、此處よりもまだおつかねえだよ。此處はな、這つてくつついて行けば、何うやらかうやら通れるが、そこは、春の温氣で、いつか根が緩んでゐるで、サツと雪が一度になだれて落ちて來るだでな。あつといふ間もなしに、一遍に雪に埋つて了ふだよ。今

はそんなことはねえけれども、三四月の頃は、それはおつかねえにも何にも……』

『それはもつと先きですか？』

『明神さま知つてゐるかね？ あそこから向うに一つ谷を越したところだよ。少しの間、片側谷になつてゐるところがあるがな？』

『あゝ、ある、ある！』

『あそこだよ』

釜の縁のやうなところを通る時には、幸ひにさう大して強い風も吹かず、這はずに、立つたまゝ歩いて行くことが出来た。あたりはすべて唯真白だった。山も、谷も、絶壁も、何も彼も……。そしてその白皚々の中を黒い二つの點のやうになつてかれ等は歩いた。

二七

明神の祠のあるところは、全く雪に埋もれて、ちよつと見ては、それと所在もわからないやうだつた。それは昔からきこえた祠で、歴史に名高い武將が曾て此處に戦捷を祈つたこともあれば、有名な旅行家が危険な三月の雪崩の時分に此處を通つて、生きた空もないやうな思ひをしながら、上に重なり合つた深雪を仰いで通つて行つたところでもあつた。加藤は曾てその旅行家の書いた昔の本を見たことが

あるので、一層その明神の祠をなつかしいものに思はずにはゐられなかつた。

その話を主人に持ち出すと、主人は、『は、は、さういふ人がゐるたかな……。それはいつ頃の人だえ！』かうめづらしさうにして訊いた。

『さうですな、文化文政頃ですか？』

『文化文政？ それではもう百年近くなるだな？』

『さうですな……』

『その時分は、なか／＼賑かだつたらうからな！』

『何でも葡萄で泊つて、それから北中の貴方の旅舎の前を海岸の方には行かずに、もつと山の中の方に行つたらしいです。まだ、あれから先に峠がいくつもあるらしいですな？』

『え、ありますとも……。鶴岡まで行くには、まだ峠が三つあります。この葡萄峠ほど大きくはないけどもな……』

『何でも、その手前の峠で、雪の上を滑つて、深い深い谷に落ちて、死ぬやうな目に逢つたことが書いてありましたよ。それに、その本に挿畫が入つてゐますが、刀をさし、合羽を着、脚絆をつけて、ちよん鬚に結つた旅客が、供を一人つれて雪の中を歩いて行くさまが描いてありましたが、それを見ると、不思議な氣がしますな……。なつかしいやうな、さびしいやうな、それでゐて何處かまた面白いや

うな……』

『は、は、そんな人があつたかな……。兎に角、昔は越後から此方に入るには、何うしたつて此處を通らなければならなかつたんだから——』

こんな話をしながら、いつか二人は明神の祠のある大きな岩の下のところへとやつて來た。そこには古い杉の木が一本あつて、その下には雪もさう深くは積らずに、焚火のあとなどが歴々と残つてゐた。

『はア、あの吹雪でも、獵師達は此處までやつて來たと見えるな……。』こんなことを言つて、主人もそこらに落ち散つてゐる杉の枯葉を拾ひ集めた。そしてそれにマッチを摩つた。

火はやがて燃え出した。

『こゝにはな、もとはな、大きな杉の木が何本となくあつてな、それはかうかうとしたもんだつた。

遠くから見ても、雪に埋れ切れずに、黒くなつて見えてゐたもんだがな……。それがすっかり伐られて了つてな……』

『御維新の後ですか？』

『いや、つい、十年ほど前でさ。それもな、此方の縣のものが伐つたんならまだ好いけども、新潟縣の技師がやつて來てな、此方で知らん中に伐つて持つて行つて了つただ……。あとで此方が騒いだが、もうすんで了つたあとでな……。私なんかも、ちやんと覚えてゐるが、それまでは明神の森は立派なも

んぢやつたがな……』

『その旅行家の通つた頃とは、それでは、感じも丸で違ふんですな』

『本當にあの杉だけは惜しかつたな……』

『堂守も何にもゐなかつたんですか？』

『百年ほど前には、神主もゐたさうだつたが、とても貧乏村では世話がしきれねえで……。それでいつとなしに空家になつて了つたんぢやな』

成ほどそこには雪に埋れ果た小さな堂がしよんぼりとして立てゐるばかりであつた。二人はそこで雪の上に着莫塵を敷いて休んで結飯などを出した。焚火は盛に燃え出した。

一八

そこで一時間ほど過して、それから峠へとかゝつた。成ほど雪は深かつた。ところに由ては、路が全くわからなくなつてゐて、低い杉の梢の上を踏んで行かなければならなかつた。平生慣れて通つてゐればこそ迷ひもせずに行かれるやうなもの、普通の旅人では、とても足を着けることすらも難かしいらしかつた。『これぢやまだ四五日は本當に通れねえな』こんなことを言ひながら、主人は先に立つて歩いた。

葡萄といふ驛は、峠の懐になつてゐるので、今まで通つて来たところに比べては、思ひの他に雪が淺かつた。昔は北中と一緒に非常に榮えた宿場で、本陣には越後女が常に十二三人も入つてゐるやうな賑かさをを見せてゐたが——また長い長い山道を此處まで入つて来て、山と山との間に、白く夕炊の烟の靡いてゐるのを目にして、旅客はほつと呼吸をつくの常としてゐたが、今は家屋も半ばは畠や空地になつて、ぼつぼつと齒の抜けたやうにそこゝに人家が點綴されてゐるばかりであつた。これが昔の本陣だといふ家は、八分通り倒れかけてゐて、荒壁だの垂木だのが慘めに雪に埋もれてゐた。

『矢張、この村だつて貧乏してゐるんですな……』

『でもな、この葡萄は俺の方などよりは好いだよ。早くから目が覺めた人があつて、これはとても駄目だ……かうしてゐては、村と一緒に人間も自滅しなけりやならねえと氣が附いて、殖林も早くからやつたし、養蠶も十分に出来るやうになつてゐるでな？』

『桑は好いんですか？』

『俺があたりよりは好いな……第一餘程地面が好いでな……。それに肥料だつて十分入つてゐるで』

『まあ、今日ぢや、かういふところは、養蠶でもするより他に何うすることも出来ないでせうからな

……』

多くの家屋は、大抵びつしやりと戸を閉めて、大和障子の白いのを見せてゐるのは、纔かに數へるほ

どしかなかつた。軒の庇からは寒さが緩んだと見えて、ぼつぼつ點滴が落ちてゐた。

太陽がやつと明るく照り出した。

村の中ほどにある大きな旅舎がすつかり空家になつてゐるのを目にした時には、主人は『この家も昔から名高い宿屋だつたが、主人が道樂でな……。すつかり駄目になつて了つた』かう言つて、その零落のさまを話し出した。その話によると、昔は大名の奥方のやうな暮しをした婆さんが、後には飯も食へないで村の人達の情によつて纔に生きてゐたといふことであつた。ぢきその近所の小屋の中に三疊の疊を敷いて、そして毎日日向ぼつこをしてゐたといふことであつた。と、そこに、村の子守達が、大勢遊びに行つて、その婆さんから、昔殿様の通つた時分の賑やかな話や、刀をさし合羽を着た旅人の物語や、鈴の音のチャラチャラとさやかにきこえる朝のさまなどを喜んで聞くのを例としてゐたが、ある朝その子守の一人がいつものやうに出かけて行つて見ると、その婆さん行火に寄りかゝつて、そのまゝ冷たくなつて死んでゐたといふことであつた。年は九十を三つか四つ出てるたといふことであつた。『こゝの主人も、もう生きてはゐるめいよ。何でも米澤の方に行つて小商人をしてゐたといふことだ……。それに、俺も知つてゐるが、その時分この山の中でも評判な美しい娘がそこにあるな、お町ツて言つたつげが——今生きてゐればもう四十先だが、その娘が東京に女郎に賣られて行つた時には、村中それは大騒ぎだつたつげ……。可哀さうだつてな……。皆な一里も二里も娘達が送つて行つたよ』それからそれ

へと感慨深く主人は話しつゝけた。

一九

ちよつと用事を足して來ると言つて、主人の長兵衛は街道の角に立つてゐる呉服物などを賣つてゐる大きな家へ入つて行つたが、暫らくして出て來て、『まア、お入りなさい——』と言つて、奥の圍爐裏のあるところへと加藤を伴れて行つた。

そこで加藤は三十分、一時間近くも待つたけれど、主人は容易に奥から出て來なかつた。何うしたのかと思つた。此處から鹽野町まで二里、村上まで出るには、何うしても五里はあるのに、いつまでぐずぐずしてはゐられなかつた。かれは催促した。

出て來た主人は、いかにも困つたやうな顔をしてゐた。何うも話が旨く行かないといふことであつた。もうひとりゐる人さへゐれば、話はわけなくきまるのだけれど、見にもやつたにはやつたのだけれど、鐵砲でも持つて出かけたと見えて、近所にはその姿が見えないといふことであつた。『何うだな、お前さ、おくれ次手に、もう一夜此處に泊つて行かねえか』と主人は言つた。

しかしそんなのんきなことは出來なかつた。役所の方だつて、一刻も早く歸つて、その報告をしなければならなかつた。かれは外を眺めた。

『何うしても、その人に逢はねえぢや、此處を立つて行けないといふんですか？』

『少し用があるでな……』

段々さぐつて見ると、主人は此處で金の工面をして行かなければならないのであつた。五十なり六十なり金を持つて行かなくては、村上まで出懸けて行つても爲方がないのであるらしかつた。『一晩泊つて行きなせいよ』かう言つて主人は頻りに留めた。

『でも、私は出かけませう……。これからは、そんなにひどいところもないでせうから……』

『でもな……』

『それとも、危ないところがあるかね』

『もう、今までのやうなことはねえがね……。それはひとりでも行けねえこともねえけれども、折角一緒に來たんだで、泊つて行きなされや、もう一晩……』

『難有う……。しかし行きませう。村上まで行けないでも、鹽野町まででも行つて置けば、明日樂だから……。ぢや、失敬します』

かれは立上つた。

『好からうがな？』

『難有う……』

『さうかな、何うしても行くかな。わるかつたな。一緒に行くつもりでやつて来て、散々待たせて……。そのお人さへ歸つて来れば、すぐわかるんだけど……。それぢや何うしても行くかな』かう言つていかにもすまなかつたといふやうにして、主人は加藤のあとについて出て来た。

『それでも峠が一つあつたかしら？』

『峠といふほどのこともねえ……。それに、此處からは、雪も浅いで今までのやうなことはねえ！』

それぢや、大事に行かつせい……』

『それぢやまた……』

で、加藤はわかれて、出發して来た。何となくさびしかつた。いつそ言ふまゝに一夜此處に泊らうかとも思つた。しかし足は先へ先へと出た。こんな山の中にいつまでもぐずぐずしてゐて、また今夜にも雪に降り込められてはそれこそ大變だとかれは思つた。少くとも鹽野町までは出て行つてゐなければさぞだと思つた。二三間行つてかれは振返つた。主人は猶ほそこに立つてゐた。十間、二十間行つて振返つても、まだそこに主人の姿が小さく黒くなつて見えてゐた。

かれは一種不思議な印象を感じた。この雪の山の中の廢驛の旅舎に、さうした熱い心が烈しく渦を巻きつゝあるといふことは唯事ではないやうな氣がした。

さうひどくはないと言つたけれども、それでもその峠を越すのに一方ならぬ辛苦を加藤は嘗めた。何故言ふなりに一夜を葡萄に過して、明日一緒に出て来なかつたらうと悔ゐた。中でも一番困つたのは、路がをりをり深雪の中に絶えて了つて、まごまごすれば深い深い谷の中に墜ちて了はなければならぬことだつた。かれは爲方なしに、峰の脊のやうなところを選ぶやうにして纔に歩いた。

誰にも逢はなかつた。また誰の通つた足跡もなかつた。たまさかに雪の上に點々として残つてゐるものは、猪か、狼、でなければ熊の足跡であつた。三時間かゝつても、かれはまだ鹽野町に到着することが出来なかつた。

日は黄く大きく山のかげに沈まうとしてゐた。それに寒氣が加はつて來たと見えて、氷つた雪が踏むごとに簇々音を立てた。これで日が暮れて了つたなら、何うすることも出来ないのであつた。かれは一生懸命に歩いた。

突然、前に人の影があらはれた。それが獵師であるのを見た時には、かれは地獄で佛に逢つたやうな氣がした。

『さうけえ？ 鹽野町なら、俺も歸るだ。一緒に行くべえ？』

『それは難有い……。何うか一緒に伴れて行つて下さい』かう加藤は拜まぬばかりにして言つた。獵師は猿と雉子とを打つて、それを銃と共に肩にかけてゐた。その話では、この路を行けば、町へは行かずに、山へ山へと入つて行つて了つたであらうといふことであつた。

『それぢや、あんたに逢はなけりや、えらい眼に逢ふところでしたな?』

『運が好いだな……。これで、日がくれて見さつせい。何うにも彼うにも出来やしねえぞな……。』

『本當だ……。好いところで、お前さんに逢つた。これも運が好いだ!』

かれは一週間近くも吹雪に降りこめられて北中に滞在してゐた話をしながら歩いた。獵師も太田屋の主人の事はよく知つてゐた。

『今、葡萄にゐるんけえ?』

『用が足りねえツてんで——』

『あの呉服屋は、奴の親類だアな。あの家も、昔は金持だつたが、今の主人が太田屋と遊び仲間で大分つかつたべい』

『村上に深い女でもあるのかね?』

加藤は訊いて見た。

『そんなことは知らねえが、よく村上さへ行くだな……。一月に三度や四度は行くべい?』

鹽野町の人家の灯のチラチラするのを見た時、加藤は初めてホツと呼吸をついた。それはもう全く夜であつた。此處等あたりでも、雪は二尺位は積つてゐた。矢張此方もえらく降つたさうで、初めの一日二日は往來が絶えたといふことであつた。かねて一二度泊つたことのある旅舎に入つて行くと、主人は『加藤さんけえ? 本當に何うしたかと思つてゐたよ。えらい目に逢つたな……。だから葡萄や北中には滅多に入つて行けねえな……。さうだらうとも——よくこんなに早く出て來さしやつた。でもまだ山は本當には通れやしめい……。』かう言つて款待した。すぐ、女中が大きな鹽に湯を澤山取つて來てくれた。

『あゝ生きかへつた! 本當に生きかへつた! さつき、山の中では、これはもうとても駄目だと思つた……。えらいところだな、葡萄は?』

脚絆を取り、草鞋をぬぎながら、加藤はこんなことを言つた。さてそれから火燵のある室に通つて、湯に入つて、熱い酒を一本つけて貰つて、それで始めて人心地がついたやうな氣がした。

その二

暑い日が山の端に沈んでから、最早一時間は経つた。それでもまだあたりは明るく、山巒の向うの空の夕焼は、さながら大きな火の燃えてゐる餘照でもあるかのやうにひろくあたりにひろがりわたつて見えた。谷川の音は靜かにこの狭い山の周圍に響きわたるやうにきこえた。長く續いた一條の街道の上には、誰も通つて行くものもなかつた。

女達はせつせと働いた。今は田の草を取る盛りであつた。また夏蠶のために桑をやらなければならぬ盛りであつた。麥の始末もして、粉にひくものは水車にやり、そのまゝで出すものは、俵に詰めなければならなかつた。朝早くから野良に出たかれ等は、晝飯の時には家に歸る暇はなしに、持つて來た握飯を樹の蔭で食ひ、渴いた咽喉を谷川から汲んで來た水で潤し、殆ど休息するひまともなく働いた。家に残つた年寄り子供は桑を畑から摘んで來ては、それをせつせと蠶の籠の中に入れた。

夕暮近く、先に引上げて來るものは、野に残つてゐる女達に誰も彼も皆な挨拶した。『もう上らねいかね?』とか、『そんなに精を出してもしやうがなかんべ……』とか、『お先に行きやすぞや』とか言つた。

と、一人あがり、二人あがりして、後にはそれに誘はれるといふやうにして、皆な一日の仕事の手をとめて、鎌を洗ひ鍬を洗つたりした。しかも歸つて行く家には、飢を満すべき夕飯がちやんと出來てゐるわけでも何でもなく、中にはこれから歸つて粟飯を炊かなければならないものもあれば、うどん粉で固めた此處等あたりで常用されてゐるつみいれのやうなものを造らなければならぬ上さん達もあつた。それも一家が圓滿で、夫婦仲も好く、互ひに慰め合つて暮してゐるのなら、さうしたつらい烈しい労働もいくらかはまぎれると言ふものだが、家に歸つたところで亭主はるす——その行つたところはちやんとわかつてゐても何うすることも出來ず、暗くなりかけた家の中では子供が泣き出す、年寄達はまごまごするといふ光景では、生きた空もないやうに思はれるのも道理だと言はなければならなかつた。今日も五六人して、午後三時の休憩時間を一ところに寄つて話をしてゐると、向うの方を見てゐた上さんの一人が、

『あれは? 向うに行くのは、だんさんのとこの人ぢやねえかな』

見ると、その長い、さびしい滅多に人通りのない街道を、一つの自轉車が矢でも射たやうに全速力で走つて行くのが、はつきりと午後の日影に浮び上るやうになつて指さされた。

と、背の小づくりな三七八の上さんは跳り上つて、

『さうだ、さうだ——おらんだ——』

かう言つたまゝ、じつとそれを見詰めた。かの女は事の何であるかを一瞬間にして知つたのであつた。否、もしその自轉車に追ひつくだけの速力をその足が持つてゐたならば、そのまゝ飛び出して行つたに相違なかつたのであつた。(それで、用があるとか何とか言つて、野良から上つて行つたのだ……。行くつもりだつた、的切さうだ……) かう思つたが、しかし何うすることも出来なかつた。と、今朝麥を賣る約束をして手金に取つた金のことがすぐ胸に上つて來た。てつきりあれを持つて行つたに違ひないと思つて、いくらかくわつとした。しかし矢張何うすることも出来なかつた。それに、皆なの手前もあつた。あまり嫉妬らしい様子をみせるのも、糞いまいましいやうな氣がした。

『また、行くぢやねえか?』

かう初めの上さんが言つた。

『さうかも知んねえな……』小づくりな上さんはかう言ふより他爲方がなかつた。しかしその自轉車が、長い長い街道の上に見えなくなつて了うまで、かの女はそれから眼を放さうとはしなかつた。

二

上さん達は何も言はなかつたけれど、皆なその小づくりな上さんに同情した。それはその上さんばかりのことではなかつた。自分達の上にもあつた。自分達の亭主も、矢張同じやうに自轉車を駛らせて温

海なり村上なりの色街に出懸けて行くのであつた。従つて上さん達は、その色の生白い、白粉をべたべたつけた、髪をいつも綺麗に結つてゐる女を、またさういふ女を圍つて置く家を、お世辭を言つて金を巻き上げる算段ばかりをしてゐる女將を、目のかたきのやうに呪つたけれども、しかしそれを何うすることも出来なかつた。

小づくりな上さんは、胸の苦しみを何處に遣ることも出来ないの、しまひにはつまらなさうにぷりぷりし出した。『あ、もう、俺ら鎌持つ精がねえ……。いくら働いたツて、さういふ風に女の許べいつて走つて行くぢやねえ……。』かう言つて田の畔に腰をかけて、ぼんやりしてゐた。

『本當だな、困るだな……。』

『何うかしやうがねえもんかな……。何うしてこんなことになつただか? ひとり始めると、皆なやるで——』

『おらんとこのも行きやしねえかな。ちよつくら行つて見て來べい』こんなことを言つて、一人群に離れて、さつさと村の方に歸つて行くものなどもあつた。

この上さん達の中には、その温海なり村上なりの色街のさまを知つてゐるものもないではなかつた。中でも温海は温泉があるので、女達でもたまには出かけた。そこには大きな旅舎が軒を並べてゐる。朝市が立つて、海岸からは取れたばかりの魚類を、野からは新しい野菜を、其他、浴客達の用ゆる種々な

ものを、皆な車に乗せて持つて来て、そしてそこに一面に竝べた。ふかし立ての饅頭を竝べて賣つてゐる店などもあつた。それだけなら何でもなかつたが、その奥に、細い通りがあつて、そこから三味線や鼓の音が絶えずきこえた。浴客は皆な宿の浴衣を着たまゝで出かけた。『あら、何うしたの？ しばらく顔を見せないのね。私、随分待つてゐたのに——』こんな聲が到るところから聞えた。夜はその細い通りに赤い提灯がついて賑かに男女が往來した。『これぢや、成ほど男衆の遊びたくなるのも無理はねえやな……。俺でも金をつかひたい氣になるだ——』そこに行つて見た上さん達はこんなことを言つて笑つた。しかし、いざとなると、しんからその女が憎かつた。さうした女に騙される男が馬鹿と言ふよりは、さういふ女にかけてはいつも子供のやうになる男を平氣で騙して金を取る女が憎かつた。それは色街は面白いだらう。さういふ女を相手に酒でも飲んでゐれば、それこそそのんきで、苦勞がなくつて好いだらう。野良の田の草の生えるのも、稻に害蟲のつくのも、または不作つゞきで村が年々疲弊して行くのも、このまゝでつゞいて行つたら村が何うなつて行くか知れないのも、現に土地にゐることが出來ずに、他郷に流離するものの年々多くなつて行くのも、何も彼も放つたらかして太平樂を言つてゐるところが出来るだらう。しかし、その家は？ 妻子や年寄のゐる家は？ そこには暗い空氣が漲つてゐるではないか。子供が泣いてゐるではないか。年寄が心配してゐるではないか。上さんひとり氣が張つて、そんなことにまけてはゐられない、亭主は亭主でも、自分だけは眞面目でなければならぬ、子供を育て

なければならぬ、家を脊負つて立つて行かなければならぬ、と、かう健氣に思つて働いて見たところ、夜のひとりの床は涙に濡れずにはゐられないではないか。自分の夫を寢取つてゐる女を呪はずにはゐられないではないか。『何うしてかうわるい遊びが流行るやうになつただか？ 男衆だつて其中には目がさめべいとは思ふけども——困つたこんだな……。』かう上さん達は誰も思つた。

三

小づくりな上さんはそれでも日暮まで働いた。

隣の上さんと一緒に鎌や鍬を小流れに洗ひながら、

『もう、おら勘忍袋が破けた……。今度歸つて來たら、了簡しねえぢやなんねえ……。いくら言つたツて駄目なこんだで……。』

『本當に困るな』

『お前さ……。これで、もう何遍だと思はつしやるな。數へたつて數へ切れねえほどだ……。もう、今度は行かねえ……。あんなあまに騙されてゐた。かう言ふから、本當だと思つて喜んでゐると、ひよいと抜けて行つて了うぢやねえか？ お前さ？ 小せいのがあるから我慢してゐるけども……。厭なこつた——』

『でも、お前さんのこのは、きまつた女があるんぢやねえだで、まだ安心だアな。』隣の上さんは鍬をたわしでごしごし洗ひながら、『安さん見たいになつちやそれこそ困るけどな……』

『きまつた女があるかねえか、わかるもんかねえ？ お前さ……』

『でも、お前さんのこのは、きまつたのはねえさうだよ……。いつも買ふ女が違ふ言うだで』

『誰が言つたけえ？ そんなこと？』

小づくりな上さんは、何となしに腹立たしいやうな気分になつて突慥食に言つた。

『誰ツていふこともねえが、さういふ話だよ』

『馬鹿くせい、本當に……？ 村の人には馬鹿にされ、爲事はしず、女にだつて何をされてゐるかわかりやしねえ』鍬の土を落し、鍬を洗つて、最後に自分の手と足を洗ひ、『でも、お前さんのこのは、堅くつて好いな』

『何だかわかるもんかな……』

『堅くつていゝや！』

かう言つたがそのまゝ、すたすたと向うの方に行つて了つた。

隣の上さんの方は、變な顔をして、その小づくりな上さんの向うに歩いて行くのを見送つたが、(怒つたんか？ すかねえな？)かうひとり言のやうに言つて、やがてせつせと鍬を洗ひ出した。水は音を立

て、潺湲として流れた。

山の周圍には、既に薄暮の色が迫つて來てゐた。振返ると、村には微かに夕靄がかゝつて、その中に二つ三つの白壁が浮き出すやうに見えてゐた。溪流の音の他には、何の物音とともなく、あたりは全くしんとしてゐた。灯のついた家も一つ二つ見えた。

綺麗に洗つた鍬と鍬とを擔いで髪の上に乗せた白い手拭をあたりに際立たせながら、玉蜀黍の大きな葉の觸る度にガサガサと音を立てるやうなところを通つて來ると、丁度そこは旅舎の太田屋の裏になつてゐるやうなところへと來かゝつた。

と、向うから矢張上さんと同じやうに、玉蜀黍の葉をガサ、ガサとわけて、そのまゝ、此方へと出て來るものがあつた。上さんはおや！と思つた。

それは入江巡査であつた。和服姿だつた。

『今、歸りかね？』

巡査はわるいところを見られたといふやうな表情をしたが、しかも如才なくかう聲をかけた。

『お晩になりやした！』

上さんはさう言つて挨拶してすれ違つた。何となくトンチンカンだつた。

巡査は太田屋の方には行かずに、そのまゝ、真直に街道の方に出て行つたやうだつたが、しかもその上

さんの振返つた時には、もはやその姿は見えなかつた。唯、玉蜀黍の大きな葉がガサガサと動いた。あたりは全く夜になつてゐた。

四

その巡査のこともちよつと考へられたが、すぐ忘れて、上さんは急いで自分の家の方へと行つた。廣い勝手には、土竈で燃やしてゐる火が明るく照つて、長男を相手に亭主が夕飯の準備をしてゐるのが浮び出すやうになつて見えてゐた。

『遅かつたな?』

亭主の聲はいくらか尖つてゐた。

『だつて、向うの方まで草を取つて來たでな……。それにな、お道さんに話しかけられたもんだで

—』

『べちやべちやと下らんことを饒舌つてゐたんだらう?』

『さうでもねいけど』

かう言ひながら、擔いで來た鍬をそこに置いて、鎌の方は一方の壁の上のところにかけて、『明日は出て貰はねぢやなんねえ……。草が一杯で、とても俺ひとりぢや手に餘るで……』

『そんなに生えたかな……。?』

『それに水がちつとも來てねえな……。もつと何うかしなけりや……。』

『山寄りの田か?』

『あつちも少いけども、それよりも此方の丘の下の方の田は、蟬が入つてゐるところがあるでな……』

…』

『作公がまた自分の方にばかり水を入れてゐるんだべ?』

『さうかも知んねえ。向うの方までは行つて見なかつたな!』

『それにきまつてゐるア……。本當にしやうがねえな……。今夜にでも行つて打壊してやれ!』

いくらか激昂したやうな調子で亭主は言つた。

『ほんに、わりい奴を隣にしたもんだ……。此方で黙つて放つて置けば、好い氣になつて、向うの好いやうにばかりしやがる。もとあそこは水が多くつて、土に輝なんかのいることはどんな旱天でも無かつたんだ!』

『本當だよ……。』

『作の鼻ア來てたか?』

『今日は來てねえ?』

『しやうがねえ奴等だ!』かう言つたが、白く湯氣を吹き出した釜の蓋を動かして見て、飯の出来たか否かを覗くやうにした。

『もう好い、もう好い! 火をひけ!』

かう亭主は叫ぶやうに言つた。竈の前に蹲踞つて、顔を赤くあたりに見せて、せつせと火を燃してゐた十二三の男の兒は、父親にかう言はれて、慌て、火のついてゐる薪を出して、そしてそれを隣の大鍋のかゝつてゐる方へと移した。烟がむせるやうに一面にあたりに満ちた。

『おつかア、明日は鉛筆に手帳を買うで、お錢くんネ?』

朝、學校に行く前になつてから言つたんでは、お錢を出してやらないことなので、男の兒は思ひ出して、だしぬけにこんなことを言つた。

『また手帳を買うんけえ?』

『だつて、歴史を書けつて先生が言つたんだもの……』

『この間買つたばかりぢやねえか?』

『だつて、あれは算術だもの?』

『本當に、手帳、手帳つて毎日のやうに言つてらア?』

『だつて先生——』

男の兒は泣きさうになつた。

『よし、よし、買つてやるよ、買つてやるよ……。やかましい』

かう傍から亭主は言つた。

一方の大鍋の方には、晝間亭主が山から取つて來た露つゆが一杯に入れて茄かでられてあつた。

『お、これは好い露だ……。こんなに好いのがよくあつたね?』かう上さんは蓋を取つて見て言つた。

『でも、奥まで行かねえぢやねえよ……。谷の向うまで行つた——』

『さうだらうな……。』上さんは手拭を頭にのせたまゝ、いつか薄月になつた戶外の方へと出て行つた。

五

ふと氣が附くと、またその前の畔道を、さつきの入江巡査がこそそと歩いて行くのが、影か何ぞのやうに夕月の光の中に見えた。

『何うしたんだらう?』かう思つて上さんはじつと立盡した。

しかし、何でもなしに、その影のやうな姿は、靜かに向うの方に動いて行つた。やがて見えなくなつて了つた。上さんは此方へ入つて來た。

夕飯の準備や何かで、いつかすっかりそれを忘れて了つてゐるが、暗いランプの下で子供達にも飯を食はせ、自分も餓えを満たして、ほつと溜息をついたやうにして茶碗についだ湯を呑んでゐるが、ひよつくりまたそれを思ひ出して、

『長兵衛さん、ゐるかね?』

『太田屋の?』

『さう——』湯を呑み干して、『そこを入江巡査がぶらぶらしてゐるから……』

『何故?』

亭主は地酒をちびりちびりやりながら、わるく赤くなつた顔を上さんの方に向けた。

『何故つていふこともねいけどもさ……』上さんは意味ありさうに笑つて、『長兵衛さんゐる時には寄りつかねえけども、ゐなくなると、すぐ入り込んで行くつていふからサ……』

『そんなこともねえだらう?』かうは言つたものの、亭主の顔にもいくらか笑の影が上つた。

『それはさうだらうけども、あの入江巡査、變だは變だよ……。いやにこそ何かやつてゐるで——』

『お前はさう思ふからさう見えるんだらう? 滅多なことを言つて、わるく思はれたつてつまらねえぞ……。あの巡査、あれで中々執念深いツていふで……』

湯を呑んで了つたあとを、上さんはじつと向うの黒く煤けた壁を見詰めた。隣では垣越しに子供の啼

く聲がして、それに續いて、さつきの小づくりな上さんの何か叱るやうな甲高い聲がした。

『それで長兵衛さん、すつかりはまりこんで了つたのかね?』

暫くしてからかう上さんは訊いて見た。

『そんな噂だな……。この間、村の良太郎が村上へ行つたら、太田屋、その女と一緒に町さ歩いてる

たつて言うで——』

『困りもんだな』

『矢張、女とでもふざけてゐれば面白えでな……』

『何うも男の心はわからねえ……。女房がひとりあるんだから、それを大事にしてゐれば好いの……』

……。何うして、そんなに他の女が好いんだらうな?』

『それは、俺にきいたつてわからねえ。太田屋にきいて見ると好い』

亭主は笑ひながらこんなことを言つて盃を口に當てた。

『俺らには、何方が何うだかわからねえ。お虎さん(太田屋の上さん)がわりんだか、長兵衛さんがわりんだか? 皆なに言はせると、長兵衛さんがわりいッていふんだけども……』

さう言つても亭主は黙つてゐた。唯、ちびりちびり盃を口に運んでゐるばかりだつた。で、上さんはそのまゝ立上つた。そしてそこらにあるものを一つ一つ勝手の方へ運び出した。

『進、そこらにころがつてゐると、蚊に食はれるぞ!』かうそこに寝てゐる子供に聲をかけてランプの暗くついてゐる勝手の方へと上さんは行つた。

水の音が頻にきこえた。それはさつき鎌や鍬を洗つた細い川と山の裾を流れてゐるもう少し大きな溪流とが落ち合つてそして一緒に流れて行く響であつた。あたりは寂としてゐた。水汲みに外に出ると、四面を取巻いた山巒の輪廓が、くつきりと黒く見えて、その西の凹んだ峠の低いところに五日ばかりの月がもう少しで落ちかゝらうとしてゐた。

六

ふと上さんは耳を敬てた。誰か泣いてゐるものがある。そしてそれはさう遠くでなくて、ぢき向うの方である。否、そればかりではない。そのしやくり上げる聲は段々此方に近寄つて来るやうである。歩いて来るやうである。上さんは鍋を洗つてゐる手を留めて、じつと耳を澄してゐたが、急にある暗示を得たといふやうに、そのまゝあたりのあと片づけを放つたらかして急いで戸外へと出て見た。

しやくり上げる聲は次第に近く近くなつて来た。

果して上さんの想像した通りであつた。微な月の光と薄く白くかゝつた夜霧との中から、やがて小さな黒い姿があらはれ出した。

『お金ぢやないか?』

『……………』

今年十四になる太田屋の總領娘は、年の割に小柄で、まだ十二ぐらゐにしは見えてゐなかつたが、入口のところに来て、來るとそのまゝ壁に顔を押しつけるやうにしてすゝりあけた。

『何うしたんだえ?』

『……………』

『え? 何うしたつていふんだえ? え?……………』

『……………』

『え、黙つてゐてはわからねえ? ぢやねえか? またおつかアに叱られたんだか? え? え?』
かう言つて上さんはその顔を覗くやうにした。娘はしかも夥しく泣いたと見えて、いくら留めやうとしても、容易にその歎歎を留めることが出来なかつた。

『え? お金…………? 黙つてゐてはわからねえだ?』

かう度々言はれて、娘はやつと涙に濡れた顔を上げたが、矢張嘔り上げながら、『おつかアがお父さんと喧嘩して…………。喧嘩して…………。おつかアとお父さんと取組合つて、…………誰が留めても、やめねえで…………。ア、ア、ア…………。堪らなく悲しくなつたといふやうに、娘は今度は本當に聲を擧げて泣いた。

『それで、お金も、打たれたんか?』

娘は頭を振つて、『おら、打たれやしねえけども、お父さんが、お父さんが——』

『お父さんが何うした?』

『お父さんが死んで了うッて……何うしても死んで了うッて、刀を出して、それから、隣の伯父さんが来て留めた……』また聲を擧げて泣いた。

そこにその氣勢をき、つけて、内から出て来た亭主が、

『何うしたんだ?』

『また、いつもの喧嘩らしいよ……。しやうがねえな。本當に——』上さんはかう言つて娘の方に顔を寄せて、『今日はお父さん村上へ行つたんぢやねえのか?』

『村上にや行きやしねえ……。葡萄まで行つて、歸つて来たよ……』

『葡萄まで行つて歸つて来て、それから喧嘩をおつ始めたのか? さうか? しやうがねえな……。刀? 刀を出して、父さん死ぬつていふのか?』亭主はかう云つたが、上さんに、

『お前、早く行つてやれな!』

『をばさん、呼びに来たんか? さうか? 本當に呼びに来たんか?』上さんは亭主の言葉には頓着せず、そこに立つてゐる娘の顔を覗くやうにして言つた。

『皆なが? 向うのをばさんか、角のをばさん呼んで来うッて……』その言葉も半ばは歎歎に埋もれてゐた。

『さア、それぢや、お金、泣くんぢやねえぞ……。好いか? 大丈夫だよ、お父さん、死にやしねえでな……。』亭主に向つて、『お父さん、刀で死んぢや大變だと思つて、それで、この娘は泣いて飛んで来たんだよ……。お父さん思ひだでな、此の娘は!』かう言つて上さんは娘と一緒に急いで走るやうにして出かけた。

七

上さんが其處に行つた時には、既に其處に近所のものが二三人集まつてゐた。長兵衛は長火鉢の向うに坐つてゐるが、喧嘩をした後のわるく激した顔をして、誰か何か言つたならすぐにも突か、つて行かうといふやうな氣勢を示した。女房はまた女房で、やつと皆なに押へられたといふやうに向うの柱のところ坐つてゐるが、矢張顔は蒼青に興奮してゐた。

『分家のお上さん、よう来てお呉れた——』そこにゐる人達は、始めて安心したといふやうにかう言つて迎へた。

それとなしに様子をきくと、喧嘩の聲がすると同時に、子供達の泣くのがけた、ましくきこえたの

で、それで、一番先に角の上さんが飛んで出て来た。しかし、その時には、二人とももう取組んで、上さんの髪を主人がつかんでるといふことであつた。否、その喧嘩はいつもとは違つて、ひどく執念深く、角の上さんひとりの力では、とても何うすることも出来ないで、それから近所の人達にも来て貰つたといふことであつた。注意して見ると、主人も主婦もそこらにあつたものを手當り次第に放つたらしく、茶碗や徳利や盃の碎片があちこちに散らばつてゐるばかりでなく、その向うには、鐵瓶と湯わかしが倒さになつて轉がつてゐて、あたりは水だらけになつてゐるのを上さんは目にした。

『ひどいことをしたもんだね？ 本當に——』上さんはあたりを見廻すやうにして言つて、『お虎さん、何うしたのさ？』

『……………』

主婦は黙つてじつとしてゐた。

『本當にしやうがないねえ。この子が』傍でまだ^{すりなき}歎^{なげ}け^てゐる娘を指さして、『泣いて知らせに來たぢやないか。何うしたんだね？ 一體？』

『きかねえでお呉れよ……。俺を殺して自分も死ぬつていふんだから——』

と、^{だしなげ}突如に、

『あま、黙つてをれ！』

かうした凄じい疇走つた言葉が長兵衛の口から出た。かれは再び激怒に捉えられたといふやうにぶるぶる身を戦はせて、執られた自分の手を足をふり放さうとした。

『まア、まア……そんなこと言はねえで……』

かう皆なが押へると、

『放つて置いて呉んなせい……。俺が家のことは俺がするだで。殺さうが殺すまいが、俺が勝手だ……。お前達どいて呉れ！』手足や體をもがかせて、主婦の方へ突きかゝらうとする凄じい氣勢を見せた。

『長さん、何うしたんだね？ 見つともないぢやないか？』

かう分家の上さんは言ふと、じろり此方を見て、

『まア、貴様達黙つて引込んでをれ！ 貴様達にわかることぢやねえ……。俺の家のことを貴様だちが出て来て、いろんなことを言ふわけがねえだで。これにはいろんなことがあるんだ！ これ放せ！』

二人の上さんと二人の男とが押へてゐたのをふり放して、いきなり主婦に飛び蒐かつて行かうとした。

主婦も負けてはゐなかつた。再び兇暴な獣になつて行つたやうに鋭い眼をして、亂れた髪を結びもあへず、『さア、死すんなら殺せ！』

『殺すとも……。殺さずに置くもんかこのあま!』
と打ち蒐つた。それをまた両方から引わけて、そのまゝ互に身を寄せることが出来ないまでに押し隔てた。

『お虎さん……。もう好い加減にしな! 阿呆らしい……。』分家の上さんがかう言つて、その袖と手を取つて引張るやうにしても、それでも主婦はそれに従はうとはしなかつた。『放つて置いてお呉れ! 勝手な真似を黙つて見てゐられねえだで……。殺すともよ? 馬鹿な? 殺すなら殺して見ろ!』主婦の眼は血走つた。

八

さうした双方の睨み合ひは、しかし長くは續かなかつた。あとからあとへと村の人々がやつて来て、無理やりに二人を押し隔てた。女達は主婦を奥の方へと伴れて行つた。

『本當に、まア、何うしたツて言ふんだね? お虎さん?』

分家の上さんは此方に来ると同時に言つた。

主婦は黙つてゐた。興奮は容易に去らないらしく、をりをり體を震はすやうにした。鋭い目は一ところを見詰めて、顔はわるく蒼白く見えた。

『放つて置いてお呉れや——俺ら、もう堪んねえで——』

かう言つたと思ふと、主婦は其まゝぐたりとそこに横になつた。

『まア、氣を落附けろや——』

皆なは傍に寄つて、枕を持つて來たり蚊の集まつて來るのを扇で拂つてやつたりした。主婦は大きく眼を明いたまゝじつとしてゐた。周囲で何を言つても、それは全く耳に入らないやうに見えた。

『一體、何うしたんだや——』

『本當にな……。』

『こんなことは、今までにもあんまりねえだで、俺らびつくらした』

こんな話が女達の口から出た。と、一人の上さんは、『俺ら、飛び込んで來ると、長兵衛さんがお上さんの髪を持つて、このあま! このあま! ツて言つて、引ずり廻してゐるぢやねえか。俺らびつくりしちやつてな……。それから、留めに入つたけどもな、俺らが力ではとても駄目だで、前の上さんを呼んだよ』

『えらい力でな、それがまた——』そこにゐた前の上さんは言つた。

主婦も黙つてゐるし、主人も黙つてゐるので、その原因といふものは、何がだか少しもわからなかつた。普通の痴話喧嘩とも違ふらしく、長兵衛が外から歸つて來るといきなりその喧嘩が始まつたとい

ふ話だった。

分家の上さんは、暫し主婦のところに来たが、やがて此方の方に出て来て、そこにいる娘に、

『父さん、歸つて来た時、誰か家に来たかや？』

『……………？』

娘は何か言ひたさうにしたが、しかし何も言はなかつた。

『え？』

『知らねえ、俺は？』

娘は頭を振つた。

『入江巡査が来たんぢやねえか？』

『知らねえ』

『本當のこと言はねえぢやいけねえだよ。父さんのためにも、おつかアのためにもならねえだで…』

…』

娘は矢張黙つてゐた。

上さんはそこから引返して、今度は主人のゐる方へと行つた。そこには、さつきよりもより以上に近所のものが集まつて來てゐた。長兵衛の親しい仲の好い友達の貞介なども來てゐた。さつきとは違つて

— さつきのあの大童であつたのとは違つて、すっかりその興奮から覺めたやうに頻りに皆なに挨拶してゐたのを上さんは見た。

『なアに、俺らもわるいにはわるいかも知んねえがな…。あいつも、強情でな、憎いことを言ひくさるで、それで、つい皆さんの御厄介になるだ…。考へると恥かしいこんだけども、何うも、これも何かの因縁だと見えてな…。本當を言へば俺らも早く死んで了へば好いんサ…。生きてゐたツて、碌なことねえし、死ねばな、こんな恥しい目も見ねえでな…。俺らもゆつくら考へて見ねえぢやな…。』

『馬鹿なことを言ふなよ』

傍からかう貞介は言つた。

九

それでも一時間ほどした後にはそこに集まつて來た村の人達も、てんでに自分の家へと歸つて行つた。まだ夫婦は互に口をきかなかつたけれども、それでも主人は、『何うもすみませなんだな…。とんでもねえ人騒がせをやつて…。今度は注意するでな…。許して呉れつさい。』こんなことをその村の人達に言つてゐた。

分家の上さんは自分の亭主に言つた。

『俺だけ残つてるべいか?』

『さうだな……。その方が好いかも知れねえな……。』

と、『いや、もう、歸つて呉れて好い……。あんなことはもうしねえから……。決してしねえから。本當に世話かけてすまなかつた——本當に大丈夫だで、安心して歸つて呉れ』かう主人の長兵衛は二人を戸外に押し出すやうにした。

『でも、俺らるべい、もう少し……。別に、用はねえだで……。勝手の方もありました片附けて來ただで……。』

『好いから、歸つて呉れよ』

あとに残らうとする分家の上さんを主人は更に押し出した。『さうかや……。それぢや歸るぜ! お虎さん……。』かう言つてその二人も歸つて行つた。

前の家では、途中で止して飛出して行つた夕餉の膳に向つた。今までの騒がしかつたに引かへて、あたりはしんとつた。何處の家にも平和があるやうに、明るく灯の光がかゞやいて見えた。

そこの上さんは飯のあとの湯を飲みながら、

『何うしたゞか、今日は馬鹿にひどい喧嘩だつたな。いつもとは違つてゐるな……。何か、事があつ

たんぢやねえか?』

『さア?』

亭主の髭面は、薄暗い五分心の裸ランプの光にわるく照されて見えた。

『よくはわからんねえけど、お前さん、さうは思はねえけえ?』

『さア?』

『俺ら、何うも變だと思ふな。誰か奥にゐたんぢやねえかな?』

『誰かつて?』

亭主は訊いた。

『そら、この間、貞介さんか言つてた?』

『入江か?』

上さんは黙頭いて見せた。

『まさかな……。まさか、そんなことはあんめいと思ふがな?』

『でも、さうでもなくつちや、あんなに長さんが怒るわけがねえ?』

亭主も黙つて深く考へるやうな顔をしてゐたが、

『まア、そんなことを滅多に言ふなよ。もし本當だつて、おらのとこのことぢやねえしな。噂だけだ

と、猶ほわりいで——』

『それはさうだけでも……』上さんは立上つて、膳を勝手の方へ持ち出して、また戻つて来て、

『もしさうだとすりや、長さん怒つたのも無理はねえな』

『何しろ困つたもんさ——あの家も?』

かう亭主は深く慨嘆するやうに言つた。

此頃では、村での太田屋の評判は滅茶々々であつた。すつかり信用が落ちたばかりでなく、財産などもあら方つかひつくして了つたらしかつた。その癖村上の方へは、かなり大きな金をつぎ込んで、馴染であつた静江といふ女のある家から自前にさせ、抱妓を二人まで置いて、自分はやんとその長火鉢の向う側に坐つてゐるといふことであつた。始めは一月の中に二度か三度行くくらゐのものであつたが、さうなつてからは、一週間も十日も其方へ行つてゐることなどもめづらしくはなかつた。

外から見ると、闇の中の裸ランプの火がチラ／＼と夜風に揺いて、玉蜀黍の廣葉だの野菜畠の豌豆の蔓だのが混雑とそこら一面に靡いてゐるのが見えた。さつきの月はもうすつかり落ちて、溪流の音ばかりが山巒で圍まれた村や野に遠く反響してきこえた。頭上では星が燦爛として光つてゐた。

『そんなにふててゐるねえで、もう寝ろや……。蚊が食うぢやねえか?』

かう長兵衛は揺すぶり起した。しかし主婦は黙つて身を横へたまゝにしてゐた。返事もしなかつた。

いくら言つたつて、とてもその強情を動かすことの出来ないのを知つてゐるかれは、溜息をつきながら、そのまゝ此方へとやつて來た。そこには、年を取つた方の女中が蚊帳の中で男の兒をねかしてゐた。

『まだ、寝つかねえか?』中を覗くやうにして長兵衛は訊いた。

しかし女中は返事をしなかつた。添寝をしたまゝ寝て了つたものらしかつた。いつもならば、長兵衛はそれを起した上に、小言の一つや二つは言はずには置かないのであつたが、今日は黙つてそのまゝ店の方へと行つた。

そこには五分心のランプが明るくあたりを照して、ガランとした夜の空氣の中に、大きな古い家屋が、何年かの煤にすつかり黒くなつた屋根裏が、縦横に組み合はされた垂木が、または二階の方のぼつて行く楷梯が、さびしく薄暗くあらはれて見えてゐた。室の隅では、娘のお金が、明日の課程を復習するために、小さな机を持ち出して、お下けの髪を此方に見せながら、頻に何か書いてゐた。

『もう、寝ねえか?』

さびしい心をせめて、さうした言葉にでも慰めやうと思つて、長兵衛はかう聲をかけた。

と、娘はふり返つて、『おつかア寝た? もう?』

矢張、娘心にも心配してゐるのであつた。それを思ふと、何とも言はれない佗しい悲しい心持がかれを襲つた。あゝした母親——自分のことのみ齷齪して、子供のことなどは少しも考へない母親、否、さうした母親ばかりではない、絶望してやけになつたかうした父親を持つて、さうしてさびしく起きてゐる子供のことを考へると、何うしてさつきあんな喧嘩をする氣になつたであらうと思つた。他の家の子供達は、圓滿に、平和に、やさしい親の膝に眠つてゐるのに——。

『おつかア、寝なくなつて、ひとりで寝られるぢやねえか?』

『直は?』

『もう寝た——』

それだけであつた。娘は再び机に向つて、せつせと鉛筆を走らせた。暫く経つた。

『何を復習つてゐるんだえ?』

『算術……』

『もう、好い加減にして寝ろよ』

『だつて、先生が、明日まですつかりやつて来いッて言つたんだもの……』
後姿を此方に見せたまゝにして娘は言つた。

一杯飲んで呉れやうかとも思つた——『いや、よさう……また、お金が心配するで……』かう思つて止した。で手を拱いたまゝ、じつとして圍爐裏のところ坐つてゐた。ぼんやりと唯あたりを見詰めてゐた。と、ギシギシと板の軋む音がして、やがて二階から泊客らしい中年の男が下りて來た。さう言へば今夜も二階の奥の八疊に二人、客がるる筈であつた。その人達は無論、さつきの凄じい喧嘩を聞いてゐたに相違なかつた。それを思ふと、その客に顔を見らるゝのも何だかきまりがわるいやうな氣がした。何とも言はれない佗しい佗しい心持になつた。その宿屋の古い空氣が、いくら一掃しやうと思つても、室の隅々に残つてゐて決して此處から離れない空氣が、重く重くかれの心と體を壓迫した。何も彼も——そこにありとあらゆるものが、暗い壁が、汚ない厨や、煤けた屋根裏が、すつかりかれに裏切つて反抗して來た。つゞいていつもの恐ろしい孤獨が強くかれを襲つて來た。

『一杯飲め!』

思はずかう言つてかれは身を起した。

一一

いつもなら、徳利に酒を入れて來さへすれば、黒い鐵瓶の湯の中にそれを浸けさへすれば、漸く暖まつて來たのを盃についでそれを口に持つて行きさへすれば、あつち奴が咽喉を通つて行きさへすれば、

それでいろいろな不平も、絶望も、辛い佗しい気分も、さうした古い家屋の空気の中に押籠められたやうな心持も、何も彼も忘れて行つて了ふのが常であつたが、今日は何うしてか、いつもの楽しい、何うでも好い、なるやうになれ！ といふ氣持にはなることが出来なかつた。

かれは盃を口に當てながら、ぼんやりそこに坐つてゐた。

いろいろな光景がかれの眼の前を通つた。活動寫眞のやうに通つた。そこには村上の狭斜街の細い露地の中もあれば、大勢の人達と一緒に女を相手に遅くまで酒を飲んだ一室もあつた。かと思ふと、反対の方に立つた男となぐり合をしたことだの、村のために盡したことは何の效をも奏せず、今では却て悪評のまよになつてゐることだの、自分の女房が自分の自由にならず、却て新家の村長の方に裏切をしてゐることだの、次第に借財が殖えて行つたことだの、まだ誰も知らないけれども、その村上の女の地盤を築きあげるために——否、その金を出して、女の世話をしやらなければ、女が抱えになつてゐる時分からかれと三角關係になつてゐる平村の豪農の息子の方に叛いて行つて了ふかも知れなかつたために、あればかりは手離すまいと思つてゐた葡萄の山奥の山林まですつかり賣り飛ばして了つたことだの、さうしたことがそれからそれへと斷續してかれの眼の前を通つて行つた。最早かれは昔のやうに村で威張つて、旦那さまで通つて行くことが出来なくなつたことを思ひ出した。また、村の空氣にしても、多くはかれに反対で、何處となく落付いてゐられなくなつたことを思ひ出した。否、現に、今日も、

村の會議で、皆なが自分を相手にせず、何かかれが言ひ出すと、また長兵衛さんの文句が始まつたといふやうにして、互ひに顔を見合せて笑つて、全くかれをのけ者にしたことを思ひ出した。今日の喧嘩のもとも、實を言へば、さうしたことや何かで懊惱してゐたところへ、嬢がつべこべ言つたために、そのために疝癩が破裂したのであつた。しかしその他にもまだ理由がないではなかつた。

——？

かれは盃を口に當てながら深く深く考へた——。その疑問は、かれはこれまでも度々起してゐるのであつたけれども、現に、一度などは、つきりさうだと思つたこともあつたのであるけれども、しかもかれはそれを突詰めて考へたくはなかつた。さうした眞はあるが、またさうした噂を立てられる餘地もあるにはあるが、まさか自分の嬢の上にさうしたことがあらうとは思ひたくなかつた。信じたくなかつた。しかし、一方に自分が女を持つてゐて、そのために家まで構へてやつて、妾同様に圍つて置くといふ事實は、何うしても嬢に對するかれの疑心暗鬼の影を大きくさせずには置かなかつた。いつとなしにかれはその問題の中に引張り込まれて行つた。(さう言へば、嬢にだつて、それをやつてならないといふ理由はないのだ……。復讐的に若い男を拵へないとは限らないのだ……。)長兵衛は鋭い眼附をしてじつと一ところを見詰めた。

チエツ！ と舌打をして、そんなことがあれば、本當にあれば、俺にも了簡がある……。いつでも突

放してやる!』かう思はず獨語した。

氣が附くと、娘は振返つて此方を見てゐた。

『お父さん! 酒飲んでゐるの? また……』

娘はかう心配さうに言つた。

一一一

父親は黙つたまゝ、また盃を口に持つて行つた。

娘は暫くじつと見てゐたが、その上言ふことも出来ないで、再び後向になつて、鉛筆を運ばせた。

娘のこと、それにつゞいて男の兒の直のことが頻にかれには思ひ出されて來た。娘は自分によくなつてゐるが——さつきのやうな時にも、父親の身の上を心配して泣いたり留めに入つたりしてくれけれど、男の兒は何うしてか以前からちつともかれになじまなかつた。いつも母親の方へばかり行つた。

又、母親も直! 直! と言つてそれを可愛がつた。母親でなければ夜も日も明けなかつた。もつと幼ない時に、ちよつと手を出して抱かうとしても、決してかれの方に身を寄せやうとはしなかつた。すぐ顔を母親の胸に埋めた。

かれはまた頭を傾けて見た。かれの眼の前には、その男の兒の生れる時分のことを歷々と浮んで來

た。その頃、かれは質のわるい病氣をして、一月ほど湯の濱の温泉に行つてゐた。しかしそのためばかりで、女房の操を疑ふわけにも行かなかつた。それはかれにも覺えはあつた。自分の子でないなどと言ふことは滅多に出来なかつた。しかし滅多に言へないだけ——戲談にも口に出して言へないだけ——それだけその問題は眞面目であつた。その頃、山に木材を買ひに來たもので、長い間二階に滞在してゐた男があつたが、それはわるく女に絡みついたりなどして、戲談などを言つては女中をたらし込んだり何かしたが、その男のことが今だにはつきりとかれの頭腦に残つてゐる。否、ある時はその男の眉や顔や鼻や口をその自分の男の兒に發見して、非常に不愉快に思つたことがあつたのを覺えてゐる。

その時、かれはそれとなく氣を引いて見るつもりで、『直は何うしてか俺にちつとも似てゐない……』

鼻でも、口でも、眼でも皆違ふ。不思議なことがあるもんだな?』かう言つて、じつと女房の顔を見詰めた。その時、女房は黙つてゐた。何も言はなかつた。何等の表情をその面にもあらはさなかつた。その時は、いくらか安心したやうな氣がして、もし、さうであつたとすれば、決してあんなにのんきに黙つてはゐられないだらう、きつと顔色ぐらゐは變つてゐたであらう。また、それをかくすために、いろいろな彌縫をやつたであらう。夫をしないところを見ると、さうでもないのかな……此方の邪推かな……と思つて其のまゝにして了つたが、今考へて見ると、その黙つてゐたのが、その顔の色も變へなかつたのが、却てその心の狼狽をあらはしてゐるはしなかつたかといふやうに思はれ出して來た。女といふ

けどものは何をやつてゐるかわからなかつた。綺麗に口を拭つてさへるれば、その秘密は何處からも知られやうはなかつた。それも男がその近くにて、朝夕顔で見合せてゐるとか何とか言ふのならば、いつかそれも表面にあらはれて來るといふこともあるであらうけれど、それきり遠く離れて行つて了つてゐるは、いかやうにもその秘密をかくし了つて了ふことが出來た。『あいつが何をやつてゐるかわかるもんか?』かうした言葉は殆どその口から出やうとした。

そこに若い方のお留といふ下女がのそのそした風で——いつも今まで何處かで轉寢か何かしてゐて蚊に喰はれるので眼が覺めて起きて來たといふやうに、ボリボリ足や手をかきながら、出て來たが、そこに主人がチビリチビリやつてゐるのを見て、『もう好いかね? 戸を閉めて——』かう怒鳴るやうに言つた。

主人は黙つてむつとりしてゐた。

下女は何かぶつくさ言つてゐたが、そのまゝ店の方へ行つて、ガラガラと戸を引き出した。

一三

店の戸を閉めてお留が向うに行かうとすると、

『お留!』

かう長兵衛は呼び留めた。

『何だな? 旦那さ?』

『ま、此處に來う……?』

『何だな?』

お留は容易に傍に寄つて來やうとはしなかつた。

さつきからそこで算術の運算をやつてゐた娘のお金は、お留が戸を閉めてゐる間に、そこらに散らばつてゐた學校の道具を一まとめにまとめて、机の上に載せて、その机ごと壁の隅の方に押しつけてそして、『お先きに……』とも何とも言はずに、そのまゝすつと奥に寢に入つて行つて了つたのであつた。

『好いから、來う?』

笑ひながら長兵衛は手で招いて見せた。

『……?』

お留は笑ひながら立つてゐた。

『來うツたら?』

今度はお留は赤んべいをして見せた。笑つてゐた。

行かなければ今度は長兵衛が立つて來さうにするので、やつと少し傍に寄つて來て、

『しつっこいな？ 旦那は？』

『好いちやねえか？』

『ちつとも好かアねえな……。』いつとなしに、その圍爐裏のところに来て坐つて、奥の方をじろりと見て、『旦那、また、酒飲んでゐるだね？』

『わりいか？』

『わりいとは言はねえ……。自分の酒を自分で飲むんだ……。』かう言つたが、お留は何か要求するところがあるものゝやうに手を出した。

長兵衛はこれかと盃を出した。

『そんなもんぢやねえよ』

お留は手で拂ふやうにして、『旦那さ、忘れつばいな？』

『うむ、さうか、さうか？』長兵衛はわかつたといふやうに大きく點頭いて、『やる、やる！ あとでやる！ 忘れてゐた。きつとやるでお酌でもしろ！』

主人から出された徳利を受取つて、それでも中腰になつて酌をしながら、氣になるといふやうに奥の方をじつと見詰めた。

『こぼれるよ、おい！』

『だつて……。』

まだ奥を見詰めてゐたが、やつと安心したといふ風で、

『おらがこんで、あんねえに、上さんと喧嘩したか？』

長兵衛は頭を振つた。

『だつて、おつかなかつたにも何にも……。旦那も何うしてあんねえに怒つただ？ え？ おら、お

つかねえで遁けちやつた——』

『そんなことは好いよ、もう——』

『だつて、あんねえに旦那の怒つたのを始めて見ただアよ。おつかねえ、おつかねえ——』

『お前には怒らねえから好いちやねえか？』

『だつて——』

『いつあんな目に逢ふかわからねえツて言ふのか？』長兵衛は笑つて、酌をして貰つて、ぐつと飲んで、またついで貰つて、『本當だな……。喧嘩したつてまんねえな！ それよりは仲好くする方が好いな！』

『本當だよ』

『お前とは仲好くしやうな！』

かう長兵衛が寄添ふやうにすると、お留はいきなり飛び退いて、また奥の方を覗き込んだ。奥では誰か物を言つてゐるやうな氣勢がした。

『大丈夫だよ』

『……………?』

お留は手を振つて見せた。誰か奥から出て來たら、すぐ遁け出して向うに行つて了はうとするやうな態度を見せた。

一四

『もう、おら、厭アだよ……。おつかねえだ』

かう言つてお留はまた腰をそこに落附けた。

『何がおつかねえだ?』

『何がつて、おらア、殺されるのは厭アだで……?』

『馬鹿!』

長兵衛は半ば笑ひながらかう言つた。また暫し沈黙が続いた。

長兵衛はふと思ひついたやうに、

『お留!』

『何んだな?』吃驚したといふやうに女は両手を舉げた。

『馬鹿』

長兵衛は笑つた。

『だつて、びつくりしただもの……。急に呼ぶだもの——』

『お前、俺の言ふことを正直に言はなくてはいけねえぞ?』

『……………?』

『いゝか?』

『俺が知つてゐることなら、何でも言ふけど……。その代り、この間のもの呉れるな?』

『やるよ、やるよ……。』かう煩ささうに、またわかつてゐるといふやうに長兵衛は言つて、『今日、入

江巡查來てたんべ?』

『俺ら知らねえ』

お留は頭を振つた。

『知らねえことがあるもんか? 知つてゐるなら、言つて呉れ?』

『だつて、俺、本當に知らねえいんだもの……』

長兵衛は自分で徳利を取つて、それを倒にするやうにして注いで、『本當に知らねえか?』

『本當に知らねえ』

『なら、今日でなくつても、俺のるねえ時、入江巡査がいつでもやつて來てるるか?』

『旦那のるねえ時、來てることはいつでもあるな……』

『奥に?』

お留は點頭いて見せた。

『お上さんと入江巡査と……』言ひかけて、左の手の指を押しつけるやうにして、『そんな風なことはするか?』

『知らねえな? 俺?』

お留は意味ありさうに笑つた。大きく笑つた。

『何がおかしいんだ?』長兵衛はわざとむつとむづかしい顔をして見せた。

『だつて、旦那妬いてゐるからさ! あは、』とお留は笑ひ續けた。

『それはあたり前ぢやねえか? 妬く方が本當だ……』

『大丈夫だよ、お上さんは……。操正しいで……。旦那のやうに、相手をいくたりも持つてゐねえでな?』

『馬鹿!』

長兵衛はまたかう怒鳴つた。かれには自分ながら自分の心がわからなかつた。こんな低能な女に?

ちよつと考へて見ただけでも自分の賤しいのがわかるやうな女に? また自分の心? 體? 何れほど

わるくなつてゐるかといふこともはつきりわかるやうな女に? 女房の男を拵へるのを責て置きなが

ら、自分はそんなことをしてゐる……。そんなひどいことをしてゐる……。人間らしからぬことをして

ゐる……。かう思つたが、かれはすぐそれを壓し伏せた。かれはそれを考へるに堪へなかつた。さうい

ふところまで自分が落ちて行つたといふことを、またさういふことを平氣でするやうになるまでやけに

なつて來たといふことを、またいろいろと持つてゐた美しいもの、貴いもの、善いものをすっかり何處

かで遺失して了つて、反抗から反抗へと心が荒みつゝあるといふことを自分で自分に考へるに堪へな

つた。かれは泣きたいやうな氣がした。かれはいきなり徳利をお留の鼻先に出した。

『もう一本入れて來い!』

『もう、酒はおつもりにしなはれ?』

『まア、好いから入れて來う!』

かれは頭を押へるやうに言つた。

強くて言ふので、お留は爲方なしに、徳利に酒を入れて持つて来た。長兵衛はそれを鐵瓶の中に入れてながら、

『もう寝て了へ！』

『だって。旦那さ、まだ飲んでるぢやねえか？』

『己の飲んでる中は、起きてるて、酌をして呉れるのか？』

奥でまた物音がした。お留はそつちを覗き込んだ。

『お上さん、寝たんけえ？ もう……』

『そんなこと、俺は知るもんか……。もう寝ろよ……』

『邪魔になるか？ 俺が——』

『邪魔だ、邪魔だ』

『それぢや、もう寝べい——』かう言つたが、そつと長兵衛の傍に行つて、何か耳打をして笑つた。

『馬鹿！』

『ほんたうだよ。うそをつくときかねえぞ……。好いか？ 旦那さ』

『まあ、向うに行けッていふのに……』

かう長兵衛は女を突き飛ばすやうにした。

此時、すつと奥から影のやうに主婦が出て来た。それを見ると、お留は慌て、自分の室の方へと遁げ込んで行つた。

主婦は立ぎ、してゐたらしかつた。しかし何も言はなかつた。そのまゝ亭主の酒を飲んでる傍を通つて、店の方へと行つたが、戸が閉つてるのを見て、引返して勝手の方へと行つた。そこでもいろいろなものをガタビシ音を立て、片附けてゐるやうだつたが、それがすむと、また此方へと出て来た。そして圍爐裏の前のところに来て坐つて、黙つてそこにあつた長い煙管を取つて、烟草をつめて、火をつけて、そしてそれをすばすばと吸ひ出した。薄い煙が微かにあたりを漂つた。

すぐ前に坐つて居りながら、絶えず盃を口に當て、居るだけで、長兵衛は唯黙つてゐた。主婦も何も言はなかつた。戸外ではもう残り少なくなつた蛙のなく聲が時々絶えてはまた續いた。

主婦は一服すつたあとで、またもう一服つめてそしてそれに火を點けた。何か言ひたいといふ要求がお互にあるにはあるらしかつたけれども、それを言つては、また喧嘩になるか、でなければ互に一層面白くない思ひをしなければならぬといふやうに、言ひ合せたやうに押し黙つてじつとしてゐた。さつき娘のお金が壁の隅に押しつけて行つた机の上には、學校の道具の風呂敷に包んだのが、そのまゝラン

ブの光線に照されてはつきりと見えてゐた。

主婦は煙をすうと長く吹いたが、その煙管を爐縁で叩くとそのまま今度は靜に立ち上つて、前と同じやうに、かれの坐つてゐる傍を通つて、そして向うの方へと入つて行つて了つた。後を振り返つて見やうともしなかつた。

長兵衛は始めから少しもそつちを見ず、その傍に坐つた時にも、たゞそこに人間のゐるのを認めないやうにわざと冷やかに皮肉に構へてゐたが、その立つて向うに行き出した頃から、じつとその後姿を深く深く見詰めた。そして暫く経つてから、

『馬鹿!』

と言つた。しかし、それは主婦を罵つたのか、それともまた自分を罵つたのかわからないやうな氣がした。つくづく自分の慘めな生活が悲しかつた。浮び上らうとしても浮び上ることの出来なくなつたその身が悲しかつた。

かれは頻りに酒を呷つた。何うともなれ! と思つた。家なんか潰れて了はうが、何うしやうが、そんなことは頓着しないと思つた。自分ばかりがわるいんぢやない……。他もわりいんだ。村の奴等もわりいんだ。……かうかれは思つた。つゞいてお留のことがまた思ひ出されて來た。あの獸のやうな女! あれでもあの嬢よりは愛情がある! かうかれは口に出して言つた。かれの眼にはその暗い狭い納屋の

中がはつきり浮かんだ。

一六

主婦のお虎は言つた。『だつてさういふ噂だもの……?』

『僕が?』

『さうさ……』

『それは丸で思ひもかけない濡衣だね?』

『でも、本當らしいな……?』

『馬鹿々々しい話だな……』入江巡査は大負けに負けたといふやうに、いやにでれついた表情をして、

『誰が言つたね?』

『誰ツて、皆なさう言つてゐるよ、そこら中で……。あのだるまやの娘は、えらい娘なのをお前さん知らないの?』

『それは大知りだがね?』

額をひたりと叩くやうな眞似をして、『それは大知りのこんこんちきさ……。だから、そんなことはう

そだよ』

『何うだかわからないな……』

『うそだつて、當人が言ふんだから、これほど確かなことはないね……』入江巡査はわざと笑つて見せた。

『あの娘は、お前さん、男が幾人ゐるかかわらないつていふぢやないか。寒川に嫁御になつて行つた時にも、二人とか男が出来てゐて、そのために不縁になつて戻されて來たのをお前さん知らないことはあるまい……。それに、今でも始終二三人づゝはくつついてゐるんだつてね……。あの村役場の秋公なんかもその一人だつていふ話だよ』

『秋公？ そんなことはなからう？ あいつに、そんな腕はあるまい……？』

『ところがさうぢやないんだとさ……。これはもう、たしかなところから聞いたんだから、間違はないんだけども、娘の方から惚れ込んでゐるんだとさ』

『誰が言つたね？』

入江巡査はもうさつきのやうにふざけた顔の表情は見せなかつた。眞面目な顔になつた。

『そおれ、見なせい！ 氣になるろう？』

『なアに、そんなことはありはしねえがな……。氣になるも氣にならねえもねえがな。秋公の監督を

頼まれてゐるからな……。本當かな？』首を傾けて、『まさか、そんなことはあるまいと思ふがな——』

『心配になるろう？』

お虎は笑つた。しかし、それが事實だつたら、唯笑つてはゐられないやうな氣がした。

『本當に知らねえんか？ お前さ？』

『知らねえ』

入江巡査は眞面目であつた。

じつとお虎はその顔を見てゐるが、『あきれたもんだな……。それぢや矢張本當なんだな……。かまさかけて見たら、すぐはまつた！』

『それはさうぢやないけどもがな』

その辯解にも熱がなかつた。

『本當にお前さ——あんな娘に關係しては駄目だぞな、確なことはありやしねえぞ。しまひには金を取られておつぽり出されるぞ！』

『金なんかねえから大丈夫だよ』

『だつて、俺のそこから金持つて行くぢやねえか？』

『まア、好いや、そんな話——』入江巡査はむしやくしやするといふやうに、『何んとも言ふが好い

や——』

『あの娘、本當に旨いんだってな。それで、皆な關係した男が忘れられずにくつついて来るんだってな？ 他に男ぐれるあつたって何だって、自分が振られさへしなければ、それで好いっていふ氣になるんだってな、男が？ それほど旨いんだって？ さうかな？ お前さん？ 何うだな？』

『そんなこと知らねえ……』

『何うだ……。そんなこと知らねえなんて、しらじらしい……。いくら隠したって、ちゃんとわかつてゐるから駄目だぞな』

『そんなら、さうとしておくさ！ 面倒くさい！』入江巡査はいくらかやけになつたやうに言つた。

一七

入江巡査はその焦燥をやつと押へたといふやうに、

『それにしても、今日は大丈夫かね？ 歸つて来るやうなことはないかね？』

『今日は大丈夫だよ……』

『此間は弱つたぜ？』

入江巡査は笑つて見せた。

『この間だつて、あんなことはありやしないと申つたんだけども——ひよつくり歸つて来たでな——』

『でも、何でもありやしめい？』

『何でもねえだとも……。あの時きり、何も言ひやしないよ』

『少しも言はない？』

『言はねえ……』

お虎は軽く頭を振つて見せた。お虎はこの頃急にしやれ出した。最早今までのやうに、頭髮も箒のやうにしてはゐるなればかりでなく、着物なども成るだけ新しいのを着るやうにした。今でもそつと目に立たないほどのおつくりをしてゐた。

『えらい騒ぎだつたな。此間は？ 俺もびつくらした』

『きいてゐたんけえ？』

『裏できいてゐた——』

『ふむ……』

お虎はかう言つたが、あとを何うつゞけて好いかわからなかつた。

入江巡査はさつきの話——娘の方から秋公に打ち込んでゐるといふ話をきいてから、急に尻が落附かなくなつたといふやうに、頻りにあたりを見廻したり何かしてゐるが、突如に、

『俺ら、ちよつと行つて來なくつてはならないことがあつたのを思ひ出した……。さうだ、すっかり忘れてゐた……。?』

と言つて立上りかけた。

『何うしたんだな?』お虎は慌て、男の顔を見た。

『ちよつとな、調べることがあつた、學校の近所まで行つて來なくつてはならないことがあつたんだ……。さうさうすつかり忘れてゐた……。ちよいと行つて來るからな——』

『うそだ、うそだ——』

お虎は立上つた。

『うそのことなんかあるもんか。本當とも……。すつかり忘れてゐたんだ。あれをしなくつては、何うしてもいけなかつたんだ……。明日困るんだ……。御奉公が勤まらなくなつて了うでな……。ちよつと行つて來る……。』

その袖をお虎は捉えた。『うそだ、うそだ……。』

『うそも何もありません……。そんなら一緒に行つて御覽? あそこに行つてな、ひとつ此間の放火のことを調べなけりやならないんだ……。すぐ歸つて來るよ。十時位までには、おそくも歸つて來るでな?』

『さうぢやない、それはうそだ……。あのだるまやへ行くんだ……。俺が話したで、それが心配になつてしやうがなくなつて來たんだ……。さうだ、さうだ……。それに違ひない——』お虎は容易にその袖を放さうとはしなかつた。

『そんなことはありやしねえよ……。たしかにありやしねえ。うそと思ふなら、ついて來て見な?』

『だつて、本當にさうでも……。何も、今から行かないたつて好いぢやないか?』

『さうは行かねえでな……。それぢや、御奉公は出來ねえで……。すみさへすればすぐ歸つて來るで……。今から此處にゐるよりも、却つてその方が好いんだよ。人目につかねえで——』

かう言つて無理に振拂つて、入江巡査は外へ出て行つた。お虎は頻りに留めたけれども、しかも何うすることも出來なかつた。

一八

入江巡査はそこを出て、暫し行つて振返つて見た。しかしあとから誰もついて來るやうな様子もなかつた。かれは安心してすたすた歩いた。

明るい夜であつた。月は丁度半弦から満月にならうとするぐらゐで、銀のやうな白い光を田やら村やら家やら林やら路やらにそゞやうに投けてゐた。四面を劃つた山の姿は、線で描いたものか何ぞのや

うにくつきりとあたりに際立つて見え、樹の影と草の影とは黒く重なり合ひ纏れ合つて、到るところで促迷藏かざれんぼをしてゐた。蛙の聲が靜かに聞えてゐた。

かれはもう一度學校の方へ行く路の角のところまで振返つて見た。しかし矢張誰の姿も見えなかつた。かれは愈安心して、學校の方には行かずに、そのまゝ眞直に街道を驛はづれの方へと行つた。向うから一つの黒い影が此方に向つて近寄つて來た。

摩れ違ひながら、

『お晩!』

と挨拶して行き過ぎやうとした。それは村の青年の一人であつた。

『おい、ちよいと、ちよいと……』

かう入江巡査は呼び留めた。

『何です?』

青年は立留まつた。

『秋さ、何處へ行つたか、しらんか?』

『秋さッて? 杉山の?』

『さう——』

『晝間貞さんの許で見かけたけど、夜になつてから、何處さ行つたか知らんな』

『竹屋にゐるやしねえか?』

『知らねえ——』

『竹屋から來たんぢやねえのか?』

『俺か? 俺あ、さうぢやねえ。ちよつと俊さのそこに行つただ』

『や、これは失敬……』

で、すれ違つた。一町ほど歩くと、また黒い影が向うからやつて來た。今度は村役場の書記であつた。

『何處に行くか?』

今度は向うから訊いた。

『ちよつと……』

『竹屋か?』

『さういふわけぢやないけども』いくらか入江巡査は躊躇したが、『秋さ竹屋にゐる?』

『何うだかな?』

『君は今まであそこに飲んでゐたんぢやないか?』

『飲んでほるたんだけでも、あそこにはるねえやうだつたな？ それとも奥にゐたかも知れねえけども……。何か用かね？』

『何アに、用ッていふこともねえんだけど、ちよつと人に頼まれたでな……。お前さ、誰と飲んでゐた？』

『俺か？ お雪と飲んでた……。』書記はかなり酔つてゐた。

『お駒、ゐるか？』

『そらお出でなすつた！ 矢張、女王のあとを追ひ廻してゐるひとりかね？ 君も——？』

『まア、そんなことは何うでも好いや——ゐるか？』

『ゐるぜ！ あそこの娘だもの……。』

こんなことを言ひながら、そのまゝ、書記はすれ違つて行つて了つた。

酔つてゐるやがる——かう思つたが、(ではあそこには来てねえかな……。何うも不思議だ……。秋公がその相手だとは、俺ばかりぢやない、村の誰だつて知るめい。あのお駒に金を出してゐる勝木の大盡だつて知るめい……。)成ほどさう言はれて氣が附いて見れば、此間の夜奥でいやにいちやついてゐたのは秋公らしかつた。入江巡査は忌々しくなつて來た。

一九

入江巡査があとから誰もついて來ないと安心したのは、それは誤りであつた。學校の方へ行く路の角で振返つた時にも、もう少し注意深かつたならば、かれは垣にぴたりとくつ附いた影を、はつきりそれと認めたに相違なかつた。そしてその影はかれが歩き出すと同時に、靜かにそこから出て、垣の影に添ふやうにして動いて行つたのであつた。

無論、それはお虎だつた。

入江巡査の立留まる度に、その影もまた立留まつた。否、巡査とすれ違つて此方へやつて來るその人達にもそれと知られないやうにしなければならぬので、かの女は家と家との間に小さくその身を隠したりした。酔つた村役場の書記は、鼻唄をうたひながら、心持好ささうに、そのお虎の小さくなつてゐる前を通つて行つた。

(それ見ろ！ うそだ！ あのあまの處に行くんだ！) さつき、學校へ行く方の路の角で曲らなかつた時から、さうかの女は思つたが、それが次第に厚い鐵の板か何かのやうになつて強く重くかの女の胸を壓した。お虎は餘程後から飛びついて行つてやらうかとも思つた。

しかし、さう思つたすぐあとから、かの女はそれを押へる冷靜な心持になつた。さうしては、わかる

べきこともわからずにすんで了ふ。いつまで経つても、此方が騙されたまゝになつて了ふ……。さうだ、今夜こそは、すっかり突き留めてやらう？ 此方がいくらつらい思ひをしたつて構うことはない……。かう思つてお虎は知れないやうに、また見失はないやうにこつそりあとからついて行つた。

次第に驛はづれになつて行つた。そこには人の住まなくなつた大きな家の傾いたままそのまま月に照されてゐるのが見えた。少し行くと、女共の笑ふ聲がけたましくきこえて來た。

竹屋——それは驛に二軒あるだるまやの一軒であるが、そこには今、お雪とお定とお三輪とがゐる。收穫のすんだ時とか、麥刈の終つた後とか、でなければ養蠶がすんで、繭買が大勢やつて來て、村に金を落して行つた時分とか、さういふ時には、もつと大勢海岸の方からさうした女達が入つて來て、それは賑やかになるのであつたけれども、今は時節がわるいので、一人減り二人減りして、その三人しか残つてゐないのであつた。此方でお虎が立つて見てゐると、入江巡査の黒い影はその前で立留つたには立留つたが、すぐその内には入らずに、先づちよつと覗いて見て、横に外れて、そして厨の傍の小さな窓のところへと行つて立つた。専心に、内の様子を覗いてゐるらしかつた。

お虎はお虎で、そこから十間ほど離れた、その大きな家の壊れた壁のところを寄せて、じつとしてゐた。そこは入江巡査のゐる位置からも巧にかくされてあるばかりでなく、街道を行く人達からも全く見あらはされる虞はないやうになつてゐた。お虎はじつとしてゐた。

竹屋では、女達が男と一緒に頻に卑猥な唄をうたつてゐる聲がはつきりと此處まできこえて來た。牛公と清太郎と貞雄とがそこにゐるらしく、中でも貞雄の太い聲があたりに際立つてきこえてゐた。女達は酔つてゐるらしく、頻りに調子を合せて唄つた。

入江巡査の後姿は、暫しの間そこにびつたりとくつついたやうに黒くなつて見えてゐたが——容易にそこから離れさうに見えなかつたが、集まつて來る蚊を拂つたり何かしてちよつと他所見をしてゐる中に、何處に行つたか、その姿はそこから急に見えなくなつて了つた。お虎は慌て、その壁のかけからその姿をあらはした。否、そればかりではなかつた。今まで入江巡査の立つてゐるところへと、今度はお虎が拔足差足して寄つて行つた。

110

お虎の眼には、お雪とお三輪の笑つた顔が映つた。續いて清太郎が太い腕でお定を抱え込むやうにしてゐるのが映つた。男も女も夥しく酔つてゐるらしく、皆な聲を張上げて唄つた。

何處に行つたか、娘のお駒の姿はそこに見えてゐなかつた。

お虎はすぐそこから身を離してあたりを見廻した。

『何處に行つたんべ？』

驛

かう獨語のやうに言つて、頻りに月の光りに透して見るやうにした。向うの方で樹の影が頻りに動いた。誰かがこつそりそこから出て行つた。

入江巡査かと思つたが、それはさうではなかつた。

『誰?』

聲をかけて見た。返事をせずその影はすたすた向うに行つた。

秋公ぢやなかつたかしら? かうお虎は思つて見た。何うもさうらしいやうにも思はれた。背も中ぐらゐだつたし、瘦せてもゐたし、頭をハイカラにわけてもゐた。さうだ……。確にさうだ……。お駒のところ忍んでやつて來てゐたのだ……。しかし、あまりに種々な人がやつて來てゐるので、これはいけないと思つて、一時そこから出て行つたのだ……。お虎はこんなことを思ひながら、細い通を裏の方へと入つて行くと、そこに更に右の畠があつて、灯が玉蜀黍の廣葉の間からチラホラと揺いて洩れた。

お虎は出来るだけ近くに行つた。そしてその中を覗いて見た。そこにはランプが室の真中に吊つてあるだけであつた。誰の姿も見えてゐなかつた。かの女は爲方がなしにそこから出て來た。かの女はそのまま、歸る氣には何うしてもなれなかつた。入江巡査の所在を探さない中は、何うしても歸ることは出来ないと思つた。かの女は家の周圍をぐるぐる廻つた。街道の方へも行つて見た。その女達の騒いでゐる店の方へも行つて、もう一度覗いて見た。

『誰だ? さつきから覗くのは?』かう突如に清太郎の聲がした。お虎は慌て、玉蜀黍の中に遁けて蹲居まつた。

『出て見ろ、出て見ろ! どいつだ……。他人の家を覗くのは?』

それと同時に、男と女とが二三人表へ出たやうな氣勢がした。『本當に失敬な人だね?』こんなことをお雪も言つた。お三輪も外へ出たらしかつた。しかし、暫くすると皆なそんなことは忘れて、『好い月だこと!』などと言つてあたりを眺めた。

たうとう入江巡査の姿を何處にも見出すことが出來ないので、失望してお虎のみ歸つて來た。と、向うから分家の上さんがやつて來た。

『お虎さか?』

『あ、お前さんけえ?』

『何處に行つただな……。?』

『ちよいと其處まで……。おめいさは、これから何處へ行くだ?』

『竹屋に、家のおやぢ行つてゐやしねえかと思つて?』

『ゐねんか?』

『さつききてゐたんだけどもな……。』

『竹屋にはるねえやうだつたぜ』

『おめいさ、そこから来たんか?』

『ちよつと店の前を通つたでな……。清太郎がお雪とあばれてるたつけ?』

『さうけえ? 俺ア、ちよつと行つて見て来る』

分家の上さんはさつさと歩いた。月は明るくあたりを照した。

ところが、今まであれほどお虎が探しても、何處にもその姿を見出すことが出来なかつた入江巡査が、ひよつくりそこにその姿をあらはした。『お晩になりやした——』分家の上さんがかう挨拶して通り過ぎた。

入江巡査の姿は、いつまでも黒く其處に月光の下に浮き出すやうになつて見えてゐた。

二二

『それで一體、何うしやうツて言ふんだね?』

ある日、貞介はかう長兵衛に向つて言つた。長兵衛は黙つてゐた。言ひたいことは胸一杯あるらしかつたけれども、それを何う言ひあらはして好いかわからないやうに見えた。

『え?』

貞介は促した。

『決心もつかんのさ、俺は? いつそのことすつかり處分して了はうかとも思ふんだけど……』

『處分とは?』

『爲方がねえ……。俺だけでも、此處を退いて了ふのさ……』

『それで、村上にでも行つてゐるやうといふのかね?』貞介は笑つて、わざと皮肉に、『さういふ決心ならそれも好からうさ……。それが出来れば?』

『……?』

長兵衛は何か言はうとしたが、そのまゝ止した。

貞介はじつと相手の顔を見て、

『葡萄の山林は、もうすつかり手放して了つたつてな?』

『何うも困つたでな……。二進も三進も行かなくなつたでな……。』かうは言つたけれども、長兵衛の顔はいくらか赧くなつた。かれはそのことをひたかくしにかくして置いたのであつた。

『俺に話して呉れ、ば好かつたに……。水臭いと思つたよ。何うもすんで了つたことはしやうがねいけども、あそこは、太田屋の昔から持つてゐる一番好いところだつたんだからな? おらア、それをきいた時には、びつくらした——?』

『話さうと思つたゞけども、急だつたでな——』

長兵衛は悄氣た表情を顔に見せつつ言つた。

二人は暫し相對したまゝ黙つてゐた。

不意に貞介は頭を擧げた。そして言つた。『何うだね？ 俺の意見をきくかね？ 長さは？』

『……………？』

『きくなら言つても好いが、何うだね？ きゝもしねえものを好加減に言つたつてしやうがねえでな。言はねえで好いことを言ふわけだ？』

『きくでな……………』

長兵衛は益々しよけた。

貞介はつゞけた。『俺の考へではもう一度了簡を入れ易へねえかな？ お虎のこともさうだが、それよりも先に、長さ、生れ易らねえかな？』

『……………？』

『さう言つちや何だけでも……………。また今までもそんなことは言つたことはなかつたけども、兎に角、長さとは、小せい頃からの友達だ、それに、筋をたどれば遠い親類にもなつてゐるで、決してわるかれとは思つてゐるねえだ。何うかして成功するやうに、盲く行くやうにと、始終思つてゐる

だ。だから、村長になる時だつて、俺ら随分意見した。何にもそんなことをするがものはねえ。落附いてるせいすりや好いつてな？ 覺えてゐるだらうと思ふんだ……………。實際、お互に助け合ふつもりでゐるんだで……………』

『それはわかる……………』

長兵衛は低頭きながら言つた。

『ぢや言ふけども、他人のことよりも、自分のことを先きにして、きつぱり、村上の方を思ひ切つたら、何うだね……………？』

貞介はかう言つて、じつと相手の方を見た。長兵衛の顔は見る見る變つて行つた。いかにもつらさうに、且つ苦しさうに見えた。これだけでも、長兵衛がいかにかその女に打ち込んで行つてゐるかがわかつた。

三三

『何うだね？』

暫くしてから貞介は訊いた。

『それは構はん……………。村上をやめるのは構はんかな？』長兵衛はいくらか急ぎ込んで、『しかしそれと

驛 驛

は、問題が丸で別な問題だぞな？」

『いや、さうぢやない……。別な問題ぢやないと思ふな？ それからきめてかゝらなければならぬと思ふな？』

『さうかな？』

長兵衛は低頭いたまゝで言つた。

『何うせ、駄目なのはわかりきつてゐるんだぞな。金をつぎ込む中は、好い顔もしてゐるだらうけれど、それが出来なくなれば、あと足で砂をかけられてゐるのは、わかりきつてゐるぞな？』

『……………？』

『でも、思ひ切れねえかな。惚れ込んで、さういふ風には考へられねえかな……。もう少し好い目が出ると思つてゐるかな？——』

『いや、さういふことは、何うでも好いがな……。』長兵衛は急に思ひ決したといふ風で、『それよりも、嬢の問題をもう少しはつきり相談したいだが——』

『俺の意見は矢張きいてはくれねえのかな？』

『さういふわけぢやないが、それはまた別に考へて見るで——？』

貞介は爲方がないといふやうに、『それで嬢の方だつて、何うしやうつて言ふんだな？ 離縁しやうつ

て言ふんか？』

『それよりも、もつと現在のことを糺したいんだ。不都合なことを……。？ お虎が何ういふ了簡で、

さういふことをしたかを——』

と、貞介はそれを奪ひ取るやうにして、

『でも、さういふことは、ちやんと證據を握つてゐるだかね？』

『握つてゐるよりも何よりも、皆な人がさう言うぞな——』

『いくら人が言つたとて、證據がねえぢや責めやうにも責めやうがねえつていふやうなもんぢやねえかね？ 入江巡査が始終入り込んでゐるつていふだけぢや、何うにもならねえ？ お虎だつて、そんな

ことは知らねえつて言うだらうぞな？』

『それぢや、まア、しやうがねえ、俺の勝手にするか？』

長兵衛は、やけになつたといふやうにして言つた。

『それは勝手にするなら、するで好いがな……。何うせ、長さんの家のこんだぞ？ しかし、やけにやるのだけは、よせ——。やけでものをすると、何うも人間らしくなつていけねえ。人間は人間らしくものをしねえでは、このお日様にすまねえぞな——』

『……………？』

『その始めといふものを考へて見る方が好い……。誰がわりいだか。さうなるには、いづれ誰かわるかつたに違ひねえだ。俺がわりいと、俺と嬢と兩方わるかつたとか、その原因があるに違ひねえ！ その原因を考へて見ねえぢやいけねえ。え？ 長さ？ 何うだな、誰がわるくつて、こんなことになつたんだな？ 長さもおとなしくしてゐて、それでお虎がさういふ真似をしたといふのなら、それは嚴重に糺明でも何でも出来やうけれども、元が、その元の始まりが長さぢやねえかな。長さから起つて來てゐるのぢやねえかな。長さの方で亭主らしくしねえから、嬢の方でも嬢らしくしねえつていふわけぢやねえかな？ まア？』

『男と女とは同じにはされんぢや？』

『さうぢや、男と女とは一緒にはされんぢや……。それはわかつとる！ しかし、同じ人間で、たまには一緒に考へて見てもやらねえぢやいけねえ！ それとな、長さの嬢がわかつてゐる女で人一倍辛抱強い女で、ぐつとぬけてゐる女なら、それでも好いけれど、さういふ豪い女は居らんでな』

二三

『それぢや、何うしたつて、俺がわるいつて言ふわけだね？』長兵衛は昂然として、『さういへば、さうかも知れねえ？ 俺が馬鹿だ、かういふことが始まつただ……。それには違ひねえ……。』

『それはお前さばかりがわるいつていふわけでもあるめいがな』

かう貞介が遮り懸けたのを、長兵衛は上から押かぶせるやうにして、

『いや、俺がわりんだ……。俺さへ生れて來なけりや、太田屋の家はこんねえになりやしねえんだ。俺が馬鹿だ——利益にも何にもなりもしねえことに骨を折つて、物笑ひの種を蒔いた。こんな馬鹿けたことはねえだ……。』

『いや、さういふことを言ふんぢやないんだ？』

『何アに、さうだ……。人間にはな、落目といふことがあつてな、二進も三進も行かなくなると、皆なさういふ風に薄情になつて來るだ。その證據には、俺がこんなにならねえ中は、俺が何をしたらつて、意見がましいことを言つた奴はねえぢやないか。皆な俺の御馳走酒に舌鼓を打つた奴ぢやねえか？ それを考へると、業が沸えて來て、しやうがねえ？ お前さまで、そんなことを言はうとも思ひもかけなかつたぜな！』

長兵衛の顔には、さつきとは違つて——丸で別な人間かと思はれるほどそれほど強い強い一種の調子が出て來てゐた。

あべこべに今度は貞介の方で黙つた。かれは手を拱いたまゝ、じつと一ところを見詰めたまゝだつた。

『馬鹿々々しい、本當に？ 何のために、俺は骨を折つたのだ……』長兵衛は猶ほ言葉を留めなかつた。

『そのやつたことは成功しなくつたつて、そのために、俺の盡力は消えはしねえい筈だ……。俺のやつたことは皆な村のためだ。自分のために考へてやつたことは、ひとつだつてありやしねえ……。それから比べたら、今の村長どんなんか、何うだな？ あれでも村長かな？ 何に一つしやしねぢやねえか？ 唯、人のいふなりになつてゐるぢやねえか？ 丸で木偶ぢやねえか？ 俺なんか、さうぢやなかつた。な貞介、それだけはお前さになつてわかるだらうな？』

『今は、さういふことを言つてゐるんぢやねえ……』

かう重々しく貞介は言つた。

『それはさうさ……。俺だつて、今更、そんな愚痴を言ふんぢやねえけどな、あんまりわからなすぎで、それで言ふだア。もう少しわかつて呉れると思つたお前さへさういふ風だから、つい、言はねえでも好いことを言つたんだ。過ぎ去つたことをいくら言つたつて戻つて來ねえつていふぐれるのことは俺だつて知つてゐる……。何うか、出来るものなら、お前の世話にもなりてい。困つた時には、友達の智慧も借りるのが當り前だ！ とかう俺ら思つて、それでやつて來たんだ！ 耻辱も忍んで、いろいろなことを打明けて話したんだ……。出來ねえなら出來ねえと唯一言言つて呉れさへすれば好いんだよ……』

俺も男だで、お前さが相談相手になつて呉れなげりや俺、一人でやるだけさ……』

『……………？』

貞介は黙つたまゝだつた。

長兵衛も暫しの間黙つた。室の内はしんとして了つた。貞介にしても、この際、長兵衛を益々自暴自棄の筈の中に落して了ふには忍びなかつたけれども、しかも覺醒もしないものを——村上の女に全く盲目になつてゐるものをいくら助けてやつたところで際限がなかつた。

二四

『まア、もう少し考へて見る方が好いが、しかしやけになつては駄目だから、それだけはならないやうに注意しなければいけない……』かうした貞介の言葉をあとにして長兵衛はふいと此方へ出て來て了つた。

(矢張金を出すのが厭なのだ……) かう思つたかれは皮肉な笑ひ方をした。友達だとか、親類だとか何とか言つたところで、いざとなれば皆なあんなものだ。好い時は相手にもなるが、一度躓いたとなると、もう此方を振返つて見やうともしなかつた。『まア、しやうがない！ なるやうになれ！』かう長兵衛は獨語した。

かれは貞介の言つた言葉を繰返した。村上を思ひ切れ！ 大きなお世話だ……？ 何の権利があつて、あいつがさういふことを言ふのか？ と、かれは思つた。しかし、その中に、貞介の言つた言葉の中に、ちよつと氣になつた言葉があつた。それは他でもなかつた。覺醒といふ言葉であつた。學問も何もない癖に、土百姓の癖に、生意氣な言葉を使ふ！ と思つたが、それだけでその言葉を片附けて了ふことは出来なかつた。覺醒！ たしかにその身は覺醒しなければならぬ身であつた。何も彼も考へ直さなければならぬ身であつた。と、今までのやけは、たんかは、自分が隅の隅に押し詰められたための反噬で、實は弱い弱い身であつたことが、ひしと思ひ起されて來た。

『馬鹿！』

かう口に出してかれは言つた。しかしそれは自分を罵つたのか他を罵つたのかわからなかつた。そんなことを思ひ出すのは癪だ！ と、一方では思ひながら、一方では（さて、さういふ風に俺が覺醒して、村上も思ひ切れれば、酒も飲むことをやめる。丸で生れ變つたやうになる。他人の言ふことをも何でもきくやうになる。羊のやうにおとなしくなる？ さてそれで、何うにかなつて行くだらうか？ あの女房も、正しい女になつて行くだらうか？ 矢張、何も彼も思ひ切るだらうか？ と、とても……それはとても駄目だ！）こんな風にかれは思つた。

と、一方からは、村上の女が頻にかれを脅かした。此頃では、最早、以前のやうに——すぐ平林の豪農を持ち出すことはなくなつたけれども、それでも思ふまゝにならない場合には、いつでも自分の勝手に出ることが出来るといふやうな態度を見せた。つまり此方では何うすることも出来ないほどに堅く縛られてゐるのに、その束縛を離れるくらゐなら、寧ろ生命を絶たれても好いくらゐるに縛られてゐるのに、向うでは、何んな自由でも勝手に保留してゐることが出来るのであつた。かれは女が自由にならなために憤激して、その家に、かれ自身が大金を出して構へてやつた家に火をつけて、女諸共自分もそこで死骸となつて發見されやうかと思つたこともあつたことを思ひ出した。また、ある時は、草履の底で散々踏まれるやうな惨めな目に逢ひながら、何うしても女から離れて來ることが出来なかつたことを思ひ出した。またいくら此方で憤激して見せても、女は（貴方、そんなに腹を立てたつて、私さへ言ふことをきけば、すぐ何んでもなくなつて了ふぢやありませんか？ そんな貴方の威嚇なんかちつとも怖くない？）かういふ顔の表情をして平氣ですましてゐたことを思ひ出した。さうかと思ふと、また、ある時には、さうした場合とは夥しく違つて、體ばかりでなしに、心と心がぴつたりと合つて、夫婦でもあるかのやうに、睦まじく將來のことを語り合つたことなどを思ひ出した。

二五

つい此間も女とこんな話をしたことを思ひ出した。

『さうする方が好いわ。ちつとも困りやしないわ』

『でもな……』

『大丈夫ですつたら……。貴方の考へでは、さういふ風にして置いて、私が逃げ出すとでも思つてるんでせうけども、そんな薄情な女ではありませんよ。さうすれば、屹度、操を立て通して見せますわ』

『でもねえ……』

長兵衛は二の足を踏んだ。

『それ御覽なさい……。矢張家の方が好いんだから。私のことを考へて呉れるとか、何とか言つたつて、いざとなればお上さんが好いんだから……。矢張、私は妾にしておもちやにして置きたいんだから』

『そんなことはないけれどね……。男として、家もなくして了つて、此處に来てから、お前だつて、愛憎をつかすやうになりやしないかと思つて……?』

『そんなことはありませんよ。貴方が來てゐて下されば、それこそ何んなに力になつて好いか知れないんですもの……。それこそこの稼業を何んなにでもひろけて行くことが出来るんですもの……。何つて言つても、男よ。男があるとならないとは、大變な違ひよ。井筒家なんか御覽なさい。旦那があるだ』

けで、あんなに大きくなつたぢやありませんか。あその姐さんだけだつたら、とてもあんなになりつこはありやしませんよ。今ぢや二三萬の金を拵へたでせう?』

『さういへばさうだけでも……』

『その證據には、小春姐さんを御覽なさいな。あんなに好い藝者で、藝だつて村上で一番の名を取つてゐて、それでちつとも成功しないのは、それは男があるからですよ。あれで、何にもしないでも好いから、男さへ坐つてゐて呉れば、何んなにも大きくなれるんですからね。女一人では、何と言つたつて駄目ですよ。矢張、抱妓や何かに馬鹿にされて了うんですね?』

かう言つて長兵衛の顔を見て、

『本當にさうなさいよ。私、それこそ立派に立て、置くわ……』

『まア、考へて見やう……。さうするには、金は餘程要るかね?』

『金なんか澤山入りやしませんよ。二三人、抱妓を置きさへすれば? そしてそれが當りさへすれば?』

『ところが、それが中々當るなんていふことはないんだからな?』

『そんなことはありませんよ。あなたがゐて、帳面から何から、すつかり見て下さるなら、私、きつと當て、見せる……。檢番の役員のことだつて、貴方がゐるとるないとは、大變な違ひなんですから』

ね。女の役員は、何うしたつて男の役員に馬鹿にされますからね？』

『それは面白いな……。さうすれば、検番の役員にもなれる譯だな？』

『それはなれますとも……。貴方が来ればすぐだわ。それに、郡會にも出てゐたことがあるんですけど。貴方なら、何處にだつて知つてゐる人があるんだから、好い都合だわ』

『何うも、お前の言ふ話では、四方八方皆な好いやうな鹽梅だね？』

『だつて、さうですもの？』女はかう言つたが、『そのかはり、皆な村の方をしまつて来るんでなくっちゃ、いやですよ。お上さんなんかすつかり離縁して、きめて来るんでなくっちゃ——』

『それはさうさ』

『それが出来れば、早くさうなさいな。私に取つては、願つたり叶つたりですから、ね、ね——』その話し振では、満更戯談に言つてゐるのでもないやうに思はれた。

二六

それは何のぐらるまで本當のことであるか、またどのぐらるまで信用して聞くべきものであるか、長兵衛にはちよつと測定することが出来なかつたけれども、しかも女の熱心さは、十分に認めないわけには行かなかつた。成程、さうした社會には、かれのやうな男が必要であるには相違なかつた。また、女

としても、さういふ風に出來るものならば、圍はれてゐる妾の境涯を脱し得ただけでも、大きな感謝であらねばならなかつた。満更手管とばかりもかれには思はれなかつた。

かれはそれをきめたわけでもなかつた。唯、二人してさういふ話をしただけであつた。考へて見やう！と言つただけであつた。しかし、それが今ひよつくりかれの頭に浮かび出して來た。單なる空想としてでなしに、事實としてはつきりと浮かび出して來た。

それが出来るなら、それに越したことはあるまい……。かうかれは思つた。いつもならかうした考へが起つても（そんな馬鹿なことが出来るか？ そんな空想めいたことが……）かうすぐ思ひ返すのが常であつたが、不思議にもその時にはさうした反省は少しも起つて來なかつた。あべこべに空想が空想を孕んで來た。長火鉢を前にして、女の着物で拵へたどてらを着て、玉帳でも調べてゐる身分になつたら、それこそ何んなにのんきで好いだらうかと思はれた。さうすれば、最早あの寒い雪の山の中になくとも好いのであつた。否、も好いのであつた。またあの古い、煤けた、がらんとした家に住んでゐなくとも好いのであつた。否、そればかりではなかつた。あゝした煩さい村の人達にも、勢力のある方にばかりひよこひよこ頭を下げる卑劣な村の奴等にも、顔を見ただけでもむしづの走る今のあの分家の村長にも、あの親友面をしていざとなれば薄情きはまる貞介にも、このまゝ逢はずにゐることが出来るのであつた。かれは一種の喜悅を感じた。その道——ゆくりなくかれの前にひらけて來たその道は、決してわるい道ではなかつた。

唯、それについて考へなければならぬことは、子供達のことだった。直の方は、まだ好いとしても——嬢の好きなやうにさせるとしても、娘のお金だけは、どうも其まゝにして捨て、來るわけには行かなかつた。學校に行つて、物心がついてゐるだけに、それだけに可哀相だった。父と母とが喧嘩しただけでも、おどおどとして困つてゐるのに、そんなことになつたら、それこそ何んなに泣くだらう。何んなに悲しむだらう？　また本當に何んなに不幸の境涯に落ちて行くだらう？　それこそ他人の中に入つて、泣くにも泣かれずゐるやうな身の上になるだらう。かう思ふと、長兵衛には、とてもそんなことは出來さうに思はれなくなつて來た。何が悲しいと言つて幼いものの不幸を見るほど悲しいものはなかつた。また、何が慘めだと言つて親のない子供を見るほど慘めなことはなかつた。たとへ何んなに辛くとも、親は子供達のために犠牲にならなければならぬのではないか。たとへその身は亡びても、親は子供のために忍耐しなければならぬのではないか。罪のない子供達を泣かせて、そして親が勝手をしてゐたとて、それが何の樂みにならう？　何の愉快にならう？　かう思つて來た時、かれは始めて自分のわるかつたことをはつきり眼の前に見たやうな氣がした。

かれは黙つて歩いた。向うから知つてゐる人が來て挨拶しても、ちよつとそれに氣が附かないくらゐであつた。

二七

山道の萱や薄の中をわけて出て來たのは秋公だ。

『待つたかえ？』

『そんなに待ちやしねえけど、今日は駄目だぞな』

これはお駒であつた。手には何にも持つてゐなかつた。

『何うして？』

『何うしてツて、お袋が見張つてゐるで、とても出られやしねえ……。出たツて、すぐつかまつちやうでな？』

『大丈夫！』

『駄目だよ、お前——。それに入江の奴がいやに目を光らして見てゐるで……。此處まで出て來るんだツて、容易なことぢやないんだから——』

『皆な身から出た錆見たいなもんぢやねえか……？』

と、お駒はすぐ眞劍になつて、

『それを言つて呉れるなツてあれほど言つたぢやないか。それが厭なればこそ、今までやつてゐたこ

とが厭であればこそ、お前と逃げやうッて言つてゐるんぢやないか？ それなのに、それなのに——』

『好いよ、好いよ、戯談だよ——』

『たとへ戯談だッて、そんなことを言はなかつたッて好いぢやないか？、皮肉に——？ 私にこれまでいろいろ男があるッていふことは知つてゐるぢやないか。皆な話してあるぢやないか？』

『あやまつた！ あやまつた！』

かう秋公は打消した。

『あやまるんなら、勘忍してあけるけれど、こんどはそんなことを假にも口に出してはいやですから……。本當に、私はさう思つてゐるんだから。そのため、親をも捨て、行くつもりなんだから……』

『わかつた、わかつた！』

『本當にわかつた？』お駒は始めて莞爾と笑つて見せた。色白な、髪濃い、成ほど村の人達の大騒ぎをやるのも無理はないと思はれた。

『ぢや、何うするんだ？』

その返事はせずに、『それに、まだ、少しお金が足りないから……。此間、勝木の旦那から貰つたのは、皆なお袋に取られちやつたで——』

『いつ？』

『昨夜——』

『だッて、昨夜、そんな話がなかつたぢやないか？』

『お前さん、歸つてッてからだだよ……。あの時、母さんなかつたらう？ 歸つて來ると、いきなり、お前、旦那から金を貰つたらうッていふんだもの……。勝木に行つてきいて來たんだね？ 本當に、あのお袋ッたら、ちよつとのすきもありやしねえ。お錢のことになると、すぐ、かぎつけて了ふんだから……』

『そんな金なんかなくなつたッて好いぢやないか？』

『いくら持つて來た——お前さ』

『俺だッて、澤山はねえがな。五十兩ぐらゐるある——』

『私のがあれば、百兩足らずになるんだけど……。考へて、『その金、持ち出して來ては、もう、家に歸へれねえ？』

『そんなことはねえ！』

『ぢや、元のところにしてしまつて置けば、わからずすむんだね？』

『それはすむ——』

『それぢや、もう少し待つておくれな？』

『いつまで?』

『はつきりは言へないけども、五六日か一週間ぐらゐる……』

『早い方が好いんだがな? もう、いくらか目をつけてゐられるんだから——』
かう秋公は言つた。

『でも、此處なら大丈夫だよ。誰も嗅ぎつけやしねえ』

お駒は男の方に身を寄せるやうにした。午後の秋の日は麗らかに照つた。

二八

『それで、また、俺をだますんぢやないかな?』

暫くしてから男の方が言つた。

『まだ、あんなことを……?』

『だつて、お前を思つてゐるものは、幾人もゐるんだもの……。何が何だか、本當のことはわかりやしないんだもの……。これで歸つて明日になつたら、お前は誰かと逃げたなんて言ふんぢやねえかな……』

『馬鹿をお言ひでない?』

『だつて心配なものな……。入江巡査にもお前、惚れてるぢやねえか?』

『馬鹿をお言ひでないよ。好い加減におしよ。あんなひょうろくだまなんか、ちつとも思つてなんかるやしねえよ』

『だつて——俺達のゐるところをよく知つてゐるぢやないか。此間も見つけ出された……。お前が何か話すんぢやないかと思ふな?』

『私が——?』

男は黙頭いて見せた。

『そんなに疑ふなら、何處にでもついておいでな。お前の中着にでも何でもして、腰にぶら下けてでもお出でな。阿呆らしい……。だからあれほど言つたぢやないか。今までは私もわるかつた。何も思はずにいろいろなことをやつて來た。本當に考へて見れば、人にも顔向けが出来ねえ! それで、お前さんとふたりで何處かに逃げやう。いつまでもこんな村にこびりついてゐて皆なに顔を見られたり何かしなくつたつて好い。何處にだつて、お天道様が照る! かう言つてお前さんと逃げる約束をしたんぢやないか。すつかりわかつてゐて呉れる筈ぢやないか。それなのに、今になつて、そんなことを言つて? お前さ、いやになつたのかね? おらと逃げるのが?』

『そんなことはない——』

『ぢや、わかつてゐるのかね?』

『それはわかつてゐる……』

『わかつてゐて、何故、そんなことを言ふの?』男の笑つてゐる顔を見て、『え? お前さん?』

『何でもないよ』

『此處を遁けて、何處かに行つて、二人で、二人だけで、仲好く暮さうと思つてゐるのに、いつまでもさういふ風に嫉妬をやかれては、おらも困るでな……。それなら、それと、今の中に言つておくれ?』

『二人きりになれば、嫉妬なんかやきやしねえけども……。今ぢや何うしたつて、さういふ氣がするだもの……』

『大丈夫だで、お前さんを忘れるやうなことはねえだで、そんなことは思はねえでお呉れね、ね、ね』かう甘えるやうに身を寄せて、『あ、いやだ、いやだ……。皆んなに顔を見られるのが——?』かう言つて袖で顔を掩つてそこに突伏した。

暫く経つた。秋公もぼんやりしてゐた。日影に光つた薄の穂を風が靜かに動かして行つた。

『おい、おい、起きないか?』

かう男に揺ぶられて、お駒はそのまゝ身を起した。顔は涙に泣きぬれてゐた。

『泣かなくつたつて好いよ』

『だつて、いろく考へると、心細くなつて來るもの……。此處を離れて、ふたりきりになつたら嫉妬をやかないといふけども、それも何うだかわかりやしないもの……。男は何處にだつてゐる。それに話をするぐらゐるなことは、いつだつてある。さうすればお前はまたきつと嫉妬をやくにきまつてゐる……。何うしても、何うしても、さういふ風におらは出來てゐる。男にやかれるやうに出來てゐる。それを思ふと悲しい……。何處までお前と遁けたつて、それは離れねえ、おらが身から離れねえと思ふと、何うして好いかわからなくなるんだもの……。何うしたら好いか——?』かう言つてまた突伏さうとするのを、男は強いて支えた。

二九

『そんなにいやかな?』

暫くしたあとで、男は女の顔を見詰めるやうにして言つた。

『何が——?』

『これまで關係のあつたものに顔を見られるのが——』

『いゝえ……それも此間からだよ』お駒は顔を擧げて、『お前さんを思ふやうになつてからだよ』

『うまく言つてらア』

男は笑つた。

『まだあんなことを言つてゐる！』お駒はいくらか鋭い表情をして、『お前さは、そのくらゐにしか思つてゐないんだね？ あれほど言つても、俺の心持はわからねえんだね？』

『だつて、うまいからサー』

『うまい拙いぢやないよ。本當だよ。機嫌を取るつもりで言つてゐるんぢやないよ……。そのくらゐなら、何も、おら、苦勞しやしねえ——』

『さうかな——？』

『お前さ思はねえ前は、そんなことは少しもなかつた。さういふ男は皆な甘い男だとばかり思つてゐた。男ツて、何でもねえもんだ。體を借しさへすれば、家來見たいなもんだと思つてゐたんだよ……。ざま見ろ！ なんて思つたことなんかもあるんだよ』

『今だつて、さうだらう？』

『ところが、さうぢやねえんだ。不思議だな……。本當に不思議だな……。そんな風にしか思つてゐなかつたものがな、お前さ、すつかり變つちやつたんだ。詳しく話さねえぢやわかんねえが、急に、今までやつてゐたことが、人間のする業ぢやねえ！ 畜生だ！ 犬か何かのするやうなことを、このおらはやつてゐたんだ！ 知らずにやつてゐたんだ！ と、おら、急に思ひついたので……。そして、おら、

一夜中、泣いたぞな！』

『いつのことだえ？ それは？』

『今から半月ほど前……。おら一夜中泣いた。うそでも何でもねえ。誰にでもきいて見な。お雪にでも、お定にでも、お三輪にでもきいて見な。皆な知つてゐるだで。姐さん、何うしたのツて、皆な訊くからだつたで。さうすると、お袋はア、お駒、好い加減にしろ……。また蟲でも起つたんかツて言ふだよ。おら、いよいよ悲しくなつて、店に出てるたのをやめて、奥に行つて泣いた。月の好い夜でなよ、涙を拭き拭き見ると、お月さまが出てもう……。おら、いつそ飛び出して行つて死なうかと思つた。そして外に出た。うそでも何でもねえ。そしてあちこちぶらぶら歩いた。その時、ふと思ひ附いたのは、これは、何も死ななくても好い……。こゝから何處かに行つて了へば好い……。今まで見た人の顔から離れて了ひさへすれば好い。かう思つた。そして今度こそお前さに操を立て、屹度、屹度、本當の人間になる。さうすれば、何も死ぬことはねえ！ かう思つた。それで、その次に逢つた時に、逃げることを言つたよ』

男は黙つてきいてゐたが、『さうか、それでよくわかつたよ』

『わかつたら、嫉妬なんか言はねえで呉れな……。な、後生だで。その代り、此處さへ逃げりやもう決して、決してな、今までのやうなことはしねえからな』

男も深く撲たれたといふやうな風であつた。二人は暫し黙つた。風が靜かに薄の穂を動かして行つた。

三〇

『それで、其方は何うなの？』

『僕——？』

秋公は笑つて、『僕の方はいつだつて好いんだ？ すつかり支度は出来てゐるんだから——』

『でも、途中でつかまえられたり何かすると困るから、滅多なことは出来ないのね？』

『だから、此處から裏へ裏へとぬけて、庄内へ出るだよ』

『お前さ、路知つてゐる？』

『行つたことはねえけど、話にきいてゐるだで、何うか彼うか行けるだらうと思ふんだ。海岸の方へ行つたつて、村上に行つたつて、何方だつて捉まつて了うかも知れないからな？』

『本當だよ。それで、お前さの母さまのことは好いのかえ？』

それを言ひ出されると、秋公も流石に心が動かないわけには行かなかつた。かれは母親の祕藏子で、これまで全くあまやかされて育てられて來てゐた。『他に、何もねえけども……残り多いことはねえけども、お袋が泣くだらうと思ふと、それが可哀相だ——』と言つたことが再びかれには思ひ出されて來た。

『まア、好いや、そんなことは？ 何うせ、何も彼も捨てるつもりなんだから——』

『氣の毒だねえ』

『なアに……。その代り、お前がさつきいふやうに眞劍であつて呉れさへすれば、言ふことはねえ！ 何處かに行つて、二人でかせいで、運が向いて來りや、また、お袋にだつて逢はれねえことはねえだ』かう言つたが、少し考へて、『唯、兄貴がもう少し怜愍だと好いんだけども……あいつ、半分は馬鹿だでな……。おやぢはおやぢであの通り妾ぐるひなんかしてゐるし、お袋が可哀相だ——』

『本當ねえ……』

二人は黙つた。かれ等はいくら話しても際限がなかつた。で、また二三日經つて、あらためて日をきめることにして、そのまま右と左とに別れて行つた。これまで二人は大抵はこゝで逢ふことにきめてゐた。女が眞直にその道を下りて來ると、男は裏から崖を下りて、川に添つて、そして村の方へと出て行くのであつた。こゝまでは草刈女も入つて來なかつた。

お駒が男に別れて、一二町來たと思ふと、ひよつくりそこに入江巡查の莞爾した顔があらはれた。

『何處に行つただ？』

『ちよつとそこまで——』わざとお駒は落附いた風を見せた。

『えらいところまで来るんだな。これぢや、ちよつとわからねえ……?』

『何が——?』

『何がッて? うまいところで逢つてゐると思つてサ……』

『何うして?』

『しらばつくれなくつたッて、わかつてゐるよ、もう——。あんなところで逢つてゐるとは思はなかつた』

『何とでも言ひな』

お駒はすたすた歩いた。それと知られた上は、何うにでもなれとかの女は思つた。

『まア、待つた——』

『お前さになんか、何にも用はありやしなよ』

『勝木の旦那に知らせるぞ——』

『勝手にお知らせな……。お前さだッて、間男が知れたら、役なんかつとめてゐられなくなるだらう?』

かう言ひながら、お駒は後も見ずに、すたすたと歩いた。

『こら、待つた、待つた——』

三二

『何故?』

『なぜでも……』

『だッて、わけを言はないではわからないな?』

『私は貴方のおもちやぢやないもの……』

『それぢや秋公のおもちやだッていふわけかね?』

入江巡査は笑つた。

『それがわりいかえ?』

『わるくもよくもねえが、あんまり焦らすもんぢやねえよ。俺がゐるで、この村は落附いてゐられるんぢやねえか。そのくれることはわかりさうなもんだがな……。それで、俺、蔭になり陽になりしてお前のためを思つてゐるんだぜ!』

『もう、そんなもの、恩に被ないから、勝手におしな?』

すたすたとお駒は此方へ——峠道の方へと出て來た。

『こら、待つた』

入江巡査は追懸けて來た。手で持った劍がガチャガチャ鳴った。

『まア、お前さ、しやうがないね？ 歸らせてお呉れよ、今日は——』

さういふお駒の肩をつかんで、男はそれを引張つた。入江巡査の身にしては、何うしてもこのまゝ歸して了ふ氣にはなれなかつた。さつきだつて、勿論、秋公とお駒とのいちやつきをはつきりと見たわけではなかつた。そのしまひ際をちよつと立聞きしたばかりであつた。實際、かれは勝木の豪農に押入つた強盜がその山奥の洞窟にかくれてゐるといふので、それを捜しに來たのだつた。それは事實だつた。かれはその洞窟まで行つて見たのであつた。しかしそこには何の痕跡もなかつた。人が住んでゐるのなら、焚火をしたあとぐらゐるは是非なくてはならなかつたのであつたが、それもなかつた。で、かれはそまゝ、取つて返した。近路をして、川の縁に出やうとしたが、ちよつと話聲がしたやうな氣がしたので、何氣なしに、其方へ二三歩行つて見ると、お駒が——思ひもかけないお駒が秋公の膝に寄りかゝつてそして突伏して泣いてゐたのであつた。かれは全身のくわつとなるのを覺えた。何うして呉れやう！と思つた。餘程飛び出してあか恥をかゝせて呉れやうかと思つた。しかし、さうすれば女と自分との關係を絶つて了はなければならなかつた。否、そればかりではなかつた。さういふ一時の怒に任せて事を大きくしては、自分のわるいこともそれと共に世間にばつとするにきまつてゐた。かれは忍耐出來ないところを忍耐したのであつた。

『まア、好いやな……秋公とだつて、一時間も二時間も話してゐたぢやねえか。何もしねえ、本當に何にもしねえで、もう少し話をしろや？』

『だつて？』

『まア、好いから……頼むで……何にもしねえで……な』

お駒はそれをも振切ることは出來なかつた。爲方なしに、また元の位置へと引き戻されて行つた。一度身を任せた身は、何うしてもそれを拒むことは出來ないのであつた。『俺がわりい……。俺がわりい。あまり俺が言ひすぎた。そんなに言ふつもりぢやなかつただけども……ついな、な、これ、わるく思はねえでくれ——』さつきとは違つて、入江巡査はいやにやさしく機嫌を取るやうにした。そしてそのやさしい言葉の中には、止むにやまれないある欲求が藏されてあるのであつた。お駒は腰を下したまゝ、じつと下唇を嚙んだ。ひとり手に涙が出て來るやうな氣分になつた。

三三

『何か用？』

お駒は振返つた。かの女にしては、入江巡査が何の程度までかれ等の話をきいたか知りたかつた。

『まア、待ち給へ！ そんなに急がなくなつたつて好いぢやないか？』

お駒はいくらか足を緩めながら、

『だって、用があるんだもの……』

『それは用があるだらうけども、何もそんなにしなくたって好いぢやないか?』入江巡査はいつか追ひ附いて、かの女と並ぶやうになつてゐた。

『貴方も随分だね?』

この場合、機嫌を取るより他に爲方がないとお駒は思つた。

『何うして?』

『だって、そんな探偵みたいなことをしなくつたって好いだよ?』

『さういふわけぢやねえだよ……。ひよつくり出會したよ』

『うそ、言ふ?』

『本當だとも——』入江巡査は笑つて、『此間の勝木の強盗が、其の中さかくれてゐると言ふで、それを探しに行つただよ。ところがとんでもねえものを探しちゃつた——』

『うそ——』

『うそなもんか。だから、かうやつて、ちゃんと草鞋を穿いてゐるぢやねえか。何を相談してたんだ?』

『……………?』

お駒は黙つてゐた。

『え?』

『何だつて好いぢやないの!』

『ぢや、俺に言つたことは、皆な、好加減だつたんだね? 俺より他に、本當に心を見せたものはないやうなことを言つてゐるが、あれはうそだつたんだね?』

『だって、お前だつて、女をひとり堅く守つてゐるはしねいぢやねえか? 毎晩、太田屋に入り込んでゐるぢやねえか?』

『それはこれのためだよ……』入江巡査は指を丸めて見せた。

『お金のために、女をだましてゐるやうな男は、私は大嫌ひ!』

『勝手なことを言つてらア。俺、その金をお前にやつたぢやねえか?』

『……………』

お駒はまた黙つた。二人は並んで岨道を歩いた。

『此處等で、ちよつと休んで行かねえいか?』

『だって、早く歸らなくちや』

『まア、好いから、何も厭味はもう言はねえだで……』
お駒はすたすた歩いた。

『これ、お駒さん！ 頼むで——』

『……………』

『何うしたんだよ』

『煩るせいな』

かう言つたが、爲方がないといふやうに、お駒は立留まつた。それは芝草でも布いたやうに平らに草の生えてゐるところだつた。午後の日影が明るくさしわたつてゐた。

『厭——』

お駒は頭を振つて見せた。

『何うしても——』

『そんな馬鹿なことはあるものか？ 俺だつて、お前に心を見せたことは度々あるぢやねえか……。それに、お前には、まだ話さねえけどもな。好いことがあるんだよ。これでも、へぼ巡査と一言に言つて了へないだよ、旨い爲事があるんだ——それに成功すれば何處へでもお前と一緒に行くよ』

『厭——』

それでもお駒は頭を振つた。

三三

勝木から北中の方へ来る路を二人の中年の男は歩いて來た。一方の脊の高いのに比べて、一方はわらく脊が低く、横肥りに肥つて不恰好に見えた。

脊の高いのは、他でもなかつた。長兵衛であつた。

『何うだな？ もう一度、村のことに骨を折る氣はねえかな？』

『さアな……』

『何しろ、今度の分家のやり口では、とても村は成立つて行きやしねえぞ……。これで二三年續かうものなら、山林は皆な小國の方のものになつて了ふし、黙つてゐても村が潰れて行つて了ふのは目の前に見えてゐるア……。えらい村長さんがあつたもんぢやねえか。これまで何年となく北中と葡萄のものとしてあつた山林を、すつかり向うに取られて黙つてゐるッていふ奴もねえもんだ——』

『小國の村長と來たら、すりのやうな奴だでな、分家では、太刀打は出來ねえいな』

『だから、さう言ふんだ。此頃ぢやな、村の大頭連もちつとはさういふことを考へて來たッアよ。それはな、お前さんの時にも反對はしたにはしたがな、今ぢや後悔してゐるぜや、まだ、太田屋の方が好か

つたつて言つてらア

『お前なんねえか?』

長兵衛は笑ひながら言つた。

『俺、なれるならなるのだがな……。それは村のためだ、俺が村長になるとならねえで村が潰れると潰れねえならなるにはなるがな。それよりは、お前、もう一度なつて呉れねえか?』

『もう駄目だよ、俺は?』

いくらか悲觀したやうな口振で長兵衛は言つた。

『何故や?』

『俺の力では、とても駄目だ……。そのため、すっかり亡くしたので……。』

さう言はれては、無理には勧められないといふやうな表情をして、その脊の低い肥つた方は黙つた。路は谷川について幾曲りにも曲つて行つた。橋などもかゝつてゐた。

暫くしてから、

『困つたもんさな……。皆碌でなしばかりで。此間も分家にさう言つてやつたが、もう少し腕を振つて貰はにや困るつてな……。それに、風俗がわりいな……。めつきり此頃わるくなつたぜ』

『それは、俺なんかに責任があるんだがな……。』

『さう言へば、それもさうかも知れねえが、何うも不真面目でいけねえな……。何うかなんねえもんかな……。今更、愚痴を言つたところでしやうがねえが、鐵道は惜しいことをしたなア……。あれさへうまく行けば、今時分は、村だつてほくほくだつたらうがな……。何うも運がねえんだ……。村にも運がねえ、お前にも運がねえといふわけなんだが——さうかと言つて、お前汽車は出来るで、失望しねえで、道路でもよくして、成るだけ山奥の木材を樂に停車場まで、運び出すことを考へねえぢやなんねえだよ。それなのに、もう、あれから一年になるのに、そんなことには、ちつとも手をつけてるねえぢやねえか。丸で土偶のやうぢやねえか』

『段々やるにはやるつもりなんだらう。でも、さう急には手が廻りかねるツていふんだらう? 何うも切れるものときれねえものとは、同じ鎌でも大變な違ひだから……。』

『本當に、何うだえ? 今一度、骨折つてくれねえかな?』脊の低い肥つた方はかう熱心に勧めるやうにして言つた。

三四

二人は黙つて歩いたが、肥つた方は、急に思ひ出したといふやうにして、『さう言へばお駒が逃げたつてな?』

『お駒ッて？ 竹屋の——？』

長兵衛は初耳だった。

『それが、お前、誰と遁けたと思ふ？……こいつはちよつとわかるめいな？』

『さア——』

『何うだ？ 秋公だッていふぜ！』

『あの役場の？』

『さうせ！』

『そいつはたまけたな……。本當かな……。うそぢやねえかな？』

長兵衛は首を傾げるやうにした。あの手取りの、眼中に男といふものがない、何んな男でも手玉に取らずには置かないといふ女が、さうした若い、まだ二十五になるかならないくらゐの男と遁けるといふのは、何かそこに事情があらねばならなかつた。

『おら、今、勝木で聞いたばかりだ……。あの旦那、大騒ぎしてゐたつけ……。何でも庄内の方へ逃けると見せかけて、それとは別な方に行つたらしいなんて言つてゐたつけ。村上の停車場の方へ人が飛んで行つたよ……』

『さうかな、不思議なこともあるもんだな？ さうかな？』

いかにも腑に落ちないといふやうな表情を長兵衛はした。

『お袋、投り出して行つたやな？』

『さうとも——』

『不思議だな——何かわけがあるんだな、それは——。考へて、『なアに、それは、ぢきわからア』

『お前さ、お駒のことは、かなり詳しく知つてゐるな？』

『何うして？』

『だつて、一時は夢中だつたぢやねえか。今の勝木の旦那と、鞘當なしたことがあるぢやねえか？』

『あれは丸で違ふだよ……。さう思はれては困るな。奴とやつたのは、山林のことで衝突したんだな——』

さうは辯解したけれども、長兵衛はその話について、丸きり風馬牛であることは出来なかつた。何となく氣が塞るやうな氣がした。自分の所有にはならないまでも時々はかれの窓の下に来て、美しい色彩に富んだ翼を見せたり、好い聲をして囀つてきかせて呉れたりした小鳥がそのまゝ、遠くへ飛んで行つて了つたやうな氣がした。勝木のあいつばかりではなく、その他にも目を睜つたり胸を轟かしたりしてゐるものゝ顔が一つ一つはつきりと浮んで來た。

『でもめづらしい女だな？』

廢

驛

肥つた男の方が言つた。

『さうだな?』

『あゝいふ質の女があるのかな? この近所にはめづらしいな……』

『矢張、あれでも、いろいろそこがあるんだな。質つていふばかりぢやないな。始め嫁に行つたところかわるかつたよ。娘の時は俺なんかも知つてゐるけれども、あんな女ぢやなかつた。何方かと言へばおとなしい女だつた。あんな女になるとは思はなかつた——』村上の女の出来ない前、半年ほどそのお駒に長兵衛は現をぬかしてゐたのであつた。

『秋公? 不思議だな?』かうまた長兵衛は首を傾けた。

『お駒もさうだが、秋公の家でもびつくらしてゐるだらうな? あのお袋顛倒して了はなけりや好いがな? 氣の毒だな?』

『金は持ち出したかね?』

『あんまり持ち出しはしねえつていふことだ。男よりも女の方が餘計持つて行つたといふ話だ——』

『ふむ』

暫し二人は黙つて歩いた。名高い深い淵のところに来たらしく、溪流の音は凄しくあたりに響きわたつてきこえた。

三五

『それでもぢきわかるな』

『さア——』

肥つた方は考へて、『大抵わかるだらうと思ふけれども……』

『お袋は半狂亂だらう?』

『それはさうだらうな……。しかし、因果が報つて來たと思へば、あきらめもつくだらうぜ!』

『それも、さうだな……』

長兵衛は笑つた。

『あのお袋ぐらゐる、強慾な奴はないからな……。あんまり娘を食物にしたよ。金、餘程持つてゐるべし……』

『さア、餘程持つてゐるべいな』長兵衛は深く深く考へながら歩いた。さういふことよりも、男女のこゝとが深く深くその身に染みわたつて考へられるやうな氣がした。

何處にも此處にも男と女の仲ばかりであつた。誰も彼も皆そのため苦しんでゐた。お駒すら——あの色戀を少しも重くなどは見てゐないお駒すら、親を棄て、若い男と逃げたかと思ふと、不思議な氣が

した。

『さういふことが多い……。何處を見廻しても男と女の世の中だ……。』つくづく長兵衛は溜息をつくやうにして言つた。

『そんなに面白いかな？ 色戀といふものは？』

肥つた方の男は、其方の方には餘り興味を持つてゐなかつた。

『さうだな……お前さんは、そつちには縁は遠い方だな……』

『縁が遠いも、近いも、あんなこと、きまりきつてゐるぢやねえか。いくらやつたつてあんなこと同じぢやねえか？』

『お前さんにはさうだな。縣會の選舉運動でもやつてゐる方が、何うしても適當してゐるだよ』

『それはさうとも、政治と女と一緒にされちや堪まらねえ！』

『あの道樂も面白いには面白い……。あれも、いざとなると、女や賭博と同じだよ。一緒にされてはツツ言つたけれども、田舎の政治ツツいふ奴もいやなもんだよ。深入りすると、矢張、身を亡ぼすよ』

『それや、さうとも……。あれだつて、うはの空では出來はしねえとも……。そのために財産を亡くしたり、身を亡したりするものはいくらもあるでな……。でも、同じ財産を亡くすなら、國家のためになくすのだからな』

『誰でも熱心になつてゐるものは皆なさういふんだよ。それは國家のためと言へばさうも言へるかも知れねえけれどもな。俺なんかもう懲々だよ。あんなことに携はつてゐるたつて際限がねえ……。それよりは、まだ女つ子の方がましだな……』

『駄目だな……』

肥つた方はかう言つて笑つたが、

『女も好いが、ひとつ、村長の方も、も一度やつて呉れねえかな……。やる氣にさへなつて貰へば、それで好いんだ。あとは俺いくらでもやるんだ……。俺が今度は眞劍になつてやるだ。だつてお前さん、本當に、まごまごすれば、村は潰れて了ふだ……。あゝいふ奴等にはまかせて置けねえだよ。何うかして、もう少し村のためになるやうにしなくつちや駄目だからな』

『俺なんか、もう腕がねえな。何も彼も破産しちやつてゐるやうな人間だから……。』長兵衛は笑ひもせず眞面目に言つた。

三六

『まア、少し考へて置いて下さい』かう肥つた方が言つた。

『何處かに行くのかね』

『これから、ちよつと山の方に寄つて行かうと思ふから——』

『さうかえ？ 何うだえ？ ちつとは旨く行きさうかえ？』

『好加減なもんだな？』

『でも、資本主がちゃんとしてゐるで、大船に乗つたやうな氣でゐられるにはゐられるな』

『まア、それはさうだが、また缺損、缺損ぢや長つゞきがしねえや。何うも弱つてゐるのさ』

『でも、出るには出るんだらう？』

『さ……何うもはつきりしたことは言へないが……。あるにやあるんだらうと思ふが、何うもそれまでに設備に食はれて了ふでな……。そこまで持ちこたへるのが大變だ』

『それはさうだらうな』

長兵衛は早口に、『それはさうと、鑛夫は何人ぐらゐる入つてゐるんだ？』

『それでも二三百はゐるべいな？』

『此間の騒ぎは、何うした？ もう大丈夫か？』

『何アに、あれや大したことはねえ。わるい奴がひとりゐてな。それが資本主だとか、労働者だとか言つて、雑誌なんか喰ひかじつておつ始めたことだで……。そいつを放逐したら、すぐ火が消えたやうになつて了つた——』

『俺も行つて見べいか？』

突然に長兵衛は言つた。

『用はねえか、用さえねえけりや行つて見い？』

『邪魔ぢやねえか？』

『何アに、ちよつと見て來るだけで、冬籠りの支度をそろそろしなくつちやなんねえで……。それ

もちよつと世話を焼いてやらなくつちやならねえで……。』

『誰が行つてゐるだ？ あそこに？ 始終？ Sか？』

『奴も行つてゐる』

『Tは？』

『Tも行つてゐる筈だ——だが、あいつは頑固でいかん。今度改選の時には、皆なして落してやることになつてゐるんだ……。何うも、話が運ばなくつて困るでな？』

『さうだな。あいつなんかあまり利口とは言へねえな……。』長兵衛はふとあることを思ひ出したとい

ふやうに、『それから、寒川のMはあそこから脱けたつていふぢやねえか？』

『よく知つてゐるな』

『それは知つてゐるよ。そのくらゐのことは』

『さうかな、誰もまだ知らん筈だがな』肥つた方は長兵衛の顔を見て、『誰からきいた?』
『それはわかるよ。あゝいふことは、何處からともなく、ひとり手にわかつて来るものだからな』
『しかし不思議だな……』肥つた方は深く考へるやうな顔の表情をしたが、丁度路のわかれに近く來
てゐるのを見て、『行くか? 何うする?』

『邪魔でなけりや?』

『邪魔なことなんかはねえ』

『ぢや、行つて見やう。もう一年も行つたことがねえで……。ちつとは好くなつたらうでな』

『うん、それは好くなつた。鑛山らしくなつたな』

で、二人はそのまゝ、鑛山の方への路へと曲つて行つた。

三七

それはそこからさう大して遠くはなかつた。谷川に添つて、ぐるりと山の裾を廻ると、小さな峠があ
つて、細い路が次第に人々をその上へと伴つて行つた。それを上りきると、向うの摺鉢の底のやうなと
ころに、トタン屋根だの、なまこ屋根だのが、ピカピカと午後の日影に光つて、細い、太い五六本の烟
突から、黄いまたは灰色の、または黒いもくもくとした煤煙が西風に吹かれて靡いてゐるのを目にする

ことが出來た。

長い間黙つてのぼつて來た長兵衛は、此時始めて口を開いた。

『ホ、大分爲事を始めてゐるぢやねえか?』

『でも、駄目だよ。あゝやつて器械を動かしてゐる方が、却て損なんだからな……』

『もう、そんなことはねえだらう?』

『いやいや動かさねえ方が好いんだ……。しかしな、それでもあそこにある鑛夫どもが困るでな?』

『さうかな』

『まア、損だけでも、鑛夫のために動かしてゐるやうなものだよ』

『それでも、一年前とは、ぐつと人家が殖えたぢやねえか?』

かう長兵衛は言つた。長兵衛にもかなり詳しくこの鑛山の内幕は知れてゐるのであつた。かれが村長
をしてゐる時分には、一月に一度はそこに呼ばれて行つて、交通のことだの、發掘のことだのについ
て、種々頼まれもすれば、意見をきかれましたのであつた。今は別な人になつたけれども、この前の社
長も、またその前の社長もかれはよく知つてゐた。否、かれはこの鑛山に初めて資本を投じた人のこと
をもよく知つてゐた。それは尠くともかうした地方によく見られる悲劇と言つて好いものだ。それは北中
の隣村で、峠を一つ小國の方に越したところに祖先以來の家屋敷を持つてゐた人であつたが、ある年東

京からやつて来た地質の大家だといふ博士の話をきいて、たしかにそこからは銅が取れると確信して、そしてその事業を始めたのであつた——がそれは決して失敗でなく、半ばは成功したのではあるが、設備の如何に由つては、いかやうに多量にも銅が取れるといふ確證だけは握つたのであるが、しかも、資本が足らず、たうとうそのためにかれは死し、一家は離散しつくしてしまつて、一粒種の美しいお衆といふ娘も、庄内のお酌に賣られて行つて了つたのであつた。今そのことが長兵衛の頭の中に思ひ出されて来た。

『Kさんのことを考へると、世の中はつまらなくなるな』

『うむ』

肥つた方はかう答へた。今時分、何うしてそんなKのことなどが考へ出されて来たといふやうに——。

『家族は何うしてるか知らねえか?』

『知らねえな』

『初めに人身御供にあがつたやうなもんだからな? Kさんは?』

『何うして、そんなことを思ひ出したんだね?』

『何うしてッていふこともねえが、よくこの坂をあの人と一緒に歩いてゐたことがあるでな』

『あの人なんか運がねえんだな……。もう少し生きてゐれば好かつた——』

『本當だな……。あの娘なんか、可哀相だつたが、何うしたかな?』

『今ぢや、仕合せだッていふ話ぢやねえか?』

三八

『さうかね? 何か噂をきいたかね?』

『何でも、酒田あたりの大盡の思ひものになつてゐるッていふ話だよ。仕合せに暮してゐるんだらう?』

『う?』

『思ひものぢや、いくら仕合せでも可哀相だな』

『何アに、さうでもないよ。世の中は仕合せにわたれさへすれば、名なんぞ何うだッて好いだ……。』

『でも、な、あの人は可哀相だつた。俺は一度庄内で逢つたことがあつたが、その頃はまだ一本立になつたかならないばかりで、細い指をして三味線を弾いてゐるが、氣の毒だつた。もつといろいろ慰めてやりたかつたけども、さうも行かすな……。その時、十八九だつたよ』

『俺は知らねえ、その娘は?』

『兎に角、あの家族だけでも、あとの社長達が見てやらなけりや、うそだつたんだ。それを、俺、何遍も前の社長に言つただけども……。』

『鑛山としては、まだ、それまでに成功してゐないんだらう? それをするにや、もう少し大きくな

らなければ?』

『そんなことがあるもんか。今ぢや立派に鑛山として成立つてゐるぢやないか。そしてさういふ風になつたもとはといふと、皆な、あの人が家産を蕩盡してまでもやつて呉れたお蔭ぢやないか。それを忘れては株主だちにすまねえよ』

『世の中は萬事さうだな。運といふのかな、矢張……。好い鹽梅に行くと、ちやんと御膳の出來たところ坐ることが出来るが、わるく行くと、そのお膳をこしらへるために自分の一生を棒に振るやうな場合もあるでな……。あの人なんか、運のわりい方だ——』

『それはさうだな……。お前の言ふ通りだ……。長兵衛は深い感慨に打たれたやうに、『大きく言へば、何が何だかわからないといふことになるなア……。運の好いものとわるいものがあるので、それで持つたやうなものだからな』

二人はこんな話をしながら、次第に鑛山の人家の錯落として散在してゐる方へと下りて行つた。そこには低いなまこ板で葺いた長屋らしいものや、バラック式の小さな家のやうなものが一つ一つあらはれ出して來た。そこには煤煙で眞黒になつた樹木があつた。門があつた。入口があつた。またポンプ仕かけの井戸があつた。そこでは、赤兒を結びつけに負つた上さんが、七八歳の子供を叱りながら、頻りにポンプを押してゐた。やがて水が瀧津瀬のやうにそこに置いてある手桶の中へと落ちた。

『ほ! これは大變職工が殖えたな! 一年見ずになると、かうも違ふもんかな』

『見かけ倒しさ!』

肥つた方は笑ひもせずと言つた。

『それでも、ちつとは、だるまが入つてゐるかな? 此處にも——』

ある茶屋らしい店の前を通つた時、長兵衛は言つた。

『何うもいくらかはゐるな。鑛山の方針では、つとめて、さういふものを入れないやうに、入つて來たら追拂ふやうにしてゐる方針なんだけど、何うもすつかり處分して了ふつていふわけには行かないらしいな……。さういふものがないと、亭主持が安心してゐられねえでな……。』

『さうかな、矢張?』

『何うしても、人の嬬や娘に手を出すやうになるでな……。却つて風儀がわるくなつてしやうがねえさうだ?』

『さうかな?』

人間ツていふものはしやうがねえもんだな!』

『本當だな』

『矢張、女なしには、一刻だつてゐられねえんだな』かう慨嘆するやうにして長兵衛は言つた。しかしそれは他の爲めばかりではなかつた。

凄じい音響で機械が動いてゐるのを他所に、かれ等は役員達のゐる室へ入つて行つた。そこにも煤煙の臭ひや、ガサガサした空氣が漂よつて、硝子戸の棧と言はず、敷居と言はず、テーブルの上と言はず、埃塵が一面に堆積してゐるのをかれ等は目にした。そこらにゐる人達も、いやに黄ばんで黝ろすんで、疲れ果てゝゐるやうな氣がした。

『オ、前の村長さん！ めづらしい人がやつて来た……』

かう言つて、そこに、一隅に席を占めてゐる背廣姿の四十男が莞爾しながら立つて来た。そしてその傍にあつた椅子を持つて来て、それをそのまま、そこに竝べた。

かれ等は腰を下した。

肥つた方は言つた。『何うしたな？ Sは？ あれきりか？』

この問はかなりに直接なものであるらしかつた。四十男のKはその返事に狼狽して、此處でそんなことをきかれては困る、ことに、長兵衛といふやうな他人のゐるところできかれては困るといふやうな顔色をしたが、すぐそれを笑ひにまぎらすやうにして、

『困つたな？ あれも——』

『あれつきりか？』

『脈は上つたんか？』

『さういふわけでもねえけれど』考へて、『それはまアあとで話さう？ それよりも、君に言はなけりやならないことは、何うも坑内不穩でいかん？』

『だつて、昨日すつかり鎮靜したやうなことをきいたがな？』

『まア、おもて向きは、さうなつたんだがな……。何うもいかん。五六人、頑強な奴がゐるでな？』

『西坑の方か？』

『何方もわるい……。それに、此方の工場の方でも何時突發するかわからんやうな形勢になつてゐる！ それでSは西坑に行つてゐる！』

『困るな』

肥つた方は考へて、『あら方、要求を入れてやつたぢやねえか？』

『さうとも……此方は出来る限り讓歩したんだ。この上讓歩してはとてこの鑛山は成立たない……そこをよく詳しく言つてきかせただけども、何うもわからないでな……』

『しやうがねえな』

かう言つたが、『西坑の取締の西山は何うした？』

『あれは、今朝、滅茶苦茶に撲られて、病室で寝てる……』

『原は？』

『原は何でも坑から遁け出したとか何とか云つてゐらア……。なアに、それでもな、西坑だけなら、何うにか押へることが出来るけれど……全體の氣分がすべて不穩だから困るよ』

『困るな』

肥つた方はかう言つたが、『それでも動いてゐるにはゐるな……』

『まア、辛うじてだな……。いつ何うなるかわからんな』

Kは肥つたNと顔を見合せたが、

『ちよつと？』

と言つて椅子から立上つた。

『何か用かえ？』

『うむ……』かう言つてKは立つて向うの室の方へと行かうとした。で、肥つたNも立上つて、『ちよつと失敬するから！』かう挨拶して、そこに長兵衛をひとり残したまゝ、そのまゝそつちへと入つて行つて了つた。機械の動く音響が耳を聳するばかり凄じくあたりに響き渡つてきこえた。

四〇

長い間、長兵衛はそこにゐたけれども、肥つたKも、Nも容易にその姿をそこに現はさなかつた。かれは茫然としてゐた。椅子に腰を下して、窓からさし込んで来る黄い日影を眺めてゐた。

種々なことが雜然としてかれの心を繞つた。嬢のことも思はれば、娘のお金のことも思はれた。直のことも思はれた。否、そのあとから村上の女につこりした顔があらはれると思ふと、今度は若い男と遁けたお駒のことが浮んで来た。すべて一緒に——早く廻る走馬燈のやうに混雜まじりとその眼の前を掠めて行つた。(さうしやうか？ あのお駒すら、さうした決心をしたではないか？ 今までの生活を捨て、行つたではないか？)かう考へてかれは答の來るのを待つた。

答はしかし容易にやつて來なかつた。まだそれまでにするには、餘裕もあれば隙間もあるやうな氣がした。では、妻を許すか？ あの不義の妻を許して、新しく生活を立て直すか？ あの貞介の言ふやうに、村上の女をよすか。そして山の中の、あの廢驛の空氣の中に一生を終るか？

さうすれば親類達はいかやうにも力になつて呉れるに相違ない……。妻にしても……元はと言へば、自分がるいからあゝいふ形になつて行つたのだ。絶対に妻ばかりがわるいとは言へない。許せるだけは許してやらなければならぬ……。しかし、しかし、それが出来るか？ 今まででさへ、一緒に床に

眠ることなどは出来なかつたのに——更に、さうしたことのがわかつた今日、さうした男と出来てゐることがわかつた今日、平和な家庭が想像され得るであらうか？　いくら許す心持になつたところで、夫婦として、完全な生活が営まれ得るであらうか？

『とてもとても……』

かうかれは首を振つて獨語した。

とてもそれは出来なかつた。あの妻と完全な夫婦生活を営むことなどはとても想像出来なかつた。いくら意志でそれをしやうとしたとて、體がその言ふことをきかうとは思へなかつた。それほどまでに、かれ等の性慾生活は離れて来て居た。

(その點では、まだ、あのお留の方が好い……)

こんなことが頭に上つて來た。そのお留のことについては、かれは不思議にも後悔してはゐなかつた。あの女だとして、妻よりも好いと思はれた。尠くともそのお留からは愛情が出て來た。表面では、汚らしいやうに——何うしてあんなものに手を附けたらうといふやうに、また世間に對してもきまりがわるいといふやうに思ふのであつたけれども、しかも妻のやうに全く愛情はなくなかつた。その暗い汚ない六疊の一室がひよつくりと眼の前に浮かんで來た。

かれはじつと窓からさし込んで來る日影を見詰めた。考へても考へても際限がなかつた。何うして好

いかもわからなかつた。村上の方へ行くのが一番好いやうにも思はれたけれども、そこに行つて、もし、失敗したら……？　女に捨てられるやうなことがあつたら……？　そんなことはあるまいとは思はれるけれども、もしあつたら？　萬が一にもあつたら？　それを思ふと、はつきりした決心にも出て行けさうにも思はれなかつた。

(兎に角、妻の處分だけをしやうか？) かう考へたが、すぐまた首を傾げた。それも矢張容易に出來さうには思へなかつた。お金のことを考へただけでも、出來さうには思へなかつた。

『何うしたら好いのか？』

かれはまたかう口に出して獨語した。

四一

そこへ、外から事務員が凄じく音を立て、入つて來た。

『大變だ！　大變だ！　前の村長さん遁けねえぢや駄目だ……。西坑の奴等、其處までやつて來ただ

で……』

『え？』

『Kさんやられた……』

驛

『え？ Kさんが……？』

かう言つて窓の方に眼をやつた時には、向うの山の谷合から此方へとかけて、黒山のやうになつて群衆が押寄せて来るのを長兵衛は目にした。此方の工場でも、その急報に接したらしく、警笛がけたましく長く吼えるやうな響をあたりに震はせた。

否、そればかりではなかつた。その急に赴く人達が五人、七人、十人と固まつて飛んで行くのが見え、鑛山にゐる巡查達も剣を鳴らして走つて行つた。

『何うしたんだ？』

『何うしたも、何にもねえ……。もしものことがあつてはつまらねえ。お逃げなせい、お逃げなせい』

……その事務員はがたがた震へながら、長兵衛の袖を引張るやうにした。

『大丈夫だ……』

『大丈夫なことがあるもんか、俺、Kさんが打たれて、顔から血が流れてゐるのを見て飛んで来たんだ……。餓えた狼のやうだでな、奴等……』

『大勢か？』

『大勢とも……さア、逃げなさい……。おい、皆な逃げる、こゝにゐて、えらい眼にあつたつて知らねえぞ！』かうその事務員は大きな聲を立てた。

で、皆なバラバラとそこから遁け出した。執つてゐた事務も、帳簿も、書類も、何も彼もそのまゝにして……。長兵衛はそれでも猶ほそこに立つてゐたが、形勢が益々不穩で、實際、まごまごしてゐたら、何んな傍杖を受けないとも限らなかつたので、そのまゝそこを出て、裏の山の方へのぼつて行つた。そこからは西坑の方も一目に見えた。成ほどそこには大勢群集が集つてゐる。それが遠くの方は黒いひとつの塊のやうに見えて、それが近くなるにつれて、次第にはつきりと鑛夫の群であるといふことがわかつて來てゐる。旗見たいのものも一本二本見えてゐる。しかし、その群集が此方まで押寄せて來るとは長兵衛には思へなかつた。それに對抗してゐるのか、それともまたそれと同類にならうとしてゐるのか、それは何方だかわからなかつたけれども、此方から向うへ出て行つてゐる群集もかなり多かつた。それは丁度兩方から落ちて行つた雪崩のやうであつた。警笛は頻りに山から山へと反響した。

かれの傍に五六人の職工が立つて見てゐた。それは坑夫ではなくて、工場に出てゐるものであつた。

長兵衛は訊いた。『一體、何うしたんだえ？』

『また例の示威だ……。大したことはなからうとは思ふけど、しかし會社も酷だ……。もう、あいつ等は二日も飯を食はねえだ……。な……。もう少しよくしてやれば好いんだ——』

と、傍の一人は言つた。『でも昨日、解決がついた筈ぢやなかつたか？』

『駄目だ、駄目だ……。』

……

かう前の一人は頭を振つた。

午後五時過ぎの日影は、その時ぱつと明るくその谷合の窪地を照した。群集はワツと聲を立てた。そして雪崩のやうに此方へと押寄せて来た。

四二

長兵衛はじつとして見てゐた。黒い群集の影は續々と山の坑の方から出て来た。かれは辛いやうな、あさましいやうな、人間のどん底を見たやうな氣がした。何處に行つてもつらいことばかりだつた。艱難なことばかりだつた。箇人の苦惱がそこにあると共に『群集』としての苦悶も、歴歴とそこに實現されてあるのであつた。さうして苦しんでゐるのは、自分ばかりでないのを痛切にかれは感じた。

『人間には換へられねえでな……。會社も何うかするだらう？』

かう長兵衛は傍に集まつてゐる人達に言つた。

『さうだな』

『いや、それは駄目だ！』

『社長がそれほどわかかつてゐればこんなことにはならねえ！』
かうした聲がそこからも此處からも應じた。

『でも、會社が成立たねえツて言ふ話だがな？』

『それは會社の方の人の言ふことだよ……。今年は鑛山は儲かつた……。配當だつて大變な額だ……。それなのに、お前さ、坑の中の職工はえらい眼を見てゐるだよ。酒も飲めねえくらゐならまだ我慢も出来るがな……。飯も食へねえだよ』

『それは黨派を組んで、會社を脅かすからだらう？』

『まア、それもあるがな……。西坑の部落に行つて見なせい。それは目も當てられねえで。二日も三日も飯を食はねえものはいくらもあるだ。昨日、あらかた、話がまとまつたんだが——好い鹽梅だと思つたんだが、矢張、いざとなれば、先頭に立つたものを處分するといふので、それで、また元の暴動になつて了つただよ。何しろ、あの統領のAは豪い男だでな。まだ、二十八九だが、えらい人望があるでな……。』

『あ、さういふ奴があるんだな？ それに煽動されてゐるんだな？』

『煽動ぢやねえ！ 本當のこつた……。お前、一體何だ？』向うの方にある破れた服を着た男は長兵衛の方を見てかう怒鳴つた。

長兵衛は黙つて了つた。一種恐怖に近い情がかれを襲つて来た。かれはそのまゝそこから歩き出した。こんな巴渦の中に入つてゐて何んな傍杖を食はないものでもないとかれは思つた。かれは五六町上のところに行つて、安全と思はれる場所に身を置いた。

……。それを思ふと、かれは堪まらなかつたことを思ひ起した。

その時、村上の女は言つた。

『今日は何うかしたの？』

『何うして？』

『だつて變だもの……。調子が丸で違つてゐるもの……。』

『さうかな……。』その時かれは手を拱いて深く考へた。入江巡査と嬢の姿がその時はつきりとかれに浮んで來た。

『何か心配ごとでもあるの？』

『いや、別に……。』

『それなら好いけども……。何だか變だから……。』

長兵衛はその時のことを思ひ出して頭を振つた。何うしてもそれより他爲方がなかつた。村上の女を捨てるか？ 嬢を捨てるか？ さうでなければ、自己を捨てるか？

自己を捨てる？ それが一番好いのはあるが、しかも一番難かしかつた。とてもそれは出來さうには思へなかつた。かれは村上の女と、嬢と、何方が捨て好いかといふことについて考へた。勿論、かれとしては村上の女は捨て難かつた。嬢よりはぐつと捨て難かつた。しかし嬢を捨てるには、男を捨てな

ければならなかつた。娘のお金を捨てなければならなかつた。祖先以來の家産を、故郷を、家族を全く捨て、了はなければならなかつた。しかし今は躊躇してゐる時ではないやうにかれには思はれた。鑛山で見た凄じい光景がかれの心の悲劇と全く雜り合つたやうな感じがした。

四四

『もう言ふな、言ふな……。』

長兵衛は手を振つて留めた。

『でもな……。お上さんも餘りだと思ふでな……。』

『もう澤山だ』

『おら、今度こそもう眼に餘つたで、それで言ふだよ。さうでなけりや、こんなことを言ひはしねえだよ。もう今ぢや、村でも知つてゐるものが多いからな……。子供のことなんか少しも考へてゐるねえでな』

『まア、よせ……。』

長兵衛はまた手を振つて留めた。そのまゝ、お留は向うの方へと行つて了つた。

お留の言ふところに由ると、かれが村上に行つてゐる留守には、入江巡査が公然入つて來て、子供が